
聖フランチェスカ学園南洋校舎～真・恋姫†無双異伝

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

聖フランチェスカ学園南洋校舎〜真・恋姫†無双異伝

【Nコード】

N5390L

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

聖フランチェスカ学園南洋校舎。それは小笠原諸島よりも南に位置する南洋最大の島にして最大の私有地。学徒の天地にして可能性のパラダイス、となるはずの南の島。南洋校舎再開から今まで、その夢が現実になっていない。しかし、その南洋校舎に夢をかけた少女達が、三つの生徒会がしのぎを削る戦いの島。そこに一人の少年が入学することで始まる物語。（タイトルに原作をちょこつといれました20110319）

くプロローグ

聖フランチェスカ学園南洋校舎。それは小笠原諸島よりも南に位置する南洋最大の島にして最大の私有地。学徒の天地にして可能性のパラダイス、となるはずの南の島。南洋校舎再開から今まで、その夢が現実になっていない。しかし、その南洋校舎に夢をかけた少女達が、三つの生徒会がしのぎを削る戦いの島。そこに一人の少年が入学することで始まる物語。

くプロローグ

ご存じ聖フランチェスカ学園は、元々女子校だった。

が、少子高齢化を理由に男子にも門戸を開いてみたものの、集まったのはいわゆる「性少年」ばかりであったため、厳しい条件を付けて篩ふるいにかけたところ、毎年入学資格を得られる男子が入学するとはなかった。

これでは門戸を開いた意味がなかったかと言えば、そうでもなかった。

いままで入校をあきらめていたような女子まで応募してきたものだから、非常に大騒ぎになってしまった。

すべての人間を引き受けるわけではないが、それにしてもすべてを門前払いにしてしまうには惜しい人材と資金。

紛糾する理事会で理事長は決定を下す。

「・・・南洋校舎を復活させるのだ!!」

聖フランチェスカ 南洋校舎といえば、その歴史を明治大正の昔にさかのぼる。

最強にして完全なる大和撫子の育成を目標にして設立されたその

校舎は、父島の遙か南方に位置し、全寮制にして一つの都市国家としての体を成すほどの隆盛を極めていたが、終戦とともに閉鎖され、今では海猫たちの繁殖地か、南洋合宿地としての機能しか残っていなかった。

開校に必須の準備は決して少なくない。資金も大量に必要なだ。が、溢れる校舎内の生徒、集まる人員、すべてを賄える資金までそろってしまえば、この不景気に嘘ともいえる工事の開始であろうと踏み切れると確信させた。

着工から丸々二年で開校した南洋校舎。

はじめは希望者のみに移り住んだ絶海の孤島と思われていたが、一つの噂が流れを変える。

『南洋校には三つの生徒会あり。「覇」を「絆」を「徳」を捧げる乙女の戦場。南洋校舎で頂点に立てれば、夢が叶う』と。

熱い思いを秘めた乙女たちが、南洋校舎を目指し始めたのだった。

南洋校舎開設から五年。

聖フランチェスカ学園に初めて男子生徒が入学した。

目元麗しいだけではなく、気さくな笑顔が試験管のハートを直撃したという噂の少年。

高等部編入一年、北郷ほんこう一刀かずと。

本校舎ではどのクラスにはいるか、クラブはどこに入るのかと大騒ぎであったが、理事長は自慢のカイゼル髭をしごきながら言う。

「・・・北郷一刀、彼は南洋校舎行きだ！」

絶叫とともに今年度もまた南洋校舎希望者が殺到した。

くプロローグ（後書き）

はじめまして、神代ふみあきと申します。

皆さんご存知の「恋姫」たちを、それっぽく現代に引っ張ってきてみようと思い、こんな舞台を準備してみました。

名前や設定を色々と弄ってしまいますが、そのへんは妄想の一部ということスルーの方でお願いします。

定期的なアップをしていきますので、長い目でお付き合いください。

第三生徒会ルート 第一話（改）（前書き）

三つの生徒会が支配する島、南洋校舎。

ひとつの自治区であり、ひとつの都市であり、三つの自治区であり、三つの都市であり。

そこは南洋の学び舎。

遙か彼方の絶海孤島。

第三生徒会ルート 第一話（改）

第三生徒会ルート

第一話

「北郷一刀「慣れるのに丸二日かかりました。．．．今でも我慢しています。」

湖や湾内を進む船に比べて、外洋を渡る船の中は快適とはいえない。

大きく揺れるし上下に動くし目も回る。

下手をすれば十数メートルの浪を降下することすらある。

とはいえ、そんな揺れなどはまだいいし、狭い部屋などについては気にしないことにしていた。

が、いくら新入生の男が僕一人だからといって、女の子と同室って言うのは行き過ぎだと思う。

はじめは驚き喚いた彼女たちも、この三日にわたる船旅でいつの間にか慣れてしまったようで、まるで気にしない様子で着替え始めたりするのが困る。

思わず部屋を飛び出すと、背後で笑いが聞こえるあたり、からかわれていることは間違いない。

でも、彼女たちは、初めてのルームメイトたちは、あけすけで気持ちいい感じの女の子ばかりで、何となく仲間意識を感じさせてくれている。

「．．．北郷、いいよ。」

言葉少なな彼女、楽進^{ラクシン} 凧^{なぎ}に声をかけられ部屋の扉を開くと、すでに干田^{かんだ} 沙和^{さわ}も李^{すも} 真桜^{まおう}も寝間着になっていた。

「いやーん、カズトってばのぞき」

「あかん、あかんでー、ちまよったらあかんよー」

ここ毎日くる返される言葉に苦笑い。

「・・・沙和、真桜。北郷が居づらくなるようなことを言うな。私たちは【飯スト】なんだからな。」

「あははは、凧ちゃん、冗談なのー」

「そうやそうや、日々日々の交流で好感度があがるんやでー」

「な（ね）ー？」

この船旅で一部屋が4人構成になっていて、食事の順番やお風呂の順番も部屋ごとになっていた。

四人ひとチーム構成の形態は、じつは明後日に到着する南洋校舎でのシステムに繋がる。

今のところは仮のチームだけど、南洋校舎に到着すれば、改めて希望者がひとつのチームとなり、学校生活をとにもすることになるのだ。通称【飯スト】

「あーあ、なんで一刀くんだけ、勧誘じゃあいけないのかなあー。ちよつと不満なのー」

「そうやなー、うちの勧誘がオツケーなら絶対うちら「ひとチーム」やもんなー」

「・・・私も、北郷と・・・」

「凧」「凧ちゃん」

思わず三人が抱きしめある。

ちょっと感動的な風景を端から見ているには訳がある。

実のところ、今年度に入学できた男子が自分しか居ないため、学校側の配慮により強制勧誘やアプローチを禁止にして、チームの自由選択を僕自身が行うようにしたのだ。

事前に僕はオリエンテーリングで、飯ストを組む際の注意事項を言い含められている。

たとえば「恋愛感情で組むな」とか「損得勘定で組むな」とか、いろいろ。

確かにこの場の感情で決められるなら、確かに彼女たちと組むのもおもしろいと思うのだけれども、事情が許さないなら仕方ない。カイゼルヒゲの理事長からも、きつくその辺は言い含められているし。

「・・・僕さ、この船旅は一生忘れないと思うよ。風、真桜、沙和、君たちと過ごしたこの船旅は、ぜったい。」

目をうるうるさせた三人が僕に飛びついたところで証明が消えた。もちろん、消灯時間だからであり、不純な行為のためではない。

「北郷一刀」・・・絶句の風景。」

長い長い船旅を終えて港に到着した僕たちは、蒼天を見上げて、そして目がつぶれるほどの青い海を見回した。

静かな海と青空の境がない、そんな話を思い出すほどの青。

呆然とする僕たちを取り囲むように人垣ができた。

「よくきた、新入生たち！　すでにこの土地を踏んだ君たちは戦う

心構えと己を磨く才覚があるものたちと断ずる」

小麦色で銀髪美女が、ジャージをひっかけたチノパンTシャツ姿で現れた。

「私の名前は蓋黄^{ふたぎ} 祭^{さい}、合同保険局の監督じゃ。」

ぐいつと胸を張る美女、祭先生をおもわずみていると、彼女の視線が僕とぶつかる。

「……ほほお、お主が開校以来初めての男、か。」

にやりとほほえむ彼女が指を鳴らすと、人垣が一気に動いた。

「北郷一刀、ソナタを一時保険局預かりとすることは許可を得ている。おとなしく同行してもらおうか。」

背後でゴゴゴゴゴゴと言う音が聞こえるような笑顔の祭先生と僕の間三人が前にでた。

「……出航時、理事長から説明された話と違う。」

「そうやそうや！ 一刀は一刀の意志ですべてを決める、そういうことにんつとるはずや！！」

「そうなの、そうなの！！」

思わず我が飯ストたちの友情に胸を熱くした。

「……ふん。聞いていなかったのか？ 我らはすでに許可を得ている、といっているのだよ。」

思わず一步下がる三人であったが、高らかな声がそれを遮る。

『許可ですって？ それは誰の許可なのかしら！？』

人垣を割るように現れた三人。

一人は小柄な金髪美少女。

一人は長身長髪、黒髪が似合う美少女。

そしてもう一人は、長身長髪の長髪をみじかみに変えるだけで先ほどの美少女とური二つな少女。

その三人をみて祭先生は舌打ちをした。

「少なくとも第一生徒会は許可していないわよね？ あと理事会も許可していないのは確認しているわ。」

響くような声に祭先生は齒がみした。

「しかし、あなたが合同保険局の監督なのも、あなたが言う許可がでていることも真実だとすれば、誰が、許可をしたのかしら？」

小さな舌打ちとともに祭先生と人垣がその場を散った。

その有様に新生たちは歓声を上げる。

「ごめんなさいね、新生のみなさん。私は第一生徒会の曹魏力リ^{そいつ}ン。あなたたちの出迎えに遅れたせいで妙な連中にチャチャを入れられてしまったわ。」

ずっと彼女は頭を下げた。

「あなたたちのこれからの生活が第一生徒会とともにあるのならば、

私たちはそれを喜んで受け入れ、そして栄光をともにすることを約束するわ」

につこりとほほえむ曹魏カリンの笑顔に周辺すべてがフラフラと歩いてゆく。

「な、なな、一刀。第一生徒会、つてええんちゃうか？」

「なのーなのー、ちよつといいかんじなのー」

「・・・あの手腕、ただ者じゃない」

三人ともに僕もろとも踏みだそうとしたところで、僕は踏みとどまった。

南洋校舎に三つの生徒会あり。

まだ一つしかみていない。

僕がそういうと、三人とも目が覚めたかのような表情。

「・・・一刀、頼りになるなあ・・・」

「・・・北郷、冷静だ」

だって、これ、詐欺商売の手法だし。

その言葉に三人の表情が固まる。

「どういうことなのー？」

甘いことばとサプライズ、優しい勧誘と逃げ出しづらい状況。最後に勧誘された方に自主意志があったかのようにはんこを押させる。

「なるほど、・・・せや、やば、こんなにひっかかったらオカシになさかれてたでー」

「・・・北郷、本当に冷静。」

「・・・今度、ショッピングの時にきてほしいのー」

おもわずそんな話をしているうちに、第一生徒会側に行っていないのは僕たち四人だけとなった。

「・・・あら？ あなたたちは私たちと栄光をつかんでくれないのかしら？」

上品で気品ある笑顔、だけどちょっとだけ口元がひくついている気がする。

「なにか気に障ることがあったかしら？ ・・・北郷一刀。」

曹巍カリンのその言葉に、同じ船に乗ってきた同級生たちも「こっちにこようよ」「カリン様といっしょにいこうよ」と声をかけてくれたが、僕は首を横に振る。

「・・・私たちと来れば、必ずあなたたちを厚遇するわよ？」

につこり微笑む天恵の微笑み。だけど其の仮面の厚みはさほど厚くない。

だから僕は胸を張る。

「所属生徒会の決定は、上陸から一週間の猶予があります」

「・・・そうね、確かにその通りよ」

「そして、この一瞬で決めてしまうには、この南洋校舎は広すぎます」

思わず、本当に思わずなのだろう。
曹巍カリンの眉が瞬間的に揺れた。

仮面の一部が剥がれ落ちた。

「・・・そうね、そのとおりね。確かに南洋校舎をみないうちに決めてしまうにはもったいないわ」

固まりつつあった笑顔を一瞬おさめ、そして真顔で自分たちの元にきた少女たちをみた。

「私たち第一生徒会は、この南洋校舎随一の勢力範囲と資本力を持つているわ。この南洋校舎にあつて唯一、本土と同等の生活が約束されているのも私たちだけ。確実な生活の上で勉学を基礎とした生活ができることを望む人は、私たちときてちょうだい。自由意志よ。」

そういつてその場を去る彼女へ、僕たちをのぞく新入生すべてがつき下だった。

そうして、港から新入生の集団が姿を消した。

思わず呆然としたままに、大した影響力だ、と感心する僕たち四人の元に駆けてくる影があった。

「もう、鈴鈴ちゃんがいつまでもご飯食べてるから!!」

「桃香お姉ちゃんも、お化粧にじかんかけすぎなのだぁ!」

「だつてえー、第一印象があー!」

「それで遅れてては意味がありません!」

「うわーん、愛紗がこわい!」

なんとというか、かなり騒がしい連中が僕らの前にきたところで、三人呆然。

「あ、あれ? 新入生は、これだけ?」

「・・・すまん。他の新入生はどこに？」

ふわふわ髪の女の子の隣で、謹厳実直が服を着たかのような少女が僕らに視線を向けた。

「・・・みんな、金髪ロリロリに連れて行かれたでえ」

真桜のその一言に、三者三様に肩を落とす。

「・・・ごめんなのだ。鈴鈴がご飯を途中で、やめなかったのがいけなかったのだ。」

「いいえ、鈴鈴ちゃん。私がいけないの。」

「二人とも、視線をあげましょう。少なくとも勧誘対象はゼロではありません」

今気づいたかのように僕らをみる二人の少女。
おずおずとフワフワ髪の少女が僕らに聞く。

「・・・えっと、カリンさんの勧誘がきてたんですよね？」

同時にうなづく僕たち。

「で、なんで一緒に行かなかったんでしょか？」

ふわふわ髪の少女の一言に、真桜と沙和が得意げに語る。

「せやかて、あんな詐欺臭い段取りなんか信じられるか、つつんや。
」「そうなのそうなの、冷静に聞いてれば怪しいの」

やんややんやと胸を張る二人を軽くはたいた風は、ふわふわ髪の少女に向かつていった。

「・・・私たちも行きそうになったが、北郷が怪しいといったのでな。」

その人ことで、少女たちが絶叫をあげた。

『北郷~~~~~!?!?』

く北郷一刀「洋風建築ってスキですよ?」

とりあえず、彼女たちの案内で仮の宿を提供してもらった。

今日から一週間で自分たちの所属する生徒会を決める、そんな拠点に彼女たちは自分たちの住処を貸してくれるというのだ。

彼女たちが住む場所は、昔風の洋風長屋であった。

真っ白なペンキで外装が塗ってあり、風雨に耐えているのである外装は、結構なモダンさを醸し出していた。

入り口には看板がかけてあり、達筆な文字でこう記されていた。

『第三生徒会 本部棟』と。

思わずそれを見入る僕たちにふわふわ髪の少女は言う。

「あ、気にしないで。ここで生活するからって、第三生徒会には入ってことじゃないから。ただ、ちょっとだけ家事を手伝ってくれるだけでいいんだ!。」

えへへ、と笑う少女の後ろで、謹厳実直と自称鈴鈴は切望の目をしていた。

僕たち四人で台所を掃除したが、そこは魔界のようだったと言うしかなかった。

基本的にカップものしか無く、インスタントかレトルトが少々という状態では栄養状態はしかるべき、だった。

冷蔵庫にも飲料水以外無く、あきれることこの上なし。

昨今の男子高校生の方がまだマシだろう。

思わず冷たい目で見ると、たじたじとする三人。

「まあまあ、料理ができる女子なんか、この島にはこんわ」「そうそう、沙和たちだって……。」

そう発言する沙和と真桜をみて、きわめて絶望の色を濃くした三人。

「……一応、煮炊き是可以る」

凧の一言に目を輝かせた三人。

そんなわけで、僕と凧が台所担当、空腹三人組が買い物という流れになった。

買ってきたもののバランスは最悪だったけど、卵とバラ肉が入っていたことに気をよくした僕は、凧とともに台所に立った。

「北郷、とりあえず私は『煮炊き』だけだ。」

「……。」

そんなわけで、米と吸い物を担当してもらい、僕は包丁を握りふるった。

……しばらくして……

有り合わせのもので適当に炒め物とオムレツを作った僕に会わせるように風の方でもご飯ができる。

本当は蒸す時間がほしかったんだけど、おかずにあわせる方向で食卓に出した。

「う、わー、おいしそうなだ……」

「ほ、ほんと、おいしそー……」

「うん、久しいほどに……」

三者三様の台詞だったけど、全員が早く食べたいと目で言っていた。

「ふむ、これは久しいなあ？」

ふらりと現れた一人の少女は、いかにも自然に食卓に座る。

「おお、星。起きていたか？」

「ふむ、ひさしくインスタント以外の匂いにつられた。」

色素が薄そうな髪の毛の少女は、こちらをのぞき込みそして感心する。

「なんと、噂の男子ではないか。桃香もなかなかやるではないか！」

ばんばんとふわふわ髪かみの少女しょうじょをたたくが、彼女は苦笑くせうい。

「まだ勧誘かんすうできてないの。」

「ではなぜここにいる？」

視線しせんがこちらに向いたので、いきさつを説明すると彼女は大いに笑う。

「詐欺？ 結構ではないか。少なくとも赤貧せきひんにあえぐ第三や行動目標不明な第二に比べれば、楽な生活ができるぞ？」

でも、と思う。

「出会いのはじめが騙だまし討うちじゃあ信頼しんらいできませんよ。」

僕のその言葉に、凧たこを筆頭ひつだうに真桜まおうと沙和さわが頷うなづく。
それを聞いた謹厳実直きんげんじつちくがしかり、と頷うなづいた。

「君はまっすぐな瞳ひとみをしているな。」

にこやかなほえみとともに右手を差し出した。

「私は雲関うんかん 愛紗あいさ。そのまっすぐな心が私たちとともにあるなら、
いつか道が交わると信じる。」

雲関さんは僕に続き、凧たこ、沙和さわ、真桜まおうに握手を交わす。

「私は第三生徒会の劉蜀りゅうしやく 桃香とうかう。一週間の仮住まいかもしれないけど、よろしくね」

「私は子雲しじゆん 星せい。第三生徒会所属だ。」

ほかにも数人居るそうだが、実のところ所属人数の少なさで言えば三生徒会一だそうだ。

一応、昔は隆盛を誇る時期も一時期だけあったそうだが、第一生徒会台頭に削られるように勢力範囲を失っていたという。

劉蜀さんが生徒会には行った頃にはすでにこのようかん長屋とその周辺しか影響力がない状態だったそうで、最近になってやっと教室棟間での影響力を復帰したという。

この場にはいない数名も、影響力を維持するための巡回をしているそうで、人手がにことこのうえないそうだ。

「北郷」「一刀」「一刀くん」

三人が三人とも言わんとしていることを理解した。

そして僕も同じ気持ちだった。

その一步を踏みだそうとしたところで、テーブルに突っ伏した少女がうめく。

「難しい話は、ごはんのあとにするのだあ……」

然りと笑う僕たちは手を合わせる。

『いただきます』

少しだけ芯があるお米だったけど、それでも噛み心地のよい出来だったので、みんなのおなかにどんどん入っていった。

満腹で船をこぎだした少女、飛張とびはり、鈴リンを劉蜀さんが部屋に連れてゆくと、僕もテーブルを片づけ始める。

一通り片づけたところで全員のお茶を入れた。
眠ってしまった飛張とびはり 鈴りんをべつにすると、その場に集まった人員
は次の通りだった。

第三生徒会長	劉蜀 りゅうしやく	桃香 とうかう
第三性都会副長	雲閑 うんげん	愛紗 あいしゃ
第三生徒会書記	子雲 しうん	星 せい
新入生 北郷 ほんこう	一刀 かずと	
新入生 楽進 らくしん	凧 なぎ	
新入生 李 すもも 真桜 まおう		
新入生 干田 かんだ	沙和 さわ	

これに加え、新学期の事務折衝にでていた二人の少女、

第三生徒会会計	葛城 かつらぎ	朱里 しゅり
第三生徒会会計	鳳 おおとり	雛里 ひなり

を加えた9人がテーブルを囲んでいた。

しばしの沈黙の後、口を開いたのは劉蜀さんだった。

「おいしいご飯をありがとうございました。」

久しぶりの手料理に涙を流した四人に加え、送ればせの二人にも
振る舞ったところ、本気で泣いていた。

おいしいおいしいの繰り返しはうれしい以上に申し訳ない気持ち
にさせられる。

みたところ、鈴鈴と同じ年ぐらいの、そう小学生ぐらいの女の子
に、どんな生活をさせているのだからとおもったが、この南洋校舎
に来る人間が保護だけを求める、そんな人間であるはずがなく、た

くましさも発揮した。

「桃香さん！ぜひとも、ぜひとも勧誘しましょう！」「（こくこくこく）」

二人の幼女ががちりタッグを組んだわけだが、劉蜀さんは苦笑いで彼女たちを諭す。

「公平な目で、平等な目で、まっすぐにみてほしいんだよ。それが第三生徒会。」

少々不満そうな二氏の少女だったが、すぐに納得し、笑顔でうなずく。

なるほど、「徳」の生徒会、というわけか。

そんなやりとりの後、劉蜀さんの言葉に返すわけではないけど、
皿が口を開いた。

「・・・まだ全てをみたわけではありません。まだ南洋校舎が鈍なところかもわかりません。でも、でも、私は、ここに帰ってきてもいいでしょうか？」

「・・・沙和、こういう雰囲気好きなの。暖かくて、家族ってかんじで。ほかの生徒会がどんなところかわからないし、知らないけど、沙和はここ好きだよ」

「うちも、ここなら好き、やな。第一はちとこわい。」

おどける真桜をみて、僕も頷いた。

「たぶん、今が道が変わるときなんだと思う。今を逃したらたぶん流れに飲まれて消えてしまう気がする。だから・・・」

僕が、凧が、沙和が、真桜が、右手を差し出して重なる。

「僕たちは、僕らは、第三生徒会に所属を希望します」

涙で瞳をぬらす劉蜀さんが、笑顔で頬を染める雲関さんが、不適な笑みを浮かべる子雲さんが、うれしそうな笑顔の葛城さんが、真っ赤になりつつ鳳さんが、その手を合わせた。

「鈴鈴だけ仲間はずれはするいのだ!!」

飛び込む飛張さんが。

この場にいた全員の手が重なった瞬間、何かを感じた。背筋を駆け抜けるような、前進がしびれるような、それでいて心地よい何かを。

後で思う。

この瞬間に全てが動き出したんだろう、と。

第三生徒会ルート 第一話（改）（後書き）

本編はじまりました！

ちよつとごちゃごちゃとしている感じはありますが、元のキャラの真名は残すようにしています。

解りにくかったらごめんなさい。

大本である真恋姫のようなルート選択はありませんが、「第三」が終了次第「第一」「第二」「番外」となる予定です。

その間、皆さんに飽きられないように頑張りたいと思います。

第三生徒会ルート 第二話（改）

第三生徒会ルート

第二話

「北郷一刀「おしえて、しゅり・ひなせんせえー！」朱里・雛里」
・・・（かぁー！）／／」

南洋校舎の大まかな勢力図を地図にしてみると結構おもしろい。

ほぼ円形の南洋校舎島の真ん中から三分の二を境に第一生徒会が支配しており、残りの面積を第二生徒会の勢力が閉めている。では、第三生徒会かというと、二大勢力が拮抗している隙間に、楔のように食い込んでいた。

位置としては港の反対側、もっとも新入生勧誘が難しい位置といえた。

この位置にいて両方から干渉を受けないと言うのは、それだけ第三生徒会の公権力があるのかというところではなく、どちらかと言えば相手にされていないだけだろうと思う。

そんな感想を僕が言つと、鳳さんこと朱里ちゃんは「はい、あたりです」とがっくりしていた。

しかし、現状が急激な転換を迎えている。

なにしろ今年度唯一の男子を第三生徒会がおさえたのだから。

この一事を持って恭順を示す学区が相次ぎ、現在劉蜀さんこと桃香さんがてんてこまいになっている。

恭順する学区が増えるにしたいが、巡回範囲が増えたこともあり、早々に僕らも巡回に参加してほしい旨の要望が桃香さんから入っていた。

そこで、急遽「朱里ちゃん雛里ちゃんの南洋校舎政情教室」が始

まっ たわけだ。

「はじめに一刀さんを襲おうとした祭先生は、第二生徒会に所属しています。」

教師が生徒に隷属ってどうよ、とおもったけど、この南洋校舎では珍しくないそうで、第三生徒会にも二名ほど隷属、というか顧問が居るそうだ。

「じゃ、祭先生が許可を得たって言っていたのは……。」

「はい、間違いなく第二生徒会会長 孫呉そんこ 雪蓮しうれんさんでしょう。」

なるほど、彼女はうそを言っていなかった、そういうわけだ。

「誠実には、ほど遠い話やな。」

「そうですね、嘘がないだけで騙されている事が露見するまで向こうの思い通りですから」

熱い空気をかき回すように内輪を仰ぎながら、朱里ちゃんはこちらに視線を向けた。

「一刀さんが感じた第一生徒会側の嘘、とはどんなものだったんですか？」

「えーっと、なんやっ たっ け？」「沙和に聞かないでほしいのぉ」

「……公敵の排除自体を正義に見せかけ、さらには甘い餌で思考を狭めて取り込もうとした。しかも甘言を弄しても、最終的には自分で判断したかのような錯覚を覚えるように、だ。」

「……なるほど、さすが曹魏さんですね。」

思わずうなる朱里ちゃん。

「でも、それに気づいた凧さんはすごいですよ……。」

雛里ちゃんの一言に真つ赤になった凧は首を横に振る。

「ちがう、気づいたのは北郷。」

ほえーっと二人の少女に見つめられて、ちょっと具合が悪い気分になった。

「さすが、入学直後から南洋校舎行きが決まっただけのことはありますねえ。」

「……すごいです、一刀さん」

さすがさすがと煽てらえてはぐあいがわるい。

早々に僕らは出立の準備にかかった。

第三生徒会の旗は緑が主色になる。

学制服の腕章や名札もその色に準拠するのだが、行きなりのことだったので準備ができていない。

仕方なく新入生の名札のままかと思いきや、桃香さんが倉庫から荷物を持ち出した。

それは第三生徒会旗揚げ当時のもので、弓道の胸当てのようなものだった。

「これは第三生徒会の親衛隊用装備だったんですけど、いままで引っ張り出せるほどの人数が集まらなかったんです。」

十字架を意匠したものか、胸当てには「十」一文字が入っていた。

「本日より北郷さんを隊長とした「北郷隊」を組織します。今は四人ですが、増員に入りましたら支隊をみなさんに率いいていただけるようにしたいです」

につこりほえむ桃香さんをみて、僕たちは胸を熱くした。たぶん、彼女のこういうところが人を引きつけるのだろう、と。

「じゃ、これから一刀は「隊長」やな」「隊長なの」「…………よろしく、隊長」

僕たちは再び手を重ねた。

「よろしく願います。」

徳を持つて南洋校舎を納めんとする第三生徒会。
その会長は柔らかにほえむのだった。

「曹魏カリン…………たのしませてくれるじゃな」

曹魏カリンは非常に不機嫌であった。

なにしろ第二生徒会の抜け駆けを先制したにも関わらず、かの少年を押さえることが出来ないどころか、第三生徒会にさらわれてしまったのだから。

あの場で強制的に引き入れることは可能だっただろうが、以後のことを考えればその手段はとれなかった。

その逡巡の隙をつかれた形となったのは残念だったが、実のところ彼とは縁を感じているので、そのうち道が交わるだろう事を確信

している。

しかし、行為自体をじゃまされた第二生徒会からの策謀活動は、いかにも八つ当たりであり、カリンの期限を逆なでするだけの効果を発揮していた。

「まったく。あの男をさらったのは第三だ。なぜ我らを・・・」

夏峰 春蘭の怒りももつともだが、この嫌がらせにも意味と理由があるのだ。

実際、本当にカリンが少年を従えていれば、第二は先の遺恨を忘れ第三の挟撃を提案してくるだろう。

そして第二が少年を得ていれば、間違いなく前線に押し出して巡回させる。

そう、第三が実際に行っているように。

「姉さん。第三を攻撃すると、少年の不興を買う。」

「な、なんと卑怯な」

もちろん、その効果をもとめて港を強襲したわけなのだが、勝ったのは第三、徳深き仁の生徒会であった。

（北風と太陽もかくや、かしら）

思いの外、女慣れしているようだし、ね。

不満げに鼻を鳴らすカリンに控えていた少女が耳元でささやく。

「桂花、確度は？」 「・・・9分9輪、間違いありません」

そう、と口元をゆるめたカリン。

「北郷一刀……祭先生、昭和は遠いつすよ」

盗んだバイクで走り回りつつ、校舎のガラスなんかを割る行為を「尾崎る」などと言うやからがいるそうだけど、目の前の行為は結構「尾崎って」いた。

チョッパーハンドルの自転車で猛スピード。

手に持った釘バットでガラスを割ったりなんだったり。

モヒカンのカツラとキャッツアのサングラス姿の祭先生及び部下と思われる少女たち。

「ひいあつはーーーーー！」

奇声を上げて走り回る祭先生に向かって、手元の空き缶を投げると「こかーん」気持ちのいい直撃音発生。

スローモーションのようにゆっくりと倒れた祭先生だったけど、瞬間的に起きあがり、こちらにダッシュ。

「きさま、北郷！ 教師に向かってなにをする！！」

「じゃ、その教師がなんで学校で『尾崎って』るんです？」

「……………」

何か考える仕草の祭先生は、急遽「ポン」と手をたたいた。

「な、なにをいう。私は教師でも何でもない。南洋校舎の未来を憂う憂島騎士団、そのなもゼット団じゃあ！！」

言うに事欠いて、なにを言い出すんだ、この人は。

周囲の空気が凍った。

この校舎は今日付けで第三生徒会に組み込まれたばかりの校舎なので、教師の派遣交渉や維持交渉などの為に朱里ちゃんと雛里ちゃんを護衛しにきたのだが、その最中に祭先生以下少女隊の珍走を目撃したのだ。

誰がどう見ても「祭先生」なのだけでも、自称別人だと言うことで周囲も対処に困っていたという。

自分の受け持ち授業だってあるだろうに、なにをしてるんだ、この人は。

とはいえ目の前の怪人をどうにかするために、真桜・沙和を左右に配置、僕と凧が正面に移動する。

「・・・じゃ、その違いがわかる憂島騎士団の方々が、なんで「この」校舎に？」

「ふむ、物資配給の全てを牛耳り、第二第三生徒会の生活を脅かす第一生徒会への攻撃と抗議をかねた・・・」

そこまで言った祭先生へ、僕たちは校舎の壁を見せた。そこには第三生徒会への恭順の証に、曹魏の青から劉蜀の緑に塗りかえられた校章があった。

はじめは目をしかめていた祭先生だったが、サングラスをはずして初めて声を上げた。

「・・・おお、これは失敬」

まちがいまちがい、とそのまま帰ろうとする彼女をみんなで取り押さえた。

生徒会隷下の教師が人質になると言うこと自体が希ならば、その事情が校舎の破壊という時点で前例なき珍事だった。

第二生徒会は即時に教員返却を求めてきたが、第三生徒会は以下のような回答を送っている。

『当方には教員の人質などおりません。自称 憂島騎士団ゼット団 団長は、自称する限り教員でないとのこと。調書及び録音立ち会い内容をご参照いただきたい』

つまり「ゼット団だって言い張ってるんで、返したくたって返せないんじゃない？ そっちこそ何とかしてよ」ということになる。手詰まりにも近い軟禁生活であつたが、本人は至って悠々自適であつた。

飲み仲間である教員の忠^{ただみ} 紫苑^{しおん}と巖^{いわお} 桔梗^{ききよう}が第三生徒会隷下にいたからだ。

毎晩発生する宴会に、料理番に任命された僕こと北郷一刀は毎晩つきあわされている。

「ふむ、しかし。第三の食糧事情も急上昇であるな」
「そうねー、愛謝ちゃんとか桃香ちゃんとか出来る感じなのになー」
「仕方あるまい。我らとて、身をとって戦う身。そちらに力は注ぎにくい」

一升瓶をお互いに次ぎあう蟒蛇^{つわばみ}たちの宴の肴は、一応みんなで持ち寄っているのだが、足りなくなると絡まれるので、ちょこちょこ足さざる得ない。

「・・・でも、一刀ちゃんみたいなかわいい料理番がいると安心よねー」

「ふむ、徳の第三と言われていたが、愛の第三でもいいかもしれんな、愛エブ第三生徒会。」

「これだけは第二にはないのお。」

コップじゃ足りなくなったのか、一升瓶ごと乾杯して、一気のみ。
どうしよう、この酔っぱらいども。

チンジャオロースを中華鍋で作りながら、思わず苦笑い。

「げ、まじで祭先生が捕まってる。」

「ほんとだー、誰が捕まえたの？」

長身茶髪ポニテの少女がイヤそうに顔をしかめた。

隣の少女、ちょうど長身茶髪ポニテを一回り小さくしたような少女はドチラかという面白がってるのだろう。

「あら、翠ちゃんタンポポちゃん、おかえり〜」

「よお、翠、たんぽぽ。研修はどうだった？」

「・・・改めて言うが、私は教師ではなく、ゼット団の団長じゃ」

三者三様の言葉に二人は呆然。

そこで僕に気づいたようだ。

「・・・お、あんたが北郷かい？」

「はい。新入りの北郷一刀です。」

ぴつと礼をすると、妙に照れたような顔で彼女は笑う。

「お、おお・・・礼儀正しいな。あたしは馬場 翠だ。・・・で

も、生徒会に入ったなら会長と副長以外は同格だ。よろしく頼むぜ。」

差し出す右手をお互いにつないだところで、隣の少女が笑う。

「いしししし、お姉さま照れてる？照れてる？」
「て、てれてねー！ー！」

ぶんと言っほどの勢いで手を切った翠さんの横で、もう一人の少女が右手を差し出す。

「あたしは馬場はば 蒲公英たんぽぽ。よろしくね」

きゅつと握手の後、背後をのぞき込んだ。

「・・・ところで北郷君。」

「なんでしよう、タンポポさん」

「もしかして、君って料理が出来たりするの？」

その言葉に馬場姉、翠さんが目を大きく見開く。

「一応ふつうに出来ますよ？」

息をのむ姉妹。

「・・・本当か！？」

うなづく僕に「うわーい」と喜ぶ馬場姉妹。

「ね、ねね、シチュー出来る？ 白い奴」「いや、ハヤシだろうハヤシ！」「お姉さま、しちゅー！」「はやしはやし！」

大声で言い合う二人に、配膳手伝いをしていた真桜が苦笑い。

「隊長、大人気やねえ。」

「・・・とりあえず、カップめんやレトルトよりは美味しく作るよ。」

深夜にも関わらず、匂いにつられた獣たちがゾロゾロと集まった。

第三生徒会長	劉蜀 りゅうしやく 桃香 とうか
第三性都会副長	雲関 うんせき 愛謝 あいしゃ
第三生徒会書記	子雲 しうん 星 せい
第三生徒会総務	飛張 とびはり 鈴 りん
第三生徒会総務	馬場 ばば 翠 すい
第三生徒会総務	馬場 ばば 蒲公英 たんぽぽ
第三生徒会会計	葛城 かつらぎ 朱里 しゅり
第三生徒会会計	鳳雛里 ほうしゅり （おおとり ひなり）
第三生徒会親衛隊	北郷 ほんごう 一刀 かずと
第三生徒会親衛隊	楽進 らくす 風 なぎ
第三生徒会親衛隊	李 すもも 真桜 まおう
第三生徒会親衛隊	干田 かんだ 沙和 さわ
第三生徒会顧問	忠 ただみ 紫苑 しおん
第三生徒会顧問	忠 いわお 紫苑 ききょう
第三生徒会顧問	巖 いわお 桔梗 ききょう

これが第三生徒会幹部の総勢だった。

加えて、現在捕虜状態のゼット団 団長こと祭先生がホワイトシチューとハヤシライスを楽しんでいた。

「さすがにルーから全部作れるとは思わなかった」

とニコニコ顔のたんぽぽの隣で翠が感動と喜びを味わっていた。

「すごいなー、こういうのってルーが手に入らなくても出来るんだ」

ときわめて現代っ子な意見を言う桃香さんだったが、おおよその他の人も同じ意見らしい。

つつか、少しは家事が出来るはずの凧も感心してる。

真桜・沙和は言うに及ばず、ダメダメ教師連中も感心しているのがイヤすぎる。

ともあれ、喜んでくれるのはすごくうれしいのでお変わりに対応しているうちに寸胴がカラになった。

「うつわー、この人数がいると早いなー」

「せやなー。でも美味しいのが一番の原因やで？」

「うんうん、実に美味だ。北郷、毎日ありがとう」

「・・・愛紗、もしかして毎日こんなうまいもの食ってるのか？」

「ああ、実に快適な食生活で、体重計が怖いぐらいだぞ？」

ずるいずるいと馬場姉妹。

「鈴鈴はふとつたのだ！」

「私は胸が増えたな」

「まじか！」「うつわああやかりてー！」

大騒ぎと言うよりも、仲の良い姉妹のじゃれあいのようなそんな雰囲気、思わずにやけてしまう。

「隊長、なにかおもしろいの？」

片づけを手伝ってくれている沙和の質問に、実家を思い出した。いや、どちらかというと中学まで通っていた山間分校のことを。あそこは現代教育現場とは信じられないほど、子供が純真でまっすぐで正直だった。

そして、教育も独特で、いろいろな学校から見学にきたような分校だった。

「・・・北郷、それは、あの、分校か？」

桔梗先生は僕の恩師の話をしてくれたので、そのことをうなずくと、大いに喜んでくれた。

「・・・そうなの、そうなのね。うんうん」

そんな風に頷く紫苑先生。

団長はよくわかっていないようだった。

生徒会メンバーもよく理解していない様子。

「・・・なんだ、おまえ等も世間ずれしておらん」

と苦笑いの桔梗先生だったがそれ以上なにも語ろうとしなかったので、その話はそこまでになったけど、翌日から新たな任務が言い渡された。

「北郷一刀」らちられました」

「北郷、君には我々とともに補習教室廻りをしてもらう。」

ええーと不満満載の北郷隊の面々。

しかし桔梗先生は一切シャットアウトという事で僕を拉致した。ちよつと強引すぎるなあ、と思ったけど、それなりに何か事情があるものと考えてみた。

まず、この南洋校舎にきてから教科書を手に入れてないし、授業

も受けていない。

なのに補習がある？

理解できません、と正直に言うと、桔梗先生は大笑い。

「まあ、おまえのいた分校で、学級崩壊が起きていると考えればよいのだ。」

「それって、単に遊んでるだけですよ？」

「正にな。そんなわけで、各生徒会は授業正常化を最優先課題にしておるのだ」

なるほど、なるほど。

逆に言えば授業正常化が出来ていないと何か弊害が？

「ふむ、授業は正常化しておらんが、試験は通常の学校並にあつてな。その際の成績が配給に直結しておる。もちろん校外からの円仕送りも大きな力だが、配給自体が少なければそれを転売する人間も減り、購入が出来なくなるのだ。」

うわ、それって島全体の危機じゃないですか。

「そうだ。だから授業効率を上げられる人員は、千金にも値する」

なるほど、だから祭先生のまえでは話さなかった、と？「そのとおりじゃ。」

なんとなく、僕が連れてこられた意味が分かった。

「つまり、分校の自習を導入したい、ということですね？」

然り然りと大喜びの桔梗先生と共に飛び込んだ教室には、だらりとした雰囲気漂っていた。

こんな空気はみんな嫌いなはずだ。
さてさて、胸に秘め足る「分校魂」を伝えちゃいましょう。

僕が通っていた某県の山間分校は異常なレベルで有名だった。
小中学年合同の分校なのに教師は常駐で1人、臨時で三人という
異常なところのくせに、県内有数どころや県外の有名校にも入学で
きると言うぐらいの学力を誇っている。

その理由はなんと「自習」による学習にあるのだ。

初代ともいえる世代が確立した常識外の自習方法のおかげで、僕
らも異常な状態で自習できている。

で、この自習方法ではマニュアルにも手順書にも書いていない秘
伝がある。というか、書面にできない秘密があるのだ。

それは、「感染」といわれる状態だ。

始まりは初代の一人だったという。

彼の周りで勉強すると、効率がいい、という状態だったそうだ。
それに気づいた仲間が徐々に加わり、最後には分校全員で自習を
始めたという。

で、新生はそれに感染し、卒業生は感染したまま外にでる。
そうになると、分校の奴らと一緒に勉強すると・・・という状態に
なるのだ。

加えて自習マニュアルを効率化したせいで、分校では教師による
授業よりも先鋭化した授業が生徒間で行われるようになってしまっ
た。

これが分校の自習の正体だ。

が、この感染、非常に問題ともいえる負の側面がある。

感染の大本の初代の一人に性質が似てしまう、というものだ。

曰く、朴念仁。曰く、鈍感。曰く、女の敵。

外聞だけならまだしも、自信の性質でも精力の減退や淡泊化など
も進行するという恐ろしさ。

指摘されるまで僕も気づかなかったけど、何とも恐ろしい話だと

思う。

とはいえ、分校で教わった数々の教えは、公私ともに役立つことなので、しっかり伝達をしようと心に決める。

そう、「好きという気持ちに嘘をつかない」だ。

さあ、分校の魂をみんなに振舞っちゃいましょう。

第三生徒会ルート 第二話（改）（後書き）

本作の北郷くんは腕っ節は駄目駄目ですが、学習するということだけは「チート」です。ということで、そのへんはスルーの方向性でお願いします。（改行不良・改行挿入を修正しました）

第三生徒会ルート 第三話（改）

第三生徒会ルート

第三話

「曹魏力リン」・・・なにが起きてるの？」

曹魏力リンは大いに不機嫌であった。

「桂花、これはどう言うことなの？」

合同中間考査の結果を見て、眉をしかめる曹魏力リン。

「・・・現在、詳細に分析をさせています。」

恥辱に顔をゆがめた少女は頭を下げた。

彼女はきわめて有用な作戦を打ち立てていたはずであった。

現在、この島唯一の男子にして憧憬の対象になりつつある北郷一
刀のせいで、第三生徒会へ流れる人員を押さえられないと判断した
彼女は、成績不良者を優先的に学区隣接エリアへ移動させたのだっ
た。

自然、成績不良紗の集まりはミーハーにも男子のいる第三生徒会
へ身を寄せ、これにより成績不良者の足切りが出来、さらには順調
な成績を収める第三生徒会へ平均成績という重石をつけるのが目的
であった。

事は順調に進み、お人好しばかりの奴らはなんにも考えず受け入れ
を表明し、形だけでも支配地域は拡大した。

が、第一生徒会にしてみれば、インフラが弱い地域とともに成績不良者を大量に第三生徒会に押しつけることに成功したという結果をつかみ得た。

試算で第一は平均点は20点ほど上昇し、他の生徒会の追隨を許さないはずであった。

そして、中間試験を終えてみれば、第一生徒会の成績は試算通りの20点上昇を果たしたが、恐ろしいことが他の生徒会で起きた。

第三生徒会：平均成績80点

例年の南洋校舎の全学年平均点が40点。第一生徒会でも今回の平均成績71点が過去最高平均のほずであるが、平均成績80点という恐ろしい成績を叩き出したのだ。

あの、第三生徒会が。

多くの足かせを抱え、修学平均を揃えるだけで時間を浪費させ、「男にウツツを抜かす」という評判すら準備していたというのに。

「少なくとも、酔いどれ教師が出来る事じゃないわ」

曹巍カリンの洞察はもつともだ。

これまでも結果の出せなかった教室改革と言われる授業方法も、言うなればありきたりで、それでいて成績上昇の結果もそれなりにでていた。

が、今回押しつけた成績不良者は、いわば南洋校舎における敗者であり、拗ねてしまった者たちだった。

第一生徒会の最低配給に満足し、日々の生活を怠惰に過ごしてきた。

何のために南洋校舎にきたのかわからないような、そんな敗者。彼女たちをどんなに鼓舞しても、どんな餌をぶら下げても成績上昇などあり得ない話のはずなのに。

「・・・なんと少しでも調べなさい。」

静かに命じる曹魏カリンであったが、彼女自身はおおよその見当はついていた。

それでも、その効果はこれほど出るはずがなかったので見逃していたが、何からの要素があるのだろうか。

つくづくあの場の対応を間違えたことを思い出すカリンであったが、実のところ表情ほどは不機嫌ではなかった。

なにしろ、南洋校舎全体のレベルがあがれば、本土からの配給レベルもあがるのだから。

あとはお人好しの第三生徒会から輸入すればいいだけの話だったから。

「北郷一刀」・・・最近、飲酒に抵抗感がなくなりました」

乾杯をする僕たち。

第三生徒会本部の共同食堂に集まった幹部全員で、中間試験終了と成績上昇をお祝いした。

が、もっとも盛り上がっているのは第三生徒会顧問教員である紫苑先生と桔梗先生だった。

なにしろ、授業正常化率の指標ともなる試験成績が80%を越えたという事だから。

本土にも負けない成績だと大喜びで、今回の試験成績によるボーナスがまた喜びを加速させているという。

「第三生徒会における最高成績を祝して、」

『かんぱーい！！』

本日何度目になるかわからない乾杯だったが、そこに意外な珍入者が現れた。

「…………お邪魔するわよ。」

第一生徒会 会長 曹巍カリン。

その自信満々な笑顔は、港で浮かべたそれではなく、彼女自身の素顔に思えた。

彼女曰く、何度か入り口で声をかけたが誰も出なかったので勝手にひつてきたという。

それについてはこちらが悪い。

なにしろ、案内役も置かずに宴会をしていたんだから。

曹巍カリンに続いて現れたのは、彼女の腹心である夏姉妹、そして見知らぬ少女であった。

「あなたたちの勝利をお祝いにきたわ。」

そういつて曹巍カリンは、数本の日本酒を引つ張りだした。

おお、と歓声を上げる第三生徒会幹部。とその顧問。と、いつの間にか定住しているゼット団団長こと祭先生。

「っていうか、なんでまだ居るのよ。」

祭先生を睨みつけるカリン会長だったが、彼女の言葉はもつともので、中間試験前に解放していたはずなのに、なぜかテストの採点を終えたら戻ってきたのだ。

「本人曰く、居心地がいいので居を移すけど所属は第二だそうです。」

桃香さんは苦笑いだっただ、それって正面からスパイしてますって事ですよ？と祭先生が帰ってきた当初は雛里ちゃんが猛抗議していた。

本来なら横紙破りもいいところなのだが、それはそこ、徳の生徒会を芯とする第三生徒会は受け入れることにしてしまった。

その流れを聞いた曹巍カリンもいささか毒気を抜かれたようで、大いにため息をついた後、その存在を無視することにしたらしい。

「まあいいわ。そっちはそっちで勝手にやってもらおうとして・・・。」

「

パチンと指を鳴らしたカリン会長の両脇から二つのジュラルミンケースが出された。

「ここに2億あります。」

思わず吹く第三生徒会幹部。

「これを代金として交渉をしにきたわ。」

彼女の交渉は次の通りだった。

- 1・成績順位一位の生徒会が決められる補給物資比率について第一生徒会の希望を入れること。
- 2・補給物資比率に従い第三生徒会が入手できた物資を正規の値段で第一生徒会に売買すること。
- 3・授業正常化についての恒常的な研究会の発足に協力すること。

もちろんすべての要求が通るわけではないことは理解していると胸を張るカリン会長。

現状の生徒会を維持するための補給物資は是が非にも必要で、そのためには形振りをかまっていられないと言うのが彼女の話した内容だった。

思わず手を握ろうとした桃香さんをとめたのは会計二人組。

「会長、お待ちください。」

そういつて滔々と話し始めた彼女の言葉を、曹巍カリンはお気に入りの楽曲を聞くかのように、笑みを浮かべて聞いていた。

つまり、朱里ちゃん曰く、

・すべての要求が通った場合の曹巍カリンが得られる利益は2桁奥に達するので、この場の二億など目じゃないこと。

・横やりが入られる実績を作れば、第一生徒会の実績として残り、後々の交渉に有利であること。

・研究会への協力、と銘打っているが、第三生徒会からの人員引きはがしが明白な目的であること。

以上から三つの条件すべてを否定せざる得ない、と語る朱里ちゃん。

雛里ちゃんもいつもとは違い、滔々と語る。

「私たちがここで折れては、以後の試験におけるモチベーションが維持できません。どんなにがんばっても、横やりが入るという実績では、私たちが納得しても、第三世都会に参加する生徒たちが……」

そこまで言った雛里ちゃんと朱里ちゃんの口を両手で押さえる僕。

「……曹巍カリン会長。実際のところ、どうしても欲しいものっ

て何なんですか？」

まっすぐに見つめて、視線を逸らさず数秒。
彼女の視線はそれだ。

「・・・授業正常化、よ。」

やはり、と僕は思った。

彼女は彼女でこの南洋校舎の現状を憂いで居るに違いなかった。
数十倍にも及ぶ競争率の果てで得られた権利が、戦争ごつこと陣
取り合戦ではつまらなすぎるのだ。

この南洋校舎は、すべての時間を遊びに費やしても足りないほどの
冒険があるが、そのすべての時間を勉強に研究に費やしてもあま
りある時間と空間があるのだ。

正直、あの分校の始まりの人たちが居たら、うらやましさに身を
震わせることだろう。

だから、僕は桃香さんをみた。

彼女は優しく頷いた。

そして、僕は懐の一枚のメモリーを引っ張りだした。

「桂 花代「・・・男なんか「・・・」

情けを掛けられたと恥辱に燃えているのは私だけだった。

夏姉妹は口々にあの男を称え、カリン様も苦笑いでそれを聞き流
していた。

持ち出した二つのジュラルミンケースはそのまま持ち帰ることと
なったのが、良かったのとか、悪かったことかは判断しきれないけ
ど、少なくとも作戦目標の最低限を達成しつつも別の戦いに敗北し
たのだ。

あるとき、あの男はいった。

「補給物資の件は権限がありませんが、授業健全化については僕の担当なので。」

そういつて一枚のメモリーをカリン様に渡した。

「この学習の仕方は先輩たちから教わったもので、なにも極秘でも秘伝でもありません」

ゆつくりとカリン様を見つめた男はいう。

「すべての人がこの学習で力を付けられるわけではありませんが、多くの人が力を持つことはいいことだと思います。」

だから、ただでこれを持っていつてください、と。

「私は物乞いにきたのではないわ！」

怒りで立ち上がるカリン様の方に手をかける男。

「僕も代金を持って先輩から教わったものじゃありません」

真剣な瞳に見入るカリン様。

「・・・お兄ちゃん。みんな勉強できたら、うちが負けちゃうのだ。」

ちびっ子の言葉を聞きながらも男は視線を逸らさない。

「みんなが勉強できて、みんなが百点取れたら、もっと楽しいことが勉強できるんだよ？ 第三生徒会ばかりじゃなくて、第一生徒会、第二生徒会だって勉強できるようになれば、南洋校舎全体がもっと楽しくなるんだよ？ 鈴鈴は楽しみじゃないかな？」

瞬間、しゅたつと身を起こすちびっ子。

「・・・たのしみなのだ！！」

苦笑いのカリン様。

「でもね、私も物乞いでこれをもらったって評判は欲しくないのよ」

そう、第一生徒会が対価なしで施しは受けられない。
そういったのに、男は思いだしたかのような顔をした。
ぱっとカリン様から手を離し、第三生徒会全員を振り向く。

「思っんですけど、なんでこの校舎にクラブはないんですかね？」

は？ という顔の周囲。

「クラブって絶対学校生活にプラスになるし、いま本土に頼っている娯楽もクラブで提供すれば、結構おもしろくありません？」

瞬間痙攣したかのようなカリン様が男を振り返らせた。

「・・・わかったわ。それを条件としましょう」

この2億を各種クラブ設立のための準備金とすること、そしてイ

ンフラ上必要と思われるクラブの設立物資を、第一第三が成績順位トップとなった暁には順次そろえること、などがその場で締結した。その場にいた全員が証人となり、クラブ参加者は所属生徒会によらない公人扱いとすることなども簡単に決められてゆく。

話は大いに盛り上がり、最近では見ないほど楽しそうなカリン様の姿が印象的だった。

そう、最近でまみれないほどの笑顔だったのだ。

第一生徒会に就任してしばらくは、カリン様の笑顔と共に影響力を広げる毎日だった。

夏姉妹や許、遼瀬、悪頼などの役員と共に最大勢力となったあたりでカリン様の笑顔が消えた。

どんな工作をしても削れない第二生徒会、最弱とうたわれながらもしぶとく生き残る第三生徒会。

そしていつまでも減らない浪人学生。

どこかの生徒会に所属しなければテストすら受けられず単位も得られないというのに、彼女らは無為の時間を過ごしていた。

希望の大地、学生の天地のはずなのに、と内心の歯がみが聞こえてきそうなまになっていたそのときに現れた、あの男。

これで一発逆転かと思われたが、第三生徒会二所属してしまった。作戦も立て直さなければ、と悔しい思いをしていた私なのに、なぜかカリン様は苦笑い程度だった。

そして今度の間試験と交渉。

私たちがいかに南洋校舎ボケしているかを思い知らされた瞬間だった。

あの男がいうクラブだが、実際に運営すれば莫大な利益を発生させる。

電信電話電力は言うに及ばず、交通飲食サービス業なども入れれば、地方都市税収など目じゃないほどのレベルになるだろう。

むろん本土からのテコ入れもしなければならぬが、それでも回収できる資金を思えば忘れることができるほどだ。

そんなアイデアを、カリン様の目の前で発案し、そして具体案として提示されれば手を握るほかない。

そう、悔しいし納得もいかないが、あの男の一言に集約される。

「おもしろそうだ」と。

このクラブ運営には極めてたかい判断力と知識が必要だし、今の南洋校舎では実現不可能だろう。

が、あの男はにこやかに言う。

「この成績を全生徒の2／3程度がとり続けられ、可能じゃないかと。」

にこやかな握手。

カリン様も夏姉妹も、私ですらその熱に浮かされて、その場で握手してしまった。

宴会終了と共に帰る私たちだったけど、私の熱はいち早く冷め、そして恥辱を感じていた。

男なんかと握手してしまった、と。

「北郷一刀「みんなきれいに食べてくれて、片づけは毎快樂ですよ？」」

洗い物をしている背後に誰かの気配。

振り向けばそこには桃香さん。

「・・・じゃま、かな？」

いいえと首を横に振る。

「・・・あのね、今日はありがとう。」

疑問の意味を込めて首を傾げる。

「クラブってさ、私も欲しかったんだけど、今の南洋校舎じゃ難しいって、雛里ちゃんや朱里ちゃんに言われてたんだよね。」

でも、あきらめきれなくて、計画書を書いていた、と？

「うん・・・って、もしかしてあれみたのお！？」

だって、僕の胸当てには言っていましたし。

「・・・うつわ、どこになくしたかと思ってたら、あの倉には行ってたんだ・・・うわぁ・・・」

僕はあの計画込みで親衛隊かと思ってましたよ。

「そんなワケないよ！　どんな無茶振りよぉ・・・」

顔を真っ赤にした桃香さん。

「・・・もう、さっきから私の心を読まれてるって焦ってたんだからね！」

ぶいっつと横を向く桃香さん。

思わず「かわいい」と口に出してしまった。

「・・・もう、からかわないの。」

顔を真っ赤にした彼女がこっちをにらんだ。

しばらくのにらめっこの後、彼女はぷつと吹いて息をもらす。

「はぁ……でもさ、」

できると思う？ と彼女は問う。

僕は胸に光を当てるように答えた。

気持ちちは心を輝かす、思いは必ず形になる。

だから、笑顔とともに言う。

「できますよ。苦しいし楽じゃやいですけど、楽しいですから!!」

馬場蒲公英「……途中まではいい雰囲気だったのになー」

なーんだ、ラブシーンじゃないんだ。

蒲公英がため息をついて帰ろうとしたが、身動きがとれなくなっていた。

そこには「全員」が聞き耳を立てていたから。

みんなぼそぼそと文句を言っている。

愛謝「……桃華をなかなよ、泣かせば殺すぞ……」

鈴鈴「にゃんにゃんするのかな、にゃんにゃんするのかな……」

星「……むむむ、一押し、一押しだ一刀」

翠「……ふ、ふわぁ、ああああ」

朱里「あわわわわわわわ」

雛里「ほわわわわわわわ」

真桜「……いまや、いてまえ、いてまったら」

沙和「……あーん、桃色空かなのー」

凧「・・・隊長、私は信じてます」

紫苑「・・・とうとう、とうとうなのねえ・・・。」

桔梗「・・・そうじゃ、そこじゃ、一步前に出る」

全員で桃色空間ってどんな生徒会だよ、と苦笑いだが一人数少ないことに気づいた。

あれ、団長ってどこにいるの？

こういう娯楽が一番好きそうなのに・・・？

く北郷一刀「・・・」

うれしそうにほえんだ桃香さん。

洗い物から手を切って、僕は彼女に向き合う。

「さて、明日も早いし、これからもがんばりましょうか？」

そうだね、と彼女も笑う。

「・・・なんじゃ、ラブシーンは終わりか？」

はっと気づけば真横に祭先生。

「そのなんだ、もつとな、ぶちゅっと思ったらどうじゃ？ 淡泊で
はいかんぞ淡泊では。」

思わず真っ赤になる僕と桃香さん。

どうしたものかと思っていると、食堂の扉が開く。
ドドドと「全員」が現れて祭先生をひきづっていった。

「な、なにをする、皆の衆とてみたかろう」「こう言うのは隠れて
みてる方がおもしろいの!」「なるほど、私もいいかな?」「どぞ
どぞ」

などと会話して、透き間の空いた食堂の扉からのぞくみんな。

「じゃ、続きをお楽しみくださいーい」

実に明るい蒲公英の台詞の後、大激怒した桃香さんが大暴れした。
実のところ、怒らせると怖い人なんだと感心した。

第三生徒会ルート 第三話（改）（後書き）

キャラクターは持ってきていますが、世界観が違うので非情な判断が少ない「南洋校舎」です。

殺し殺されることを必要としない所為でしょうか、判断や評価が甘い部分がありますし、理想に対する想いが「綺麗」過ぎる面もあります。

とはいえ、理想に燃える世代が絶対権力で世の中をよくしようと動いたらどうなるか、そんな妄想も混入されています。

続きが気になっていただければ幸いです。

第三生徒会ルート 第四話（改）

第三生徒会ルート

第四話

「北郷一刀「桃香さんって、ひとたらしだよなー」

物資の分配や輸送保管が終わった頃、授業再開がされた。

第三生徒会始まって以来の成績と他の生徒会への交易収入の影響でモチベーションは高く、高い学習意欲に直結していた。

加えて、第一・第二からの正式な学習現場視察などが行われたことから、さらに優越感に近い感情をくすぐられていた。

ともあれ、そんな優越感も一週間ほどで弾ける。

劉蜀桃香会長から、第三生徒会で実施されている学習方法を第一生徒会にも開示した、という発表があったからだ。

驚きとともに抗議が殺到し、生徒会本部まで人が集まるまでになった。

全員を生徒会棟に入れるわけにはいかなかったので、代表者だけを引き入れてみれば、不満を持つているのは当初から第三生徒会を鼻屑にしてくれていた人たちだと判明した。

苦しい時期を耐え、この世の春を謳歌し始めたと思っていたのに、その春を捨てるのか、と怒りを弾けさせている彼女たちの手を桃香さんは握る。

「・・・あなたたちの求めるものは、贅沢な生活？」

はっと息をのむ音が響く。

正直に言えば、彼女たちの成績があれば、第一に移籍して贅沢な暮らしもできるし、そう考えて移籍した人間も多いと聞く。

「私たちはね、最高の学習環境と楽しい生活が目標」

それは桃香さんが就任直後からいい続けてきたことだったという。

「百戦百勝は善の善ならざるけり・・・」

戦争というものはそれ自体が浪費なのでしない方がいい。戦争になる前に決着をつけるのが一番だという話だ。

「みんなが遊んで暮らしたいというなら何もいえないけど、私たちの理想とともにあってくれるなら、こう考えて欲しいの」

「競い会える相手が外にいた方が楽しい、相手の技量が上えなくらいの方が楽しいって。」

そう、第三生徒会の影響範囲は狭い。

しかしその狭い第三生徒会の色が第一生徒会の広大な支配範囲に広がっていくのだ、と。

彼女たちは瞳を潤ませていた。

その野心に、ではない。桃香さんの理想に胸打たれたのだ。

それでこそ支持し続けた第三生徒会だ、と。

でもしかし、なぜ第二生徒会には開示しないのか？

そんな疑問に桃香さんは苦笑い。

「だって、いらないって言われるとねえ？」

すでに開示を打診しているが、独自の学習カリキュラムがあるのでいらない、と突っぱねられてしまったのだ。

なんともつたいない、と声を上げる生徒代表たちであったが、これからの目標について聞いて目を輝かせた。

第一と共同の計画が動いており、「クラブ」という名の校内企業を立ち上げようとしているという話を漏らした。

飲食や運輸、そして通信娛樂様々な分野の構想が語られたが、実のところ、この話がある前から第三では立ち上げたい組織があったのだ。

そう、インフラの中でも放送報道に関わるクラブの設立は第三生徒会古参の生徒には希望の星であり、最終目標とも言つ生徒も多いという。

その糸口を今回得たと聞いては心も躍ろうもの。さらには曹魏カリンも乗る気であり、来年度には開設開始も視野に入っているという。

そこまで聞いてしまえば反対とか異議なんて単語は消え失せる。すでに説得は終わり、今後の啓蒙の段階に入った会話からはずれは僕は、裏口から抜けた。

「隊長、お待ちしました」

最近僕に対して敬語が板に付いてしまった風。

「さつてと、噂をばらまきにくいのー」

「せやせや、がんがん行くでえー」

沙和と真桜とともに巡回にでる。

最近支配学区の拡大により、巡回に時間がかかるようになってしまったことが、苦勞に思うよりもうれしく感じるのは何故なんだろう、と思わず苦笑い。

「曹魏カリン」・・・あたしだってビビッタワよ」

【こんな緩くて恐ろしい洗脳はみたことはありません。】

そう報告があがってきた。

学習という行動や本人の自覚に至るすべてを、徹底的に人格改造するという手法について事細かに書かれたマニュアルをみて、第一生徒会は戦慄していた。

もしこれが悪意で手を加えるなら、ナチスドイツも真つ青のSS部隊ができあがること請け合いであった。

いつそ封印すべしと進言する人間もいたが、第三生徒会の勢力範囲の教室をみると首を傾げる。

そんなに悪いものなのだろうか、と。

本来学習というものの基礎は思考方法の焼き付けにすぎない。

効率的な考え方や思考手法を焼き付けた上で高度な学問を修めすものなのだ。

が、人格的な土台が正常にないと、どんなに積み上げても滑り落ちてしまう。

そんな土台を固めるところから開始しているマニュアルは、すでに企業新人研修のレベルを超えた恐ろしいものだが、強制的に行われるものではなく、あくまで自主的に事態が進むようにコントロールされている。

こんなことを知っている人間では、新入生用の客寄せなどに引かかるワケもない。

「封印？ バカを行っちゃ困るわ。これはね、私たちへの挑戦状なのよ？ これだけの手法を得ながら、何も変わらないのか？ ってね。」

曹魏カリンの一言に周辺は燃えた。

「ベースはこのままに、学習要項全般に手を入れるわ。次の期末までになんとしてもトップを取り戻すわよ」

応と答える周辺へ、カリンは満足げな笑みで答えて見せた。

「北郷一刀「生贄って、こういうことかなー」

共同研究会という組織と校舎ができた。

第一と第三の共同運営校舎で、いまいち順調ではない新型学習手法の伝達を目的にしたものだった。

まあ、キモの部分である「感染」は記載されていないのだから仕方ないかもしれないけど。

そんなわけで、感染の事実を伏せたまま、指導役として第三生徒会から北郷隊が派遣されたのだけど、試験教室に集まった人員をみて彼らは固まった。

そこに座る人員は以下の通りだ。

第一生徒会会長	曹巍 なつみね カリン（そうぎ かりん）
第一生徒会副長	夏峰 なつみね 春蘭 しゅんらん
第一生徒会副長	夏峰 なつみね 秋蘭 しゅうらん
第一生徒会書記	遼瀬 りゅうし シア（わたらせ しあ）
第一生徒会総務	許 き 着依
第一生徒会総務	悪頼 かつら ルル（あくらい るる）
第一生徒会会計	桂 はなよ 花代
第一生徒会会計	程ケ谷 ほどがや 風
第一生徒会会計	嘉和 かかず 稟 りん

つまり第一生徒会幹部全員がそろっていたのだ。

「さあ、初めてちょうだい」

意地悪そうなカリン会長の声とともに、模擬授業と称した、一種の拷問が始まった。

カリン会長以下、夏峰妹、桂、程ヶ谷の猛烈な質問の雨に僕らは打ちひしがれた。

「楽進 風……隊長、毎日美味しいものをありがとうございます」

昼休みのこと。

デイスカッションを含める形で食事会を開いたのだが、デイスカッション部分は消え去った。

隊長が料理を得意と言う情報を聞いた悪頼 ルル嬢が、隊長に料理勝負を仕掛けたからだ。

次々と出される和洋中折衷の料理の数々に、誰もがしゃべるのを惜しんで口をつけた。

全員が満腹する頃には楽しそうな会話を交わす二人の料理番が現れて、テーブルの上を見渡した。

おお、と感心する二人に曹魏カリンが声をかける。

「……それで、どちらの勝ちなのかしら？」

言われた瞬間、真っ赤になってうつむく悪頼ルル。

怪訝そうに眉を寄せた曹魏カリンへ隊長はいう。

「途中から一緒に作ってたから、勝負も何もないよ」と。

「カリン様、兄様はすごいんですよ！！」と語るのは悪頼ルル。

火の加減が絶妙だとか、煮蒸しに極まりがあるとか。
身振り手振りで語る悪頼に、意地悪そうな笑顔で曹魏カリン。

「・・・よっぽど惚れ込んだみたいね、ルル。」

いわれて真つ赤になる悪頼ルル。

「この島には料理関係に詳しい人が少ないから、結構白熱しちゃったよね。」

「はい!!」

まるで本当の兄妹みたいだと、ちよつと嫉妬の許 着依。

「きい！ あの豚の角煮、兄様が作ったんだよ！」

「え、ほんと！？ 絶対ルルが作ったと思ってたのに!!」

「ほんとだよー、作り方も覚えたから、今度作るねー！」

「ひゃっほー！ ルル、兄ちゃん、ありがとー!!」

小躍りする許 きい。

「こら、キイ。食卓で暴れるな。」

「春蘭様、ごめんなさい。」

さて、この二人の成績が足かせとなっていた第一生徒会だが、実のところ四時間目に行った小テストで恐るべき結果がでている。

ラスト十分で行った小テストは、国語・古文・数学・物理・地学・英語 という科目を2問ずつそろえたものだったにも関わらず、全員が80点以上を出していた。

そう、全員が。

少なくとも苦手教科や不可能教科のある人員がいるにも関わらず、全員80点以上。

現在、桂 花代以外の全員点数を知らない状態だが、理解力という点では、誰もが疑えぬレベルにたたき込まれていることを自覚しているようだった。

「……北郷、聞きたいことがある」

雑談の中、夏姉妹の姉が口を開く。

「この中で、私が一番理解していることだ。」

「はい。」

何を、ではない。

しかし隊長はわかったようだった。

「……過去を購えるだろうか？」

目をつぶって言う夏姉。

それに向かって隊長は言う。

「過去を購うより未来を作るほうが楽しいですよ」

言われた夏 春蘭は、ちょっと寂しそうにほえむ。

「そういう言い回しも理解できていなかったのだな、私は」

だが、と曹魏カリンをみる。

「カリン様のお役に立てる、そう思うだけで嬉しい。感謝するぞ、

北郷」

いいえいいえ、と首を振る隊長。

無敵だな、隊長は。

何というか、ずるいほど無敵だし。

丸一日の模擬授業で、第一生徒会幹部の分が終わった。

翌日から幹部による成績不良者向けの補講が行われつつ、前日の経験を確認していた。

初等部、中等部の成績不良者は、その後の三日にわたる補講による解消され、高等部に至っても週末には成績不良者が激減した。

これは高等部あたりで成績的にくじける人間が多いせいと、第一生徒会の高等部人口が多いせいなのだが、高等部の成績不良者が激減するだけで平均点はさらに上昇する。

むろん点数なんて外向けのに言い訳にすぎない。

本来の目標は南洋校舎全体の底上げなのだから。

そして学ぶことを知識を蓄えることを知恵を駆使することの喜びを全身に感じ、そして発揮したいと思える環境を作り上げることこそ現在の第一および第三生徒会の目的なのだから。

第三生徒会ルート 第四話（改）（後書き）

少し短めの更新です。

徳とか覇とか色分けをされているものの、目指す方向が一緒であったと腹を割って話せたことが、このルートでの分岐点になっています。

では、話せなかったら？

・・・その辺は以後のルートで明らかにしたいと思います。

第三生徒会ルート 拠点フェイズ1（改）（前書き）

メインシナリオでは外れがちな日常と、メインの話では外れがちなキャラに焦点を当てていきたいと思います。

第三生徒会ルート 拠点フェイズ1（改）

聖フランチェスカ学園 南洋校舎

第三生徒会ルート

拠点フェイズ1

「飛張 鈴「・・・さすがお兄ちゃんなのだ。」

今日は巡回をお兄ちゃんと回ることになった。

凧ねえたちは不満いっぱいだったけど、鈴鈴だってお兄ちゃんとデートがしたいのだ。

そういうと、お兄ちゃんや凧ねえたちが真っ赤になった。

「あのね、鈴鈴。デートじゃなくて「巡回」だってば。」

お兄ちゃんの話は分かるのだ。
けど、

「一緒に歩いてお弁当食べて、楽しくルンルンしてるのは、やっぱりデートなのだ!」

びしっというと、何故か桃香ねえちゃんが鈴鈴の隣で同じポーズをしているのだ。

「そうそう、ずるいよね、ずるいよね! ねえ、鈴鈴ちゃん!」

「そうなのだ! 桃香姉ちゃんはお仕事さばりただけだけど、鈴

鈴は巡回の仕事なのだ！」

「ひどっ！ まさかの裏切り、ひどっ！！」

崩れ落ちるオッパイ星人を無視して交渉し、鈴鈴はお兄ちゃんとのデート権をゲットしたのだ。

お兄ちゃんと巡回するのは、最近第一から第三に移ってきた人たちのエリアがいっぱい、みんな嬉しそうにしていたのだ。

嬉しそうな顔のお姉ちゃんたちを見るのは嬉しいから、鈴鈴も嬉しくなれる。

悲しい顔や泣き顔はだめなのだ。

そういうと、お兄ちゃんは優しく頭をなでてくれた。

暖かくて柔らかくて、いい匂いの手……。

「鈴鈴、りんりん！ 僕の手は食べ物じゃないっ！！」

……あ。

あんまりにも美味しそうな匂いなので、口に入れてしまったのだ。さすがはお兄ちゃん、侮れないのだ。

「馬場 翠「……なんか、こういうのもいいよ、な」

なんつつか困るんだよな。

あいつ、北郷一刀。

生まれてこの方親族以外の男と口をきいたことがないってなお嬢様育ちなもんで、口をきくだけで一苦労だ。

「めし」「おかわり」「おはよう」「おやすみ」って、どこの亭主関白かってぐらいだ。

こんな無愛想なんじゃあアイツだって愛想尽かすかな、とか考えてる自分がいやだった。

それでも、ほかの娘みたいに積極的になれる訳でもなし。どうしたらいいんだろう。

はあ、と深いため息をはいたところで、背後から声がかかった。

「翠さん」

柔らかなこの声はアイツ、北郷一刀。見れば背中に鈴鈴が背負われてる。

「おいおい、巡回中にダウンかよ。」

拳を当てようとした私を笑顔で止めるアイツ。

「翠さん。」

あー、わかってるよ。

すぐに暴力に訴えるのは、ってんだろ？
解ってる解ってる、わかってるさ！

「・・・翠さんは子供好きなんですね。」

・・・は？

「妹さんの面倒も、鈴鈴たちの面倒も、すすんでかってでたりしつ
けをしたり。」

常識ないことを怒ってるんだよ、ガミガミしてるだけだ。

「誰かがいなければならぬことがあります。それですんできるって人って、なかなかいませんよ？」

だーから、なんであたしが子供好きなんだよ！

「そりゃ、大嫌いなら無視しますよね？」

思わず脱力。

「大好きでも甘やかしすぎると良くないって事は、僕も知ってますけど……」

苦笑いで背中の鈴鈴をみた。

「……こう、無防備に『好き』ってされちゃうと、どうしても拒めません。」

そんなもんかな？

「そんなもんです。」

にこやかなアイツをみると、胸の内がざわめく。

だから正直にそのことを言うと、アイツはにこやかにほほえんだ。

「それはね、『好き』って気持ちをちゃんと言葉にしていないからですよ？」

瞬間、私の頭は茹であがった。

「・・・そ、そ、そんなこと、恥ずかしくていえるかよ」

そうですか？　　つと首を傾げるアイツ。

「僕は結構いえますよ。」

と言ったところで、ひょいっとな鈴鈴をおろす。

「もうちょっと乗ってたかったのだ。」

「お客さん、サービス終了ですよー」

「残念なのだ。」

そんなやりとりの後すぐに、私の横に立つアイツ。
その隣に鈴鈴がたつ。

「じゃ、ちよつと練習してみましよう」

そういったアイツは、胸を張って大声で言う。

「だいすきだ——！！！！！」

周辺の生徒が驚いてこつちをみた。

「だいすきなのだ――！！！！」

鈴鈴も恥ずかしげもなく叫びをあげる。

「空も海も南洋校舎も、」

「ご飯もお肉もラーメンもみんなな．．．」

「だいすきだ——！！！！！」

二人の叫びをきいた生徒たちは最初は驚いていたけど、そんな叫びをきいて頬をゆるませる。

二人の叫びが終わったところで拍手が響きわたり、アイツと鈴鈴はハイタッチを交わした。

「・・・と、こんな感じで思いの丈を口にしてみると、見る見る健康ですよ」

「鈴鈴はおなが空くのだ。」

「そりゃよかった。」

そついいながら二人は再びハイタッチ。

「・・・そんなことできない、よ」

私の言葉ににこやかな笑みのあいつ。

「じゃ、ふつうの声で」

隣にたつたままのアイツは言う。

「ハヤシライスは？」

少しの逡巡。

「・・・大好きだ」

いえた、そう思った瞬間、何故か胸の奥が軽くなった。

「第三生徒会は？」

「大好きだ」

今度は瞬間的にいえた。

「晴れた青い空は？」

「大好きだ」

そう、大空が好き、青い海も好き、星空も好き、流星も好き、満月も好き。

好きだ、好きだ。

「じゃ、僕は？」

「大好きだ！」

・・・あれ？あたし何を言ったんだ？
見ればニヤリと笑うアイツと鈴鈴がハイタッチ。

「僕も」「鈴鈴も」

『大好きだーーーー！』

叩きつけられたマグマのように熱い言葉。
灼熱の想いに私は失神した。

気づけば自分お部屋だった。
胸の内にはあの声が響く。
北郷一刀のあの声が。

「・・・大好きだ、か。」

・・・なんか、こういうのも、いいよ、な。

「忠　紫苑「いいわー、青春ねえー」　琉璃「ねー」」

翠ちゃんをかついで帰ってきた一刀君は、そのまま部屋に彼女を置いてきた後、キッチンに立った。

あまりに似合っている姿に感動してか、娘の琉璃が一刀君をまねしようとしていた。

食器を洗ったり配膳したりしかできていないけど、専用エプロンを作ってもらってから、かなり張り切っているようだった。

「カズにい、おわったよお」

「ありがとう。」

優しく撫でつけるその姿は、この島にはない父性を体現したかのように思える。

女子校同然の離島に男子が来るときいて、猛然と反対したものだったけれど、今となつては押しやりたい過去に思える。

「あ、紫苑先生。今日は晩酌なしですか？」

「・・・もう、いい気分だったのに」

不満を漏らす私を見ていた一刀君は、ちよつと赤くなった。

あら？　なにか見せちゃったかしら？

ちよつと自分でチェックしてみたけど、色気ポイントは見せていなかったはず。

何というか、彼も若さが溢れる年代なので、脂の乗り切った世代である私や桔梗は、あまり彼の刺激にならないように気をつけているのだけだ。

私が小首を傾げると、さらに赤くなつた一刀君。

「・・・その、紫苑先生が余りにもかわかったので。」

私の方こそ赤面させられてしまった。

「な、な、なに言ってるの、もう。」

思わずもってしまった私の隣に座った璃璃は、にっこりと笑う。

「おかーさんかわいいー！」

あーもー、からかわないのー！

く馬場蒲公英「・・・いい雰囲気ですが・・・」

もちろん空気は読みません。

あえて無視する、それが蒲公英クオリティー！！
そんなわけで、自己主張を開始した。

「ここにいるぞー！！」

ずばーん、と勝手口からはいると、深紅ともいえる顔色になった
紫苑先生が、ばたばたと食堂から退散した。

「ありゃ？」

予想以上の反応に驚く私へ、璃璃ちゃんが抗議満載。

「もー、いいところだったのに」

「やははは、ごめんごめん」

でもねー、若い身空としては、貴重な若い男子をくわえ込まれるわけにはいかないのでしょー

「くわえこまれません。」

いやいや、あぶなかったってー。

大人の手練手管で陥落寸前だったんだよ？

「あのですね、僕は紫苑先生を尊敬してるだけですよ？」

それじゃ、先生には女を感じない？

「いや、それは……」

もじもじとした一刀君は、それでも正面から答えた。
紫苑先生の魅力は三点だと。

「成熟した女性の色気」「いろ？」

「愛情、友情、なんかの情愛」「じょう？」

「担当教科によらない幅広い教養」「きょう？」

……

「りやくして『しきじょうきょう！』はうっ！！」

「北郷一刀」……撤退「忠 璃璃」……了解「

タンポポ登場と共に一度去った紫苑先生が、音も無くぱんぱの背後に舞い戻ったのを見て、なんとなく寒気を覚えた。

それでも薔薇色に頬を染める紫苑先生が視線の先にいたから、色々答えたんだけど……

「略して しきじょうきょう……」

瞬間、真つ黒な表情になった紫苑先生を視線の端に捕らえつつ、璃々を抱えて緊急脱出。

「うわぁ、黒いママってひさしぶり」

ひ、久しぶりなんだ……。

「きょうはお部屋が怖いから、桃香お姉ちゃんのところにとまろつと」

……いやぁ、流石にたくましいなぁ……。

「馬場 翠「……?」

朝起きてみると、なぜかタンポポが布団を被ってガタガタ震えていた。

何かあったかな？

……まあいいか！

今日も北郷の朝飯だ」

「だいすきだ」」

第三生徒会ルート 拠点フェイズ1（改）（後書き）

拠点フェイズ、いかがでしょうか？

メインシナリオはがちがちですが、拠点フェイズでは色々とグダグダやっけていきたいと考えています。

御意見ご要望ありましたら、お願いします・

第三生徒会ルート 第五話

第三生徒会ルート

第五話

三つの生徒会すべてに参加せず、さらには授業にも参加しない生徒を「浪人学生」と呼ぶ。

生徒会に所属せず授業に出ないという時点で恒常的な配給はなく、寝食を自らで得なければならぬ立場にあるといえる。

時には廃屋で、時には空き倉庫で夜露を避け、小川や池で身を削ぐ毎日だが、そんな浪人救済のために慈善的活動も行われている。

主に第三生徒会の範囲で、小規模な校舎を無料宿泊所として解放し、自治の屯所を置くことで、急場の分校舎として扱われ、教師の派遣すら行われていた。

それで学習意欲が生まれればよし、生まれなくても寝食ぐらいは提供し続けたいというのが第三生徒会の方針だった。

とはいえ、第三生徒会の勢力は今まで非常に狭かった関係上、食の方は途切れがちであったのだが、今期の中間考査以降、第三生徒会の状況が好転し、日に一食の配給があるか無いかだったものが、二食の永続配給になった。

それだけで驚こうかというところなのに、最近では二食に一度の割合で「手作り」料理が出てくるのだ。

その噂は全島に広がり、いつの間にか食事時になると見知らぬ浪人まで集まるようになった。

暖かな食事、それだけで心の中まで暖まる。

それが全島唯一の男子が目の前で作ってくれている、それだけで

いろんな気持ちに火がつきそうな、そんな彼女たちであった。

「北郷一刀……夜逃げかと思いました」李 真桜「いいや、ありや火事場泥棒やで」

配給に行くという桃香さんの装備を見て絶句した。

山盛りのインスタント麺ってどんな拷問よ、と。

とはいえ衛生面や水場の問題があるから、と言いつける桃香さんだつたけど、ようするに……

「……未だ料理ができない、と。」

ぐうーと下を向く桃香さん。

だったら、と僕ら北郷隊は準備を開始。

推定20人分の軽食を作る装備を始めた。

一学期半ば、北郷隊には人員が増員されて、すでに真桜支隊・沙和支隊・風支隊が発足していた。

主だったメンバーは、中間考査前に恭順した元の第一生徒会の構成員だった。

生徒会の方針で、勉強以外してこなかったという話なので、大変かな？と思ったけど、今の生活の方が楽しいという。

メリハリがあり、やっかいことも多いけど解決できたときの喜びが大きい、と。

そんな彼女らとともに大荷物を担いだ僕らが向かったのは第二生徒会との学区境にある小さな校舎だった。

ちよつと前まで通っていた分校に近い大きさで、何となく懐かしく思える。

「隊長、はじめましょう」

「はい！」

みんなでてきぱきとキャンピングキッチンを組み立てた。

「隊長、釜できたで」「野菜は一通り洗ったの」「……肉は自然

解凍中です。」

「りようかい！」

凧・沙和・真桜支隊の報告を聞き、腕まくりの僕に続く北郷支隊。料理適正のある人間を集めた僕の直参部隊。

「さあ、みんなのおなかをつかみましよう！」

『了解、隊長！！』

〽劉蜀桃香「毎回おいしいんですよ」

一刀君が同行するようになって、五回目になる調理型の食糧配給はじめは横は入りとか色々と揉めたけど、断固として対応した北郷隊のおかげで、今ではすっかり静かな行列になっている。

当初は20名分程度だった食料も、島中の浪人学生が集まっているんじゃないかというぐらいの人数になった。

総数200名の浪人相手に毎回食事を提供するなんて、気がおかしいんじゃないかしら、と曹魏カリンさんはあきれてたけど、私は私の行いしかできないと笑うことにした。

順番に食事を受け取る列の一つで、ちよつとしたもめ事があったようだ。

小走りに近づくと、赤毛長身の女子が、うつむいて列を止めていた。

最前列でつぶやく彼女の対応をしているのは一刀君だった。

「……だから、この場にいない人の分は受け取れないんですよ。」

「……でも、もう一人いる。嘘じゃない。」

そう、この場にこれない人の分を持っていききたいからもう一食くれという話はよくある。

だまそうとかそういう気持ちではないのもわかるが、それはそれでルールなのだ。

「何でこれないんですか？」

そう聞いた一刀君に視線を向けた女子はいう。

「・・・ねねは病気。病気は食べないと直らない。恋の分をあげてだけじゃ足りない。」

思わず辺りを見回す一刀君は私を見つけた。

「桃香さん!!」

「わかつてる!!」

私は周囲に指示を始めた。

「北郷隊に指示します! 真桜・沙和支隊はこのまま業務続行。凧支隊は病気の少女の確保、Mキットを持ち出して! 北郷支隊はすぐに連合保健室へ!!」

「了解や!」「了解なの!」「りようかいです!!」

「・・・連合保健室より本部の方が近い。祭先生をとつかまえてきます!!」

「みんな、お願い!!」

ざわつく浪人学生たちへ私は視線を送る。

「病気や体調不良、健康不安がありましたら、是非とも私たちを頼ってください! 私たちは私たちの力がある限り支えます!」

そして手を打ち合わせる。

「さあ、配給は終わってません。どんどん食べて元気になりましょう!」

私の言葉に気を取り直した浪人学生たちの列は動く。

「あなたも食べてください。」

私の言葉に赤毛長身の女子は首を横に振る。

「あなたまで倒れては、その女の子が悲しみますよ?」

すこしだけ、ほんのすこしだけ視線を合わせた彼女だったが、それでも横に振る。

「その子が元気になるまで絶食ですか?」

おずおずと頷く彼女の肩をたたく。

「それで倒れれば意味がありません。彼女を助けたければ食べなさい。彼女を介護するのはあなたなんですよ? 介護には体力がいりま

すよ？」

いわれて驚いたかのような視線の彼女は、ゆっくりと頷いた。

「じゃ、これはあなたの分。」

そういつて渡すと、彼女はゆっくりと食べ始めた。

「北郷一刀……せいせいせい」

栄養失調による感冒で、このまま放置すれば死亡という状態だったらしい。

たかが風邪だ感冒だと思うこと無かれ。

少なくとも人間にとって死に至る病の一つなのだから。

酒盛りをしていた祭先生を担いで走った僕は汗だくで倒れたが、そちらは診断なし。

祭先生が少女へ手早く薬＋栄養剤とスポーツドリンクで水分補給をしたところ、みるみる血色がよくなっていった、桃香さんや北郷隊のみんなが歓声を上げた。

直接見てはいなかったけど、外で気になっていたという浪人学生たちも、心から彼女の回復を喜んでいたと沙和たちから後で聞いた。まるで我が事のように喜び、抱き合う彼女たちを見て、やはり行うべき善行はあると確信した。

「ごころうさま。」

座り込んでいた僕の目の前へ、桃香さんから水筒を差し出され、ありがたく飲む。

出納を受け取った後、僕と桃香さんは、ありがとうを繰り返す女子を見てとれる。

小さく小さく、少女の手を握りながらありがとうを繰り返す女子。頑張つてよかったと思う瞬間だと思う。

「蓋黄 祭「北郷がいないと、つまみがぱつとしない」

酒盛りの途中で、北郷隊に連行されてみれば一人の浪人学生が衰弱していた。

元、第二生徒会所属の少女で、音宮ねねという名の少女であったはずだ。

学業成績の面で注目の高い生徒で、三期ほど平均成績上昇に役立ったが、四期目で生徒会から離脱した。

原因は直系諸子によるいじめ、だったはずだ。
極めてバカバカしい話だ。

少ないツテを伝って入学させた戦力を、自らより上回る才だからと蹴落とすなど、孫呉の血脈ではないと言い切れる愚かさだった。さらにはその事実を親族へ虚偽報告して自らの安寧をはかるなど信じられるものではなかった。

故に、私の孫呉の為にと私的懲罰をしたところ、アホ親どもの非難が集中したというどうでもいい理由で私は謹慎と所払いの処罰を受けた。

方や孫呉の礎であったはずの少女、方や孫呉の礎のはずが拒まれた女。

どうにもやりきれない思いだった。

ともあれ、目の前の少女を救うことに何の抵抗も感じない私が処置をすると、少女の血色は見る見るよくなっていた。

ショック症状が出ないことを確認した私は、処置終了を宣言する。少女の傍らに座る女子へ「合同保健室へ行くべきだ」と進めたが、彼女はフルフルと首を横に振る。

なぜか、と聞くと、困ったかのような顔でつぶやくようにいう。

「・・・ねねは第二が嫌い。第二を憎んでる。だから行けない。」

なるほど、と胸の内ではつぶやいて、そして私は振り向いた。

汗ダクの少年と徳の旗頭の少女に。

「・・・ならば第三で面倒見るしかあるまい？」

気持ちいいほど素直に、少年少女は「はい！」と返事をするのだ。
った。

何とも気持ちいい連中だ。

ウチの人間に、こういうバカっぽいところを見習ってほしいと思うのは贅沢であろうか？

く北郷一刀「祭先生は病人食じゃなくていいって言っから・・・」

第三生徒会の保健室に寝かされていた少女が目覚めたと聞いて、
手空きの全員が飛んでいった。

和を尊ぶ姿といえるかもしれないけど、どちらかというと下世話
な野次馬根性だな、と思う。

「隊長、なにを作るんですか？」

僕が米の状態から鍋に入れるのを見て首をひねる風。

「ああ、黄金のリゾット、ってしててる？」

「・・・ああ、イタリアの。」

そうそう、とほえむ僕。

「・・・隊長は何でもできますねえ・・・。」

「いやいや、腕っ節には自信がないので、その辺はお願いすると思
うよ？」

あはは、と笑いあう僕らの背後で、すごい怒声が響きわたる。

子供の声だな、と思った声に愛紗の怒声が被さった。

「・・・なんなんでしょう、隊長」

まあたぶん、

子供『頼んでもいないのに勝手に助けた!!』

愛紗『なんたる無礼!!』

ってところだろう、と言うと、背後で軽い拍手。

「いやはや、見事だな北郷。まるで現場で見ていたかのような千里眼だ」

星さんがニヤニヤ笑いで現れる。

「・・・星さん、実際は？」

「いや、北郷が言ったとおりの展開で、現在進行中だよ。」

ほら、とばかりに指さす方向で怒鳴り声が交わされている。

うわー、愛紗さんおとなげないなー。

隣で桃香さんも困ってるんだろうなー。

そんなことを思いつつ、仕上げることにした。

「隆蜀桃香「わ、わたしもたべるう・・・！」

何語で言っているかわからないわめきあいが一瞬間中断した。

みんなが視線を向けた方には、お皿に何かを盛って持ってきた――刀君。

ふらふらとベットに近づき、布宮さんの隣に座った。

「・・・なに勝手に恋様の隣に座ってるですか！！」

手を振りあげようとしたが、全く力が入らないのか体を揺らすだけだった。

「・・・ねね、安静にする。」

「れ、恋様あ！ 私は恋様の貞操を・・・」

大口を開けた少女の、ねねの口に、黄金色の何かを放り込んだ。

びっくりして吐き出そうとしたのに、その動作も止まり、ゆっくりとゆっくりと咀嚼を始め、そして飲み込んだ。

「どう、おいしい？」

「お・・・おいしくなんかありません！！」

「じゃ、もういらない？」

「・・・おまえが、おまえがどうしてもというなら、べつに、食べてあげてもいいです。」

「・・・ねね、素直になる。」

「れ、れ、恋様あ~~~~!!」

力が入らない上、点滴のせいで両手の自由にならない少女に、女子が食べさせてあげるといふ姿が、私たちの心を何かで満たす。

「ところで、一刀君。これ、私たちも味見できる？」

もちろん、と笑う彼を背後に、私たちは食堂にダッシュした。

我先に、という単語はこう言うときに使うものだと確信した瞬間だった。

「北郷一刀」・・・猫まつしぐら「布宮恋」(こくこく)」

うちの幹部連中の行動に啞然としていた少女だったが、やがて小さく笑い始めた。

「・・・おかしな連中、です」

でも、あたたかい、です。と。

そんな少女を優しくなでる赤毛短髪女子。

「・・・ねね、第三は怖くない？」

そう聞くと、少女は小さく頷いた。

「・・・第一と第三、どっちがいい？」

聞かれて視線を女子に合わせる。

「恋様。恋様は、どこにも所属したくないと・・・。」

ふるふると首を横に振る女子。

「・・・恋は、ねねを守れると思ってた。」

災いからも困難からも守れると思っていた、と彼女は語る。

しかし、病気になったねねを守ることができなかった。

救うこともできなかった。

そして救ったのはたくさんの生徒だった。

そう、一人でどんなに力を持っても、沢山にはかなわない。

それは第二で学んだはずなのに、それを忘れて寧々を危険な目に

遭わせた。

ねねを守るためには、共に歩くためには、どこかに身を寄せなければならぬ。

それはどこか、どこが一番ねねに危険がないか。

彼女はそう、訥々と語る。

「ねねは、ねねは、恋様と一緒にならどこでも天国なんですよ？」

「・・・第二でも？」

「第二は「どこでも」にはいかないのです。」

「雲関愛紗「来るものは（精査するが）拒まず！」

保護された二人は、第三生徒会への参加を希望する。

すでに出自がしれている音宮ねねは来る期末試験への補強になるし、布宮恋も心根が気に入った。

副長である私は賛成したところ、満場一致で全員賛成になった。

もちろん、賛成の急先鋒は桃香だ。

極めて順調に自己紹介が進んでいく中で、一刀の自己紹介を聞いてねねが驚いた。

「おおー！？ おまえは主計じゃないのですかあ！？」

「いいえ、親衛隊の隊長ですよ」

「なんとおー！」

曰く、過去生徒会には主計という役職があり、衣食補給をまかなう役職だったのだが、食のカイリとともに失われた役職なのだそう。

「あれだけのリゾートを作れる人員がいるならば、間違いなく主計復活かと思っていたのにー！」

悔しげにじたんだをふむネネに一刀が隣にたつ。

「第一の悪頼さんを知ってますか？」

「・・・一応知ってるですよ？」

「彼女は、たぶん、僕たちと同じレベルではなせる人です。」

「なんとおー!？」

「で、こんな計画があります……。」

ぼしょぼしょと耳打ちをされていたねねは、次第にきらきらと光る瞳を見開く。

「……同志、その日まで戦いましょうぞ」「ええ、戦いましょう」
後で内容を聞いたところ、クラブ活動設立にあわせて「料理家政部」を設立して、全島の胃袋をつかむ計画をしていると囁いたとか。

「……ねねの料理おいしい。」

ちよつと笑顔を浮かべた恋をみて、ねねがあれほどに世話を焼きたがるかを、全員が知った。

『か、かわいい……。!』

癒し、癒しなのか!?

私の胸の内をかき乱す愛らしさに身悶えてしまったが、それは私だけではないようだった。

「北郷一刀「たぶん、千人クラスでも材料に無駄を出さないよ。」

料理技能といっても色々だ。

僕や悪頼さんなんかは上限15人分ぐらいが見切りの限界なんだけど、このほど新設した主計の音宮　ねねはすごいのだ。

およそあり得ない量の大量調理を見切れるのだ。

さつと200人分ぐらいの材料を見切れるのはすごい。

「そんなにすごいことなの？」

桃香さんは首を傾げるが、どれだけすごいかを比喻できないのがもどかしい。

「一人前の材料を200倍すればいいのではないのか？」

愛紗のそんな一言に、僕は失笑した。

悪頼さんもいれば鼻で笑うだろう。

「・・・ちよつとム力つくぞ、その態度。」

正直に言えば、説明しきれないのだが、こんな風に言ってみた。

「一对一の勝負では絶対に負けない人がいて・・・」

「ふむ。」

「そんな人にこう言うんです。『200人同時に相手できますか？

一对一を200回だから行けますよね？』って」

「まてまて、乱戦は一对一とは違うぞ？ 戦略や策が必要にな・・・

・待て、そういうことなのか？」

そう、規模が違つと調理の仕方や準備の仕方が全く違つのだ。

僕らは寸胴2本ぐらひは見切れるけれど、同志ねねは均一の味のものを寸胴で10本分準備できるのだ。

が、逆に一人分とか二人分という見切りが苦手で、最低でも十人分からだとか。

「すごいねー。」と単純に感心する桃香さんのとなりで唸る愛紗さん。

どうも格闘の比喩がヒットしたらしく、料理に対する見方が変わつたらしい。

とは言え触らせませんよ？ 砂糖と塩と味の素が見分けつかない人には。

そつという僕に眉をしかめる愛紗さん。

定期配給についてきた愛紗さんは、ねねによる余りに見事な調理指示に感動すらしていた。

「昔、中国でいく人も調理人を指示する指揮者のような役目があったそうですよ？」

「では、ねねはそういう才能があつたという事か？」

「そうかもしれないけど、でも、楽しそくだよね。」

桃香さんのつぶやきに、僕も愛紗さんも頬をゆるめた。

「・・・なにしてるです！ 主力がいつまでも休憩してるじゃないですよ！--」

ぴしっと指さすネネに向かって僕は手を挙げる、
「了解、同志ね。北郷一刀はこれから参戦します」
「さー、がんばるですよ、夢のために！！」

誰しも夢があつた。

漠然として言葉になつていなくても、胸に秘める思いがあつた。
しかしそれが叩きつぶされるような思いにもあつた。

潰されてひしゃげて、二度と立てない気持ちにすらされた。

だけど立ち上がることができる、立ち上がりあることができる。
それは仲間がいるから。

肩を並べてくれる仲間がいるから。

僕はそう思う。

第三生徒会ルート 第五話（後書き）

真恋姫を原作としているということで、それなりの人間がそれなりの陣営に行きます。とはいえ人間関係までは引きずりにくいのでオリジナルしてます。

ゲームでは恋のおまけっばいねねですが、本作ではねねが主役です。というか、弄りやすいしw

そんなわけで、次回はまた拠点の予定。お楽しみに

第三生徒会ルート 第六話（前書き）

次回拠点と書き込んでおきながら、本編が続きます。
ごめんなさい

第三生徒会ルート 第六話

第三生徒会ルート

第六話

「曹魏カリン」・・・歯がゆい感じ、ね」

集まった報告書をよんで、少しだけ安心した。

第一生徒会でも浪人学生問題は看過できない問題としていたが、関われば引き取ることになり、再教育を必要とするため、そのための予算と平均成績低下を余儀なくされる。

関わるべき問題ながら触れざる問題、それが浪人学生問題とされていた。

が、報告書をみれば理解できる。

第三生徒会は第一とは全く違うアプローチで事に当たり、極めて有用な人材を発掘しているようだ。

音宮ねね、布宮恋、両名は、構成・目的・目標すべて謎とされる第二生徒会の中核近くにいた生徒であり、この南洋校舎における謎の一つに肉薄している生徒のはずだった。

そのために第二生徒会からの追っ手は多く、逃亡に次ぐ逃亡の生活を送っているはずだった。

最終的には学籍を改変してでも第一に引き込むことを検討したが、先頃第三生徒会幹部に抜擢された旨の発表があった。

布宮は総務で順当だろうが、音宮がなんと「主計」とずいぶん古風な役職で就任していた。

主計は過去、構内建設が多かった頃の名残の役職で、おおその供給システムが形成された現在では、名誉職としての立場でしかなかったはずだった。

が、主計といわれて私も思い至る。

そう、再び校内建設の時代を引きずり出そうとしているではないか、と。

つまり、第一生徒会である私へのサインだとも読みとれる。

なるほど、と腕組み一つ。

現在、生徒会幹部の拡充は難しい。

なにしろ新学習手法の徹底により幹部候補学生の学習時間も必要とされているため、新たな役職や職種を振るわけにはいかない。

ともなれば、既存の幹部で優秀な者に兼任させつつ、必要な人材を引っ張ってくるほかない。

いや、逆に妙手とも言える。

「・・・桂花！」

「音宮ね・・・信じられないことばかりですぞ」

第三生徒会の主導で行われていた自習会は恐ろしい効率でした。

少なくとも、通常授業の効率の10%増しという状態が全教室で維持されているという異常事態をみれば、本土の教員だって見学に来るだろうと思います。

もちろん、ついてこれない生徒もいましたが、少なくとも落ちこぼれてはならず、全体の2割落ち程度の成績は保っている状態です。

同志一刀曰く、「南洋校舎に選抜されるんですから、この程度の成績はあたりまえでしょ？」とのことだった。

確かに言われてみればそのとおりで、本土から選抜されているのだからこの程度の成績でいいはずもない。

しかるに、われら「南洋ぼけ」してしまっている我らのはその自明の理すら理解できていなかったのが恥ずかしい。

学力が低めであった脳味噌筋肉系だった幹部も中間試験では大き

く点数を上げ、頭脳労働向きの幹部もさらに飛躍させていたという。加えて、中間試験まえに組み入れられた元第一の生徒の存在が、おもしろい具合に作用しています。

編入前の成績が嘘ではないかというほどの好成績。

第一生徒会による身上書で書かれていたような無気力者など皆無で、みな親衛隊や総務部隊に組み入れられて生き生きと活動しているのです。

配給の活動の時に、それとなく聞いてみると、北郷支隊の一人はあっけらかんという。

「ああ、確かに身上書は嘘じゃないし、成績も悪かったなー」

キャベツを刻みながらいう彼女はにこやかだった。

「・・・でもさ、第三に入ったらさ、ご飯もおいしいし勉強はおもしろいし、こういう活動だって楽しいじゃない？ エアコンの中の生活じゃあ解らなかつたと思うんだ。」

南洋校舎にあつて部屋の中しか知らなかつたんだ、と苦笑いの彼女。

「最初はさ、隊長かわいいじゃん？ 粉かけよーかなー、なんて思つたけどさ、でもさ・・・」

優しい笑顔の彼女はいう。

「隊長つてそういうんじゃないし、桃香様は泣かしたくないしさ・・・、わかるだろ？」

かわいいウインクに私もうなずいてしまいました。

「ま、鞘当てしてる幹部連中を冷やかしてみてるのだけで大満足なんだわなー」

あはははは、と笑う彼女の言葉が、よくよく解つてしまう私は彼女と同じ立場なのかもしれないと思いました。

今までにない優しい気持ちで周囲をみると、浪人学生という者がいかに追いつめられている存在かを理解しました。

食を、衣を、住を持たない、誰にも庇護を求められない。

先日までの自分がいかに何も見ていなかったかを知ることができ

た気がします。

人の余裕とは、やはり衣食住を満たされないと生まれないものなのだと考えさせられます。

「・・・違うんじゃないかな？」

私の独り言に彼女は答えた。

「衣食住が足りなくても、余裕はありそうじゃない。」

誰、という言葉はありませんでした。

でも、私たちには、ある一人の人間の顔が浮かんでいました。ふわふわ髪の水エホエ少女。

確かに今期以前は困窮と困難の固まりのような生徒会だったことを思い出す。

それでも「お人好し」の評判は変わらなかったはずだ。

あいもかわらぬお人好し生徒会が何故化したかなんて決まってい

る。

「・・・おかげで体重計が怖いのです」

「ちがいない！」

大きく笑う私たち。

こんな自分を私は想像していただろうかと心の中で思っていました。

「李 真桜「なんでこんなところに建設したんやろ？」」

インフラの整備にあわないということで、投棄された校舎がある。主に第一が投棄するのだが、第二・第三にも組み入れられない校舎もある。

何で、こんなところにたてたんだと思わせる山の上にある校舎や、崖から半分海に突き出したような校舎とか。

その中の一つの「洞窟校舎」に隊長とうちらは調査にきていた。先日の感冒少女の事があり、投棄校舎の一斉調査をしようと第一

のカリン会長に提案したところ、了承されたからだった。

そんなわけで、うちと隊長の支隊が第二との境界方面、凧と沙和が第一との境界方面に分かれて調査をしていた。

成果はというと、思いの外大漁という和不真面目だけど、かなりの体調不良者や骨折などで動けなくなっている浪人学生を見つけた。その都度合同保健室へ運び込んでいるうちに日が暮れてしまった。そんなわけで調査対象になってる「洞窟校舎」で夜明かししようと思ったんだけど・・・

「なんで、こんなとこにたてたんやあー！ー！ー！」

うちの絶叫に苦笑いの隊長。

「何でつていつても、しかたないかなー」
解ってる。

仕方ないのは十分解ってる。

でもな、校舎に着くまで五度もけつまづいたうちには理解でけん！ー！

工事車両かてはいつとるはずやろ？

重機やてはいつとるはずや！

なんでこんな鍾乳洞状態なんや！！

危ないやんかあ！！

「確かに変だけどねえー」

隊長は手元のカンテラを高くあげて周囲を見回す。

埋めた後も削った後もない、まるで自然の鍾乳洞っぽい。

「ま、あとちよつとで校舎だし、気にしない気にしない。」

隊長の後に付いていったうちらは、目の前の校舎に度肝を抜かれた。

自然の鍾乳洞の中に、違和感バリバリの中型校舎。

中に入ればかすかに乾燥している空気。

つまり、建物の中で結露なんかはおきとらんつつはなしや。

逆にしつけた装備を乾燥できるかもしれんな、とすら思えた。

そんなお気楽なうちに隊長はまじめな顔を向ける。
真剣な視線は、言葉じゃない何かを伝えようとしてるのが解る感じ。

・・・あかん、あかんで、抜け駆けはあかん。

そりゃ、隊長がうちの胸を「ガン」見しとるのはしつとるで？
うちよりチト劣る副長やら桃香はんの胸にも、桔梗先生や紫苑先生の胸にときめいとるのはしつとるで？

せやけど、せやけど、こんなみんなみとるとこじゃあ・・・

「真桜、静かに」

優しくウチの口を手で覆う隊長。

見れば支隊のみんなも口を手で覆ってる。

・・・耳を澄ませば、上の階で物音が。

「告げる。全隊員は休息準備を中止し、対応準備に移れ。北郷支隊は急ぎ校舎内探索、真桜支隊は救援対応。」

「了解や！」「了解！」

桃色の思考が一気に抜けた。

「北郷一刀」「・・・もつと早く助けを呼んでくれれば！！」

「ええな！ 一班二班は即応パッケージ展開、三班は周辺インフラの確認及び報告。三分でやりいな！」

『了解！！』

校舎前に展開する真桜支隊を後目に、僕ら北郷支隊は二回に到着した。

ライトを照らせば、そこには真っ青の顔で転倒している女子が五

人ほどいた。

「大丈夫ですか？ 声は聞こえていますか？」

「聞こえていますか？ 私たちは第三生徒会親衛隊緊急援助班です」

「政体に関わりなく援助が受けられます。助けはいますか？」

定格の声かけに、力なくうなづく女子たち。

「・・・ううあ・・・」

力なく指さす方にはまだ人影があった。

「真桜！ ヒト班まわして！ 総勢一五人だ！」

「了解や、三班インフラ確認中止！ 隊長支援にいきや！」 『了解！』

やってきた真桜支隊三班は、スポーツドリンクを何本も持ってきた。

「よし、救護開始！！」 『了解！！』

ときばきと始まった救護行為をみつ、校舎の外に叫ぶ。

「真桜！ 展開が終わったら、伝令とばしてくれ！！」

「わかつとる！ 救護プランEXやな！！」

「たのむ！！」

何とも優秀な奴は違うな！。

「・・・隊長、お話が・・・。」

北郷支隊第一班班長、縁 のどかが囁く。

「彼女たち大半が第二なんですが、二人ほど元第一がいます。」

「・・・うん？」

彼女が声を潜める理由が解らず、首をひねる僕。

「・・・元第一の二人は、追放された『元生徒会会長』と『元幹部』です。」

どうしますか？ と真剣な目で彼女に、コッソリと拳を立てる。

「要救護者、だよ？」

でした、とばつが悪そうに彼女は苦笑い。

第三生徒会ルート 第六話（後書き）

これより本編の話はシリーズに傾き、加速的な展開を迎えます。
疑問や謎は置き去りに、答えもなしにジェットコースター。
謎や伏線は後回しの展開の先をお楽しみください。

〃
〃 〃 〃 〃

南洋校舎では基本的に、小学4年生以上大学課程までの人間がいます。
小学生から高専レベルまでいると考えるとわかりやすいと思います。

第三生徒会ルート 第七話（前書き）

ちよつと時間が空きましたが、第七話です。

前話で出てきた「南洋ボケ」という単語ですが、これは「南洋校舎」という立地条件から発生する、世間との常識ズレのことを言っているものとご理解ください。

第三生徒会ルート 第七話

第三生徒会ルート

第七話

「……………」

目覚めれば、そこは暖かな布団。
真っ白な天井。

……………

目覚めれば、そこは、どこかも解らない空間。
それでも暖かな空気に溢れる空間。

……………

ゆっくり息をするが、それすらも体に負担だとばかりにせき込む自分。

肺すら出ていくかのような咳を吐き出す体に、暖かな手が添えられた。

耳元で誰かの声が聞こえる。

「大丈夫。もう大丈夫だよ」と。

ちがう、ちがう、僕なんていいんだ、僕なんか関係ない。僕よりも、ゆえを……………！

「もう一人も大丈夫。今はゆっくり寝てるよ」

もう一人、・・・・・・もう一人。

・・・・・・

あそこには僕たちのほかにも何人かいた。

・・・・・・

それなのに、もう、「ひとり」。

・・・・・・

瞬間、私は意識を手放した。

く北郷一刀「・・・・・・ゆっくりでいいんですよ」

今回保護した生徒は、大半は怪我した浪人学生だったけど、栄養状態が悪くて立ち上がることもできない生徒がいたことに驚いた。それも栄養失調の生徒は通常の浪人学生ではなく、第二生徒会所属の生徒のみだった。

体はやせ細り、髪の毛や肌の艶は失い、カタカタと震えている女子ばかりだった。

僕ら親衛隊やねねは、栄養失調状態の学生たちの看護をしていた。

「・・・・これが第二生徒会の事実なのです」

僕の隣で同士ねねがベットに眠る少女に手をさしのべる。
額のタオルを取り替えて、汗を拭いてやった。

「第二の幹部と取り巻き以外で生活はできないのです。」

彼女の語る第二生徒会は、すでに生徒会ではなかった。

物資の占有、仕送りの搾取、授業執行放棄等々。

学力自体は本土から引き寄せた成績優秀生徒が支え、それが出来なくなれば追放されるという。

ふつうの生徒は仕送りと引き替えに少量の食料を分け与えられ、それで一月をしのぐとか。

「……ばかな！　そこまで愚かしいはずあるまい！！」

背後で声を上げる祭先生を見て、ねねは苦笑い。

「祭先生が第二にいらした頃は、ここまでひどくはなかったでしょう。ですが、手綱を引くものがない今、どうなっているかはご理解できますよね？」

「

「……！！」

沈痛な思いで押し黙る祭先生。

その姿がすべてを物語っているかのようにだった。

「角田　詠「……よかった。」

第三生徒会に保護されたと知ったのは、気がついてから三日後だ

った。

お人好し生徒会と有名な第三だが、その勢力範囲は狭く力も弱い。第二や第一から強権をふるわれれば屈するしかないだろう。だから、と僕は体を起こした。

「治療には感謝するわ。……でもこれ以上迷惑はかけられないから……。」

ベットを離れようとした僕を押さえたのは、現第三生徒会会長、劉蜀桃香会長だった。

「……安心して。それでも今期に入って色々と力を付けてるんだから」

彼女曰く、僕たちが保護されたのも今期の影響力上昇にあわせて広がった支配地域の巡回が行われたからで、僕が知ってる島の支配地域分けとは違っ

ていた。

「君たちのことも、どうにかできるとおもいますよ？」

桃香会長の隣に立つ少年がにっこりとほえむ。

「第三生徒会 親衛隊隊長 北郷一刀です。」

そういえば、噂で聞いた。男子がこの島にきていると。

「ほとんど一刀君のおかげだけど、結構第一に貸しがあるのだ。だから安心して。」

なんで、その貸しを僕らのために？

「……」

言葉に詰まった二人はお互いをみた後、笑顔で答えた。

「人助けには理由はいらないと思うよ？」

「助け合う気持ちに理由はいらないんですよ？」

やっぱり、おひとよし、だ。

「曹魏カリン「あーあー、わかってるわよ、わかってるってば！！」

やっぱり第三ってやつかいだわ。

面会にきた北郷一刀が持ってきた案件は、面倒この上もない事柄ばかりだった。

第二生徒会隣接区域に流失している栄養失調状態の第二生徒会所属生徒、非道ともいえる第二の配給制度、そして最も面倒なのは、「元生徒会長」だ

った。

第一生徒会の元生徒会長は、私たちの手によって追放された。

それは彼女が選んだ幹部によって圧政が引かれたため、生活困窮者が続出したからだ。

私がその事実と生徒代表として解任請求をして、実行者は退学、利用されただけの前生徒会長は追放にとどめた。

少なくとも自分のことを自分で処分できるようにと。

しかし彼女の熱心な信者が彼女自身が自らを処分する事を許さず、その身を隠させた。

そして、この事態、だ。

すでに彼女の配下であった元第一に幹部は全員本土に戻されていたし、政治的な力は完全になくなっていたはずなのに。

「彼女をしたって第二から逃げ出した生徒が集っていたんですよ」

北郷一刀が持ってきた今回の報告と救援された第二の生徒の調書からも、彼の意見が正しいことがわかる。

なんともやつかしい人間だ。

彼女自身は何もせずとも彼女の周りに人が集まってしまうのだ。さらに、彼女に関わると、どうしても手を出したくなる。

本当にやつかしいだ。

調書から視線をあげると、そこには第三生徒会の象徴ともいえる笑顔を浮かべた少年がいる。

「あー、もー、わかったわよ、わかってるわよ！」

くそー、やつかしい奴らに借りを作つたものよねえ。

少なくとも二件は吞まなくちゃならないんだもの。

「薰 ゆえ……へう。」

ちょっと前まで、詠ちゃんとみんなと一緒に不思議な校舎で暮らしていました。

洞窟の中にある校舎なのに、いつでも校舎内が乾燥していて、ご飯を貯蔵しても腐りにくい変なところ。

でも、そんなところだから私たちは隠れていることが出来た。

私と詠ちゃんは第一から。

あの子たちは第二から。

彼女たちからきいた第二の実状はそれは恐ろしいもので、圧政と言われた当時の第一よりも酷いものだった。

だから、私はあの子たちを保護したいと思った。

何の力もない私だけど、それでも守りたいと思った。

でもそれは間違いだったのかもしれないとも感じていた。

食料を調達できるわけでもないし、お世話が出来るわけでもない私の下で、彼女たちは徐々に衰えていった。

意識を失ってからどれだけの時間がたったのだろうか？

気づいたときには暖かなベットの上だった。

にこやかな女性が甲斐甲斐しく世話をしてくれて、代わる代わる色々な女のヒトが世話をしてくれた。

気がついて翌日には声が出るようになったのできいてみると、なんと第三生徒会に保護されたということを教えられた。

それは不味い、と身を起こしたが、彼女たち曰く

「大丈夫、何とかするから」

私はその笑顔を信じることにした。

さらに数日後、男子に介助されながら、ふらふらと歩く詠ちゃんが私のベットの横に立って説明してくれた。

信じられないことに、今の第三生徒会は、第一生徒会に対して結構無茶な取引を持ちかけることだ出来る程に立場が変わったという。そのおかげで、私たち自身が第一でも第三でも好きな生徒会に庇護を求められるように手を打ってくれたのだという。

あの曹魏カリンさんに、どんな貸しを作れば無理が利くのだから、想像も出来なかった。

さすがに第二との交流はないので、難民化している第二の生徒を勝手に引き受けるわけにはいかないけれど、彼女たちの仮住居として校舎を解放する

ようにしてくれている。

私が出来なかったこと、私がしたかったことをしてくれる人たちがいる。

私が守りたかった、私が何とかしたかったことをしてくれる人がいる。

嬉しくて嬉しくて。

私は詠ちゃんにほえんだ。

「・・・第三でいい？」

すると詠ちゃんは支えてくれる男子をちょっとだけみてから、私に視線を戻した。

「ゆえがいいなら、僕はいいよ」

久しぶりに私たちは笑った。

心の底から笑った。

「北郷一刀」・・・女子って強いなあ」

角田詠さんと薫ゆえさんが第三生徒会に参加した。

ゆえさんは主計へ、詠さんは今までなかった役職に就いた。

第三生徒会所属 主計連絡班

部活設立のための資本確保や資材確保のための連絡を一手に引き受ける役職として、第一から設立を打診されていたのだ。

第一の内部事情にも詳しい詠さんは、すごく適役で、そのことをカリン会長に言つと……。

「本当に油断ならないわね、あんたたちって」

とすごく感心してくれた。

・・・桃香さんは誉めてくれたといっているので、誉められたことにする。

最初は嫌がった詠さんだったが、ゆえさんが説得して就任してもらった。

そんなわけで、本日は第一と第三の幹部が集まったので、合同就任祝賀会を開催することになった。

第三からの主計連絡班人員は詠さんだけど、第一からも主計連絡班人員が来ることになって、それが彼女だった。

「兄様、お久しぶりです。」

彼女、悪来ルルさんは、にこやかな笑みで第三の幹部と顔合わせをしている。

「おお、そなたが悪来殿ですか。」「ああ、あなたが音宮さんですね！！」

おお、と盛り上がる二人は、この島で数少ない料理スキルの高い少女たちのため、盛り上がる相手がいなかったらしく、すごく楽しそうな交流をして

いた。

が、うってかわって第一側の幹部は、盛り上がりにかけていた。まあ確かに、角田さんや薫さんが直接圧政を引いていたわけじゃないけど、管理監督責任を問われていた人間が、元の組織との窓口になると言うのだ

から・・・

「・・・よかったな。」「・・・はい」

「・・・薫も無事か?」「・・・はい」

「・・・本当に無事でよかったなあ・・・。」「うん」

盛り上がりの方向は違ったけど、暖かな空気を感じることは出来た。

良かった良かったと思っているところで、隣にカリン会長登場。

「本当にやられたわ」

「何が、ですか?」

きつと睨む姿は怖いはずなのに、なんとなくかわいく感じる。

「わかってるわよ、偶然で善意だったことは」

でも、彼女の、曹魏カリンの計画が悉く覆っていると感じているという。

初め、カリン会長は、第三との合同主計設立を悪来ルルと僕に任せるともりだったという。

何で僕かな、とは思ったけれど、部活の企画をぶちあげた責任もあるんで、そのへんだと納得することにした。

で、その活動を元にして、僕の存在の共有化をねらっていたらしい。

共有化って意味があるのかな、と思ったけれど、彼女の語るに任せようを耳を傾けることにした。

グチで始まった彼女の学園構想は、心打たれるものだった。そしてそれは第三のあり方と矛盾するものではなく、お互いに引き立てあうであろうもの

だった。

僕は確信する。

僕らの計画は成功する、と。

僕らの思いは必ず形になる、と。

「布宮恋」・・・」

ねねは変わった。

前から弾けるほど元気で可愛い娘だったけど、第三にきてからは更に元気になり、よく笑うようになった。

「恋さま、恋さま。これもおいしいですよ？」

ただ、変わらず私の世話を焼こうとするのが嬉しいやら恥ずかしいやら。

「ねね。あなたも楽しむ」

「もちろん楽しんでおりますぞ。」

にこやかな笑みのねねの顔が、更に輝く。

「・・・一刀殿！」

一人の少女を伴って現れたのは第三生徒会幹部のひとり北郷一刀。役職は親衛隊隊長となっているけど、実際は桃香会長直属の何でも屋だった。

私もねねも彼に救われ、そして元第一の角田・薫両名も救われたといえる。

「同士ねね。紹介しましょう、彼女こそ・・・」

「悪来ルルです。」

「・・・おお、あなたが！」

きやつきやと共通の話題に盛り上がるねねと少女。

いつもは背伸びしているねねも、共通の話題と近い年齢のおかげか、少し幼く感じた。

少しその場にいた北郷一刀だったが、第一生徒会会長に連れ出され、愚痴を聞かされていた。

グチの内容に細かく相づちを打ったり、内容を修正したり、相手の話を受け入れたりと多彩な会話で、少々機嫌の悪そうだった曹巍カリン会長も、次

第ににこやかになる。

そう、あの少年、北郷一刀に関わると、こんなふうに笑顔が生まれる。

仕事をしていても、巡回をしていても、食事を作っている。

「おや、布宮さん。誰かさんをご執心かな？」

ふらりと現れた子雲　星に一度視線を合わせ、再び視線を戻す。

「・・・興味深い」

「確かに、興味深い少年ですな」

にこやかには笑みを浮かべているであろう星は、私の肩を抱く。

「競争率は高いようですね？」

「・・・競争いつなんて関係ない。私は私の思いに正直であろうと思っただけ。」

「・・・ほほお、それはすばらしい見解ですな」

「そうだよな、うん。私も正直になろう」と

「・・・そうですね。私も素直さを大切にしましょう」

「お兄ちゃんには、素直に当たるのが一番なのだ」

「んー、あたしは一番じゃなくていいから、構ってくれると嬉しいかなー」

「・・・あたしは、あたしの前でだけまっすぐに見ててくれれば・・・」

気づけば第三の幹部が固まって、カリン会長と北郷一刀を見ていた。

さらには、二人をはさんで第一の幹部が二人を見ている。

何を会話しているか解らないけど、ちっこい会計がいきり立っているのも不安な風があるかもしれない。

いつの間にか、こんな人間関係に関わっている。

それだけで嬉しく思う私だった。

視界の端で、ねねとルルが楽しそうに会話している。
それを見たままに、私は頬をゆるめた。

「布宮さん、たのしんです?」

先ほどまで曹魏カリンお相手をしていた北郷一刀が私の隣に現れた。

「・・・恋でいい」

「えっと、恋さん?」

「・・・恋でいい」

彼には恋と呼んでほしかった。

私のそんな思いに答えるように、彼はほほえむ。

「じゃ、恋。楽しんです?」

「・・・うん」

私は今まで感じたことのない幸福感を感じていた。

人がある、仲間がある、友達がある。

会話が出来る、思いがつながる、見据える先を語り合える。

そんな幸福を今まで味わったことがなかったから。

ねねをみて、そして私は感じていることを語った。

ねねが楽しそうなこと、笑顔でいっぱいなこと、そして毎日笑顔のねねを見ていると私も嬉しいこと。

彼も語った。

毎日が楽しいこと、大変なことが一杯だけと嬉しいことも一杯なこと、毎日知り合う人たちが大好きなこと。

でも、と顔をゆがませる。

「・・・難民?」「ええ」

第一と第三にとって、今一番の問題は第二生徒会所属の生徒が難民化している事だった。

親衛隊が中心になって行われた浪人学生救済巡回で解ったことだけれども、身動きもできないほど衰弱している生徒がいたし、怪我で動けない生徒が

いた。

私自身も浪人学生だったので解るけど、浪人学生は何より健康でなければ生きてゆけない。

病気になっても怪我をしても誰も助けてくれないからだ。

不潔でも身だしなみがダメでも食料を分けてもらえなくなる。

第三が復興してから差別はなくなっただけ、以前は少しでも相手が気に入らないと配給が滞っていた。

そう感じていた。

もちろん、実際の理由は別で、第三の気分次第で配給されていたわけではなく、懐具合で配給されていたことは、所属してから解ったことだった。

ともあれ、当時、唯一助けてくれる第三も、すべてを助けることが出来ない。

だから自分のことを守れるように健康でなければならなかったのだ。

しかし、このほどの巡回で判明した事実として、負傷者や栄養不足者の数は異常だった。

まるで紛争地帯の難民のような姿に、みんな心を痛めていた。

そして現場に一番立ち会った彼、北郷一刀も。

「……一刀、私たちは何をすればいい？」

「解りません。でもこのままにもしません。」

親衛隊長なんて立場にいても、身に余る決意かもしれない。でも、私はそれを支えようと感じた。

その思いは密やかで、それでいて暖かった。

）

今までの南洋校舎のあり方からみれば急速に変わり行く情勢。

人々が集まり意識し、そして高めあう動きは、まるで天を焦がす炎上の様。

熱く熱く、高く高く。

しかしそれは急激ではあったが遅かったのかもしれない。

それが始まる前に芽吹いていたことがあったから。

それが十分な力となる前に、事は始まっていたのだから。

第三生徒会ルート 第七話（後書き）

少々執筆のペースが落ちていますが、当初予定の週二話は維持したいと思っていますのでよろしくお願いします。

第三生徒会ルート 拠点フェイズ2（前書き）

じりじりと上がるシリアス成分を中和しようと、さくつと拠点フェイズを入れてみました。

当然、出てくる人たちは変な人ばかりですよーw

第三生徒会ルート 拠点フェイズ2

第三生徒会ルート

拠点フェイズ2

「雲閑 愛紗「・・・その、なんだ、触れ合う時間って大切だと思
うぞ？」

学習状況の改善と習得率の上昇は目を見張るもので、予習復習補
習に当てていた時間が格段に減った。

こんな時間があるとバカな余暇に走る人間が増えようものなのだ
が、その急先鋒たちは時間を惜しむかのように巡回に出てはトラブ
ルを治めてきていた。

・・・北郷と。

始まりは鈴々が「デート」占有禁止を謳って強引に巡回に出たこ
となのだが、同調するように馬場姉妹や桃香会長が引っ張り出し始
めた。

もちろん、各員によるフォローがあるので混乱は最小限だが、其
れなりに不満が積もってきている。

曰く、会計二人組み。

内政が多い二人にとって、親衛隊というからには会長直参のはず
なのに、何で外ばかり！ と言っているが、実際にはかまって欲し
いという思慕の情が渦巻いている。

曰く、親衛隊隊員。

既に船からの飯ストである三人と北郷が一緒にいられる時間が少

ない、と考えているようだ。

曰く、副長。

・・・そう、私。

雲関愛紗も大いに不満だ。

勉強にも家事にも才を見せる北郷だが、腕っ節がからつきであることが大いに不満だった。

せめて武術の一つでも収めてもらえないと、こちらの都合にも・

ゲフン、ゲフン。

それはさておき、腕っ節を人並みにするよう桃香会長に進言したところ、大いに乗る気の許可が出た。

「親衛隊長自らかあ、いいなーいいなーいいかもなー。」

ちよつと夢見がちな感じだったけど、会計からも許可が出たので、週三ぐらいの訓練を入れることにした。

く干田 沙和「・・・隊長つてば、不憫なの」

武術訓練というものが始まりました。

一応、私や真桜ちゃん風ちゃんらは武術の心得があるんだけど、隊長はからつきしということで副長自ら指導することになったんです。

初めは空手。

続いて合気。

さらに剣道。

日に日に隊長がやつれていくのがわかります。

教えている内容は正しいですし、隊長も良く食らい付いているとは思いますが、如何せん相手が悪い。

あの爆乳で背後から姿勢を正したり剣の持ち方を直したりするのですから。

そのたびに隊長は赤くなったり青くなったりで、なかなか集中できないようです。

一応、技術は其れなりに向上しているものだから性質が悪く、副長も指導の仕方を精査すれば、もっと伸びると確認している様子。が、伸びるのは直接指導型ボディースキンシップ時間のみという恐ろしい結果。

天然の副長は何故隊長が困っているか理解していないらしく、「まじめにやるのだ」とか「力を抜け」とかいつて何度も抱きしめていた。

そのたびに「ぎゅっ」と大きな胸が押しつぶされ、比例するように隊長が赤くなった。

「なあ、あれ、天然なんかなあ？」

「気付いててやれるほど、副長も擦れていまい。」

というか天然すぎ。

あれじゃあ隊長ももたないんじゃないかなあ？

「子雲 星「・・・見蕩れてしまった。不覚。」

本来ならばどうってことない素振りのはずだった。

木刀を構え、流れるように打ち込む素振り。

相手を想定していない、ただただ練習の為だけの練習。

しかしそれを私は美しいと感じてしまった。

日中、愛紗に弄られまくっていた姿を肴にからかいに行こうと思

い立ったが、自室に一刀の姿は無かった。フロカトイレかとうろついている所で、裏庭から音が聞こえた。

真つ暗な裏庭に彼はいた。

それはただ、正眼から振り上げ、そして振り下ろすだけの動作だったが、真剣を持たせれば必ず「切れる」動作だということが判るほどだった。

真摯に、ただ真摯に打ち込むだけの姿が、これほどまでに美しいとは思ひもなかった。

まるで美術彫刻品でも見ているかのような気持ちにさせられたところで、その時間は終わる。

「・・・あ、星さん。こんばんわ」

にこやかに微笑む顔には、先ほどの気配は無い。
家事が得意な少年の顔だ。

「一刀、君は本当に武術に覚えは無いのか？」

私の問いにゆっくりと頷く。

そんな仕草にすら美しさが秘められているかのように思えてならない。

（駄目だな、今日は冷静ではないようだ。）

邪魔をしたことをわびつつ私は部屋に戻った。

胸の内が熱すぎてよく眠れなかったのだが、それが私だけではないと知るのはしばらく後のことだった。

「朱里「かつこうよかったね？」」雛里「・・・かつこうよかったよねえ。」

かわいいエプロンをつけて朝食を準備する姿と昨日の鍛錬をしている姿は重ならなかった。

というか、今日の前の一刀さんはかわいいんだけど、昨日を思い出すと「かつこよく」見えてしまうのが不思議です。

思わず、ぽーっと見ていると隣の雛里ちゃんが囁く。

「朱里ちゃん、昨日はつつこうよかったねえ・・・。」

「うん、かつこうよかった」

強そうだとか、そういうのではなく、きれいで美しかったのだ。

そんな風に思っているのは私たちばかりではなく、見渡す限りみんな同じようだった。

ぽーっと見ていないのは鈴鈴ちゃんぐらいなもので、軽いノリの蒲公英ちゃんですら、頬を赤らめてる。

「・・・さーとと、できましたよー」

ゆったりと配膳する姿にしばらく見とれていた私たちだったけど、はたと気づいて手伝う。

「みなさん、今日はどうしましたか？」

ぶんぶんと首を横に振るのは私ばかりではないはずだ。

「北郷一刀「・・・なんだか視線が熱いな？」」

朝食からこっち、なんだか周囲からの視線が痛い。

なにか問題でもあるのかな、ということでは朱里ちゃんや雛里ちゃんに聞いてみたけど、

「い、いいえ、何も、何も問題ありませんっ（がぶ）」「・・・（ふるふるふるふるふる）」

全力に否定。

なんとも、逆に疑わしい。

周辺から証言をとってみたけど、全く効果が上がらない。

解ったことは、みんな顔を赤くしているって事。

集団で風邪でも引いたのかな？

そう思って祭先生に聞いてみると、深い深いため息をつかれてしまった。

「おぬし、鈍いと言われんか？」

ああ、確かに言われていたことがありますね。

この学園にはいる前、男子生徒は鈍くなると言う呪いがかかっているという噂の学校に通ってましたし。

でも、でもそれと現状とどんな関係が？

「わからんなら、そのまま放置するんじゃない」

肩をすくめて去る祭先生。

役に立たないなあ、と失礼なことを考えてしまったことは秘密。

「楽進 凧「隊長は、その、なんというか・・・」

親衛隊や総務人員増員に当たり、訓練をすることになった。

指示や点呼が十分に伝わらないと、急場に対応できないからだ。

もちろん、今までも十分に対応できていたけど、この所の異常対応の多さは訓練し直すに十分なものといえた。

「風支隊、そのまま前へ！」

「沙和支隊、後退なの！！」

「真桜支隊、右や！」

一系乱れぬ部隊運用が行われている背景には、北郷隊長の支隊が対戦相手として向かい合っているからだろう。

最近、部隊支持や判断力を上げた隊長は、模擬戦を提案した。

自分の部隊運用と私たちの部隊運用ですり合わせをしようと言うのだ。

確かに私たちの部隊運用は隊長に劣る。

しかし、一対三で負けるほどの力量差はないはずだった。

「いけるぞ、そのまま押しつぶせ！」『了解』

「困いこむんや！」『了解』

「ブレたところを打ち崩すの！！」『了解！！』

各個に防戦する北郷支隊が崩れた、と思ったそのとき、割れた北郷支隊の奥から新しい人員が割ってでてきた。

「義によつて助太刀するのだ！」

「・・・助っ人」

「ふふふ、出番きたる」

鈴鈴、恋、星、と総務部隊。

三人が正面に当たり、左右に分かれた北郷支隊が真桜と沙和の部隊に向かった。

啞然とした私たちの部隊は即時に負け、勝負はついた。

「・・・でも、ずるい」

く子雲 星「勝と思うな、思えば負けよ」

親衛隊の部隊演習に私たちを混ぜるのはどうかと思ったが、思いの外おもしろかったのでよかったという事にした。

もちろん、親衛隊の各支隊は不満一杯だったが、これからの情勢を考えれば、見えない敵の一つや二つを楽々相手に出来るほどでなければ、危うい状況が大いに違う。

そんな意味では今回の敗北は糧になるだろう。

そう、そうそれは……

「はむはむはむはむ」

「うまうまうまうま」

「がつがつがつ」

この旨いカレーを食してる今、もう、なんだか、関係ない。

音宮ねねと北郷一刀による演習ご苦労様カレーは、部隊の談笑時間奪った。

にこやかな笑みも総評も評価もすべて奪い、ただひたすらにお代わりする機械を、機械集団を作り上げた。

「ふっふっふ、これならばいけますぞ、同士一刀」

「いけますねーいけますねー、同士ねね」

不気味に笑う二人を解つていながら誰もつつこみを入れられなかった。

くそー、何でカレーなんかこんなに旨いんだ！

すでに勝負は決していた。

親衛隊及び総務は、このカレーのために命を懸けることになる。
もう、これは決定事項だった。

「雲関愛紗」・・・これほどとは・・・」

私からの手ほどの結果を見せたいという事で、親衛隊の部隊運用の模擬戦を見に来てほしい、と一刀から請われた。

正直、一刀個人の武芸には伸び悩みを感じていた私だったが、夜半に一人で練武している姿は見所がある以上のものがあつたので、その話に乗ることにした。

そして行われた演習は、まるで個々の支隊が支隊長の体の一部かのように運用され、また、その支隊ごとの競り合いは、まるでつばぜり合いのような緊迫感があつた。

最後は絡めてで北郷支隊が劣勢を跳ね返すというオチがついたが、それでもあれだけの中隊規模を自分の支隊の陰に隠して悟らせない様は見事だった。

まさに実践に則した武術の体現といえる。

演習で一体感をまとめあげ、さらには昼食でさらに胃袋をつかむとは、心底感心させられた。

・・・とはいえ、この匂いはたまらない・・・。

星、私にも・・・

「あー愛紗ちゃんずるいー」「私たちにも、くだしいー」「・・・わたしにも、わたしにもー」「・・・あ、あのお、わたしもいいですかあ？」「・・・僕も」

まるで雪崩るように押し寄せる事務方。
ま、まけてらえるか！

「北郷一刀」……ふふふ」

南洋校舎カレー同盟ここにあり。

分校にいた頃からだけど、あの土地の人間はカレーが好きで好きで、一家庭一カレーというぐらいに「極めて」いた。

もちろん僕もそれなりに研究していて、一部勢力を作っていた。疲れていれば疲れているほど旨く感じるという「体育会系カレー」の同盟で、濃い味や塩気の高い味が特色の同盟だったけど、僕はそこに別種のウマミをつぎ込むことにより同盟の小霸王と呼ばれていた。

このレシピ自体は秘匿していて、誰にもあかしたこともなかったんだけど、ルルとねねには速攻でばれた。

そんなわけで、南洋校舎カレー同盟がその場に生まれ、事あるごとに布教しているわけだ。

愛紗さんも、まさかカレー布教のために演習をしたとは思えない。

「……同士一刀。第三はすでに落ちましたな？」

「……ええ。第一は同士ルルの手によって大半が落ちていると言います」

すでに季衣、春蘭、霞の体育会系は落ちており、本格的に落ちていないのはカリン会長だけだとか。

「しかし、カリン会長は難しいですよ？」

「……確かに」

きけばカリン会長は辛いものが苦手だとか。

「最悪、唐辛子を抜きますか・・・。」

「同土北郷、それは古代インド系の？」

「ええ。唐辛子が伝わる前の、です」

「さすがですな、同土一刀。」

ともに目指すものが同じならば、過程は気にしない気にしない・・・。

『ふっふっふっふっふっふ』

我らのカレーによる南洋校舎統一は目の前と心躍っていた。

第三生徒会ルート 拠点フェイズ2（後書き）

ちよつとキャラクターが崩壊気味ですが、日常はこんなものかと。

とはいえ、本編のほうも間違いなく日常なので、そちらも展開します。

それは急激に。

第三生徒会ルート 第八話

第三生徒会ルート

第八話

「北郷一刀」……まるで、それは……」

それは一つの契機だった。

第三の領内を僕たちが巡回して、浪人学生や第二の生徒を保護したという噂が広まったのか、なだれるように要救助者が殺到した。

我先にはなく、仲間と連れだって救助を求めてきたのが何だかうれしかった。

「隊長。彼女らの話では、孤立して動けなくなっている生徒がかなり居るとのことです。」

風の報告にうなずいた僕は、夕食の席で提案をした。

総務・親衛隊合同のローラー作戦の実施を。

「すでに、衣食に困りつつも浪人にもなれない学生が第三領内に相当数いる状態です。どこの所属でもかまいませんが、彼女たちの生死ばかりか、南洋後者全体の問題にもなりかねません。」

自治を持っているという建前はあるけれど、それもこれも大事故や死亡事故がないからこそ得られている権利といえる。

この自治を失いかねないほどの問題が目の前にあつては、所属がどのと言ってられるはずもない。

「・・・わかりました。」

桃香さんは、一度箸でつかんだメンチカツをおろして立ち上がる。

「第三生徒会予算で実施することを許可します。」

「・・・連合保健室もバックアップすることを約束しよう」

祭先生の言葉を聞いて、周囲がうなづく。

「では、明朝一番に作戦を開始します。」

につこりほえむ桃香さんだったが、この時点でまさかの結果については思い至っていなかった。

そう、誰もが此処まで酷いものとはわかっていなかったのだ。

「葛城朱里」・・・事は南洋校舎存続に関わります。」

親衛隊や総務部隊総動員で行われた救援プロジェクトの結果は散々でした。

結果が「出なくて」、ではなくて結果が「出すぎて」。

島外退避勧告者4名。

長期入院必要者12名。

緊急入院必要者22名。

外傷等での歩行困難者6名。

その他保護必要者30名。

といった内訳でした。

全部そのままに報告すれば、南国校舎が閉鎖されるというレベルの問題です。

事態を重くみた祭先生は、急遽第二生徒会本部へ真偽を確かめに向かいましたが、その後の連絡がないまま三日が過ぎました。

「少なくとも、もう時間をかけられません」

桃香会長は正面に座るカリン会長と共に決断を下そうとしています。

本来ありえない事故や天災などの際に発動される強権を実施しようとしていたのです。

「方法は二種類よ。自分たちで事を納めるか、ギブアップか、ね」

事態収集に自分たちの力だけで対応できるかどうかは不安ですが、『ギブアップ』だけはありえません。

南国校舎全ての自治権を手放し、全南国校舎生徒を本土に帰投させるという最悪の判断「ギブアップ」は、私たちにはできません。

「もう、カリン会長。実質一つじゃないですか」

「・・・、もちろんそうよ。」

私たちもその意志は固い。

なにを目的にして南国校舎に来ているかは、それこそ人それぞれだけど、誰にも譲れない目的がなければ、わざわざこんな所までこないのだから。

「じゃあ、発動するわよ」

「はい、発動しましょう」

『連合生徒会憲章に基づき……』

「第一生徒会会長曹巍カリンが、」

「第三生徒会会長劉燭桃香とともに……」

『緊急災害救助適合事項を発動します。』

各書記が現在の時間及び場所を記載した書類を作成する。

写しをその場で作り、お互いに交換した。

双方の生徒会長は書面を確認してサインをする。

「では、この災害を全て叩き伏せるわ。」

「ええ、この災害から全てを守り通します。」

南洋校舎始まって以来、初めての緊急災害救助適合事項の発動が行われた瞬間でした。

「では、合同会計本部及び主計事務所の開設を行います」

私の声に各生徒会が動き始める。

「第一の予備予算規模は……」「第三の補給物資は……」「緊急収集できる水源を……」

さすがに幹部、話の通りが早く、即座に骨子ができあがる。

「一刀さん、緊急対応体制のために、部隊再編をお願いします」
「わかりました。」

私の言葉を受けて、第一生徒会の面々に向かう一刀さん。

「第三親衛隊が一番規模が大きいので、コアに据えて、指揮者を第一の方々にお願いしようと思います」

「わかった、北郷。我々の総務補助も含めて再編するがいいか？」

「問題ありません。・・・うちの隊員は結構無茶な指示でもいけますんで、よろしくです」

各員、お互いの持ち場の集まりを作り、喧々囂々と打ち合わせを始める。

「朱里ちゃん、あと十分後に会議だよ。」

「わかったよ、雛里ちゃん」

私たちの仲間を守るため、同じ島で暮らす仲間を守るため、私たちは動き始めた。

「桃香」・・・「ごほうび」

第二生徒会の領内にはいると攻撃があるので、前衛部隊は盾を標準に装備していた。

時間を優先に攻め込む私たちは、自らの被害を無視して走り抜けた。

矢をかけられるもの、襲いかかってくるもの、様々な妨害を叩き伏せながら私たちは進む。

「第二生徒会所属のみなさん！ 我々は第一および第三の連合救援隊です！！ 生活や食料を盾にされて従っている方々は、後方の炊き出し部隊に向かつてください！ 仲間の病気や不調を盾にされている人も後方で支援します！！」

朱里ちゃんの叫びを聞いて、攻撃をやめる生徒が多数いた。しかし、全てがやむわけではない。

「北郷、でるぞー！！」

「りようかいですー！！」

夏姉妹の姉、夏峰春蘭と共に、一刀君がぐんと速度を上げる。

「北郷隊及び前衛部隊、突入！」

密林をかき分けるように走り出す。

「武装解除したみなさんは、わき目もふらず後方へ！ 仲間の救出を求める方は、この本隊にきてくださいー！！」

いつもはカミカミの雛里ちゃんも大きな声を上げる。

「親衛隊真桜支隊、御旗はまもるで・・・。」

「隊長がいない今、我らこそが守りの要」

「・・・ちゃんと仕事して、あのご褒美カレーをもらうの」

『・・・ご褒美カレー』

はいはい、わたしもちよっとトリップしちゃったけど、ちゃんと

しましうね。

「・・・ねえ、桃香。そのご褒美カレーってなによ？」

「ああ、カリンさん。ご褒美カレーって、この前の演習で振る舞われた一刀君特製カレーのことですよ」

瞬間、眉を寄せるカリン会長。

何か懸念があるのかな？

「馬場翠「・・・な、なにが起こってるんだ!？」」

それは見たこともないような人々の連携だった。

別々の目標を持っていたかのような人々が、この混乱の集結と南洋校舎救済のために全力を出したのだ。

あるものは知恵を、あるものは勇気を、あるものは武術を駆使して全てを救わんと。

これだけの力の奔流があれば、何だってできる。

これだけの協力があれば何だってできる。

これだけの仲間が入れば、何だってできる。

できる、できる、できる!!!

「お姉さま、すごいね、これ!!!」

「ああ、これが仲間だ!」

駆け抜ける、かけぬける、かけぬける!!!

「抜けるぞ!!!」

誰かが叫んだ瞬間、林を抜け、そこにでた。

第二生徒会本部校舎。

別名「赤壁」

朱色に塗られた校舎を背に数人の人間が立っていた。

その中心には、第二生徒会会長

「……孫呉雪蓮」

ぎりりと誰かの歯ぎしりが響く。

「第二生徒会幹部、および会長に告ぐ。このほどの調査で発覚した仕送り横領、不正配分、生徒管理放棄は会長職及び幹部職放棄と見なす！」

叫ぶカリン会長の隣に桃香会長。

「……第一及び第三生徒会は、合議の上、第二生徒会執行権の停止及び凍結を決定しました。」

連盟の書類を突き出す二人を前にして、頬をゆがめる孫呉会長。

「あーら、ずいぶん言いぐさじゃない？」

彼女はいう。

第二の非道は今更の話。

わざわざ今頃何で騒ぎ立てるのか、と。

第一も第三も知っていながら手をこまねいていただろうに、と

「さすがに死者を出されてはたまらんだよ」
「せやな、しゃれきかんわ」

秋蘭、霧の両名が弓と長刀を構える。
しかしその言葉を聞いた瞬間、孫呉会長は笑う。

「はははははは、なんというばかかしさ、何という愚かしさか。死者を出せない？　しゃれがきかない？　何をバカなことをいうのかしら？」

爛々と光る瞳をたたえた彼女は、ニヤリと笑う。

「名声を盾に、補給を餌に、目標という幻想で馬車馬のように庶人を騙している偽善者どもめ！！」

狂気の瞳と赤い口からほとばしる熱い熱い言葉は、誰の胸にも届かなかった。

耳には届いていたが、その意味が分からず、誰しも困惑とある種の気味悪さを感じていた。

そう、どうしても理解できないもの、どうしても交われないもの、そんな存在だと感じてしまったのだ。

「生ぬるい日々などもういらないのだ！　戦いとは名ばかりの呪われた日々などもうゴメンだ！！」

政治的にも民意を競う意味でも、この南洋校舎は戦略的で戦術的で、呪われたなどといえるはずもなかった。

「私たちは帰るのだ、私たちは戻るのだ、あの日々にあの懐かしい大地に、あの・・・！！」

瞬間、全てが光に飲まれた。

視力が戻る頃には全てが消えていた。

第二生徒会盆部も、幹部も。

そこにはただ、空き地が残るばかりだった。

「雲関愛紗」・・・完全な敗北だ」

一週間にわたる徹底調査でも、第二生徒会本部と幹部の行方は判明しなかった。

敷地はごっそりと削れた後、別の土石で補完されたように入れ替わっており、まるまる入れ替わったかのような印象を受けるとの報告もある。

第二生徒会所属学生の大半は保護できたが、幹部以外の学生の中でも行方がしれない学生も多い。

「それは幹部の身内ですね」

音宮ねねは、私と共に書類処理をしながらいう。
彼女は以前、第二の成績維持人員として招かれていたため、一部の内情には詳しい。

だが、彼女の心の傷に関わる部分なので触れられないでいた。

「幹部と幹部の身内以外、成績維持人員ですらまともな生活は出来ていなかったのです。」

さすがにここまで事態はひどくなかったらしいのだが、音宮が第二に居たところも同様の扱いだったとか。

ただ、幹部がどのように生活していたかは解らないという。

「祭先生の行方もしれないしな」

そう、第二の在り方すら知らなかったという祭先生も行方がしれない。

少なくとも彼女の心の在り方は、こちら側にあつたはずなのに。

「我らは団結しました。我らは当初の目標の救済をしました。．．．
それなのに．．．」

音宮は、ねねは呟くようにいう。

この敗北感はなんなんでしょう？

「わからん。ただ、私も感じている」

完全なる敗北だ、と。

く子雲 星「忙しい、それだけが唯一の救いか？」

予期されていた本土からの介入はない連絡が来て、一応の安息を得た。

しかし、残された第二生徒会所属生徒が一気に浪人化しないように仮に生徒会を立てなければならぬ。

もちろん余剰人員などないからといって避けられるわけではない。
では、となると人数に勝る第三幹部を数人、第一から監査人員を
何人が出さざるえない状況といえた。

「そういうわけだ、あきらめろ。」

その言葉に、泣きそうな顔で答える北郷一刀。

「でもですよー？ 僕ってば、これでも、入学したてで」

「泣き口上はいらない。お前がやらなければ、「ゆえ」が担ぎ出され、かなりまずい状況になるぞ?」
「うっ、ぐう……」

どのようにマズくなるかだなんて、わざわざ説明することはないだろう。

少なくとも一刀にはすぐに解ったはずだから。

「ひどいなー、そんなことを言われて断れるはずないのに」
「だから言っただよ。」

ふふんと笑う私を恨めしそうににらむ北郷一刀。

そう、彼こそ第二生徒会、暫定生徒会長として承認されたのだ。彼が立つとなれば、第三からも第一からもかなりの人数がストレスなしで集まるだろう。

集まりすぎるので整理せねばならないぐらいのはずだ。

「じゃあ、お願いしますよ、副長」
「了解だ、会長」

暫定第二生徒会の第一人員、会長北郷一刀。
そして第二人員、子雲 星。
まずは本部棟の選定からだな。

「曹魏カリン「あんにやろめ、好き勝手に始めやがったわね。」

私はその報告を受けて頭痛を覚えた。
なにしろ第三及び第一の支配、いいえ、影響学区の近くの第二影

響学区先端に第二生徒会の本部棟を設立すると言っのだから。

たしかに、今までのような削り合いは無いでしょう。

秘匿はないし、進む方向の共同歩調はとれてるけど、さすがにそこまでガードを上げられると、こちらも対応に困るのだ。

それぞれの生徒会の特色は、現行そのままに続けることは、会議で決定しており、緩やかな変化の中で影響力を行使しようと決めてあつたはずなのに。

「・・・くそお、あの男、何考えてんのよ・・・。」

私の隣で陰を背負って呟く桂花。

正直に言って私も彼の考えが解らなかった。

少なくとも生徒会本部が最前線にあると、全く利益がでないはずなのだ。

諜報に弱く、人員流出が激しく、攻撃に弱く、進入に弱く・・・。

・・・弱く？

いや、ちよつとまで。

なぜ強くなければならない？

現時点で第二はもつともクリーンな組織といえる。

探られる秘密も隠すべき恥部もいっさい孫呉が持ち去つたのだから。

ならば、諜報も探索も怖くはない。

それならば、境界線に本部を置けばどうなるかと言えば、簡単な話だ。

離反よりも参入しやすいと言う結果だ。

なにしろ、第一や第三から離反を志し、一歩踏み出せばすぐに第二の本部があり、窓口業務を実施してくれるのだから。

最初は表情を凍らせていたカリン会長だったけど、最後には苦笑いで了承してくれた。

桃香会長は「私たちも手伝う！」ということで、旧北郷隊である風たちを貸してくれ、さらにはねねの派遣も決めてくれた。

急ピッチで準備を進める中で行われた期末試験は、全生徒会平均で70点を越える好成績を収め、本校からの高い評価を得ていた。増援された物資、食堂の開設、不平等配給の撤廃、仕送りの正常化。

やるべき事はたくさんあるし、できることはいっぱいある。
でも、いつペンにはできない。
だから、一つづつ、一つづつ。

「桂花代」・・・驚異と言うより恐怖ね」

第二生徒会消失から一月が経った。

即時に開設された臨時第二生徒会は、すさまじい勢いで巻き返しを行い、わずか二週で安定を取り戻した。

それもこれも第二の幹部が一齐に消えたおかげで、一般学生に直接利益がでる形に運営ができたことに起因するだろう。

不平等配給自体をなくすために本部を島の中央部に置き、配給効率の上昇と食糧供給効率の増加のために「大型食堂」を開設した。

この食堂は一定の支払いをすれば、どの生徒会所属でも利用でき、さらには第二生徒会所属の人間ならばより安価に、さらには最低配給レベルなら無料^{タダ}で利用することができた。

大食堂開設以降、島内の現金が一気に第二へ流れたのは言うまでもない。

さらに、浪人や難民であった学生の大半を受け入れることにより、生徒人員バランスは大きく平等に戻りつつあった。

実際、感心どころか恐怖すら感じるまつまりだったが、さらなる

恐怖は期末試験だった。

わずか一週間ほどの集中授業によって、第二生徒会の平均成績を75点にまで引き上げたのだ。

入島以来一度も試験を受けたことがないような生徒が居る中で、これは驚異と言うよりも恐怖といえた。

しかしながら、これで前学生の平均レベルを上昇させるという目標に達してしまった。

達成させられてしまった。

すべては此処から転がり出すことを自覚してしまった。

「北郷一刀「最近、飲酒に抵抗感がありません。これって南洋だけでしょうか？」全員「そーです！」」

月光浴、を第三生徒会本部の屋根でしていた。

書類の突き合わせや打ち合わせのためにきたのだけど、会計のすりあわせに時間がかかっているそうなので、ボクはちょっと一休み。

「あ、さぼりみーつけた。」

「あ、さぼり見つかりました」

現れたのは第三生徒会会長、桃香さん。

片手に一升瓶と二つのコップ。

無言で酌み交わし一杯。

「・・・大変でしょ？」

「・・・ええ。」

何がと問うまでもない。

「・・・やっぱり、負けですね」

「・・・うん」

何に、と問うまでもない。

再び酌み交わす。

「実はですね、ボクはあの光が立つまで、孫呉会長の顔を見たこと無かったんですよ。」

「・・・もしかして、あのときが初めて？」

「ええ。」

そう、血を吐くような台詞の中、孫呉会長が、孫呉雪連会長が言葉を切った瞬間、あの驚きを隠せないと言う表情を浮かべたあの瞬間が、初めて彼女の顔を見たときだった。

「彼女は何を驚いたんでしょうね？」

「・・・わからない」

そういいながら、桃香会長は僕に体を預ける。

ふわりと汗と甘い体臭が香る。

「できれば、できれば彼女たちとも今の南国校舎を分かちあいたかったんだけどね。」

「・・・僕らが遅かったのかなあ・・・」

「・・・私たち『は』遅かった、かな？」

再び酌み交わす。

「・・・後悔してる？」

「・・・失敗したとは思ってますけど、後悔はしてません。というか、後悔はするなって毎日副長から言われてます」

むんず、と手の甲をつねられた。

「女の子を侍らせてて、別の女の子の話はないんじゃないかなー？」
「あははははは。」

コップをおいて、そして彼女の手を包む。

「・・・」

隣あっていたけれど、今は見つめあっている。

「・・・」

ゆっくりと目を閉じる桃香さん。

僕も目を閉じようとして・・・。

「桃香」・・・いい雰囲気だったのにいーーーーー!!!!」

いつこうに訪れない至福の時間を不審に思っつて片目をあけると、
一刀君が苦笑いで手を振っていた。

ゆっくり首を振ると、視線の先に黒山の人ばかり。

第三生徒会幹部、第二生徒会幹部、それどころか、この場にいる

はずのない第一生徒会幹部まで！！

「あら？ そのままいかないの？」

すました顔のカリン会長。

「おねーちゃん、次は鈴鈴なのだ！！」

「ふむ、副長としての優先権を・・・」

「まて、そもそも、お前たちだけで独占するなどもってのほかだぞ」

「そーだそーだ、兄ちゃんみんななものだー！」

「・・・（こくこく）」

続くみんなの声を聞いて、ぷつと吹き出す一刀君。

「もう、笑うなんて・・・」

振り向いた拍子に、唇が触れる。

「・・・！！」

軽いキスに驚いて離れた私を追いかけるように、キス。

浅いキス、触れあうようなキスだけでよかったのに・・・。

「子雲 星「・・・ほお、やったな。」

崩れ落ちた桃香会長を優しく寝かせた一刀は、にこやかな笑みを浮かべて手を挙げた。

沸き上がる歓声、響く口笛。

「よつ色男!」「おんなつたらし!」「くそほすと!」

ほとんど罵声だけでも、実際には祝福していた。

笑顔で罵声を受けていた一刀は、にっこりほえんで口を開く。

「・・・で、次は誰です?」

真っ白になる私たちだったが、より動物的な年少組が走った。

「鈴鈴、鈴鈴なのだ!」「ずるい、鈴鈴ちゃん。私たちも」「そうだね、そうだね!」

つっぱしる年少組が速攻で撃沈すると、ゴクリとつばを飲み込むゆな音が響く。

少女たちは、まるで光に集まる羽虫がごとくに皆吸い寄せられていった。もちろん私も。

甘美にして濃厚な感覚を味わった後、私たち全員が「朝チュン」だとは情けない話だ。

く北郷一刀「なんでみんな顔が赤いんでしょう?」

久しぶりに第三の食堂で朝食を作った。

第一から第三までの幹部がいるから、すごい人数なんだけど、な

ぜかみんな無言。

濡れるような瞳だったり、唇に指を当ててたり。

「お兄ちゃん、おはようなのだ！」

ぴょいっと飛び上がって僕の頬をついばむ鈴鈴。
負けずにキイ・ルルコンビも飛び上がってきた。

え、え、何事？

そう思っていたところで、朱里・雛里コンビが手招き。

何かささやくようなポーズなので、しゃがんでみると、左右から同時にキス。

・・・う、うわあ、まさか！！

過去の黒歴史の中で最大級の事件を思い出す。

「も、もしかして、僕、まずいことしました？」

しらーっとした空気が漂う。

うわー、まずいまずい、まずすぎるうー！！

南洋校舎にきてから何度も飲酒しても出てこなかったから安心してたのに、やっぱりでたー！

「あー、その、会長？どういうことだ？」

星さんですら顔を赤らめてる、だめだー。

「雲関愛紗」・・・なんととはた迷惑な」

真っ赤になった一刀の話では、どうやら昨夜の御乱行は泥酔状態のために発生したらしい。

彼の故郷でも同じようなことをやったので、故郷では飲酒禁止を言い渡されているとか。

そういえば最初に「飲酒は禁止されてますので・・・」とか言っていたが、この南洋校舎では子供でも飲むのだからと無理に進めたような気がする。

というか、絡んでのませた、星が。

「えー！　じゃあおぼえてないのぉ！？」

「いえ、その、桃香さんのことは、その・・・」

「え、うん、その、覚えててくれてるよね？」

「・・・・・・はい」

何だろう、この腹立たしさは。

みれば周囲全員が同じような表情をしている気がする。

どうしようもない胸の中の嵐に耐えきれないとばかりに、カリン会長が立ち上がった。

つかつかと一刀に近づいたかと思いきや、ぐいと両手で顔を固定して、唇を奪う。

浅く、深く深く深く浅く深く深く深く・・・。

永遠にも思える時間の終わりに、ゆっくりと唇をはなすと、唾液の糸が紡がれた。

「・・・さてこれで覚えてないとかふざけたことは言わせないわよ？」

我にかえった私たちは、昨夜の仕返しとばかりに一刀にとびかかった。

くそー、あんな衝撃的な初体験をなかったことにされてたまるも

のか。

私たちにさんざんキスされた後、桔梗先生と紫苑先生にお持ち帰りされた一刀がどうなったかは、本人しか知らないだろう。
私たちのために、男を上げてかえってほしいものだ。

第三生徒会ルート 第八話（後書き）

さて、第八話です。

事件の全容すらつかめないままに事件が終わってしまいました。

ある意味ハッピーエンドですが、謎が謎のまま消化されていません。

ですが、このルートでの事件説明は不可能。行き止まりです。

第三と愉快な仲間達は、以降も楽しくやっていきますが一部の敗北感は拭いがたい事実でしょう。

そんなわけで、いくばくかの蛇足と拠点を挟んで、第一生徒会ルートが開始されます。

今しばらくお待ちください

第三生徒会ルート エピローグ

第三生徒会ルート

エピローグ

）

南洋校舎第二生徒会幹部と校舎の消失は、本土の知るところになった。

学術調査を名目に多くの人間が南洋校舎に来ようとしたが、一切を閉め出す聖フランチェス力学園。

批判や要望が集中したが、最後まで「有資格者以外の入島は禁ずる」と押し通した。

むろん、自らの船舶や航空機で押し入ろうとする不逞の輩はいたが、不法侵入が確実なので現行犯を実行逮捕する権限を警視庁から得て排除し続けていた。

自称ウィッチハンターたちは、近年まれにみる謎として変質的に追い回したが、実際に出回る情報のすべては南洋校舎自身が発表したものしか無く、現地にも行けないともなれば思いが募るばかりだった。

絆の生徒会が失われたことで、南洋校舎への熱が冷めたかと言えば、別の話であった。

消失した幹部の替わりに生徒会を切り回し散る人間が、かなりの有名人だったから。

北郷一刀

フレンチエス力唯一の男子生徒でありながら、南洋校舎へいくことを許された少年。

彼が治める「博愛」の生徒会を希望する生徒は引きも切らないと言う。

「覇」「徳」「博愛」三つの生徒会が治める南洋校舎を、目指すものたちがいる。

今も、これからも。

第三生徒会ルート エピローグ（後書き）

第三生徒会ルート本編はこれにて閉幕です。

いくつかの拠点ルートを挟んで、第一生徒会ルートの開幕となります。

拠点はおよそ流れを決めていますが、登場希望のキャラがいまさら感想などで明記していただければ幸いです。（紫苑先生・桔梗先生は三シナリオ終了後に専用ルートを設けてあります。）

では、次回更新をお楽しみに。

第三生徒会ルート 拠点フェイズ3（前書き）

第三生徒会ルートエピソード後の拠点フェイズです。

山のなければ事件もない。追い詰める相手も叩き伏せる敵もありません。

南洋校舎の日常をお楽しみください。

第三生徒会ルート 拠点フェイズ3

第三生徒会ルート

拠点フェイズ3

「北郷一刀」はじめての全面休暇」

生徒会長って忙しいのです。

雑務は山盛り、陳情は山積、これじゃあ何のために大食堂を開いたのかわからない。

そりゃ、ねねやルルがきてくれるから問題ないけど、それでも忙しすぎます。

「まあ、仕方ないだろう？ 第二の幹部が投げ出してきた雑務が死ぬほどあるんだからな。」

それが第一の問題。

「さらには、事務幹部がいない。」

それが第二の問題。

時々、朱里ちゃんや雛里ちゃんが助けにきてくれるんだけど、正直に言えば焼け石に水。

全く終わる気配がない。

というか、次々と増えて行ってるんですけどぁー！

「・・・そりゃ、生徒会が正常化したんだから、日常業務だつてふつつになるだろ?」

・・・そうか、そうだったんだ。

これが普通の仕事の量だったのか・・・。

「・・・早いところ事務人員押さえないと死にますね」

「そうだな。一応打診はしているが、難しそうだな。」

そっかー、とため息。

でも、やると決めたんだから、と気合いを入れ直した。
さあ、もうひとしごと、と言うところでドアが開いた。

「きたわよ」

なにが、とかどうして、とか全く無視のこの登場こそ、第一生徒会会長 曹巍カリン様クオリティー。

続いて現れるのは、第一生徒会が誇る事務部の方々。

「・・・どうせ、誰にでもできる書類を抱えて狼狽えてる頃だろう
と思ってきてみれば、予想以上ね」

あーもー、おみとおしですか。

「おっじゃましーす。」

現れたのは、第三生徒会会長 桃香さんと愉快的仲間たち。

「へっへへ、たぶん事務初心者が困ってるだローなーと言っことで、助っ人参上。」

あー、こちらも、ですねー。

すごい勢いで事務方が処理してゆき、あっと言う間に本日の庶務終了。

「報酬は、おいしいご飯でいいよ」

「辛いのはいやよ？」

久しぶりに大食堂で腕を振るった僕に、みんなから言葉が贈られる。

「明日は久しぶりにお休みでいいよ？」

やったー！

「桃香」・・・一刀君の趣味がわからないよ」

引継なしで実務に入った第二生徒会はパニックになっていたけど、第三とカリンさんのところで一気に処理してしまった。

でも、実際の事務量的にみると、過去の処理が七割で現在の処理が三割で、一日の処理量から考えれば、うちの倍は処理しているのが恐ろしいところだと思う。

いくら処理速度はあっても、物理的な量は処理しきれないので、手伝ったわけだけど、そのおかげか、一刀君に休みができた。

せっかく出来た休みなので、積極的にアプローチをしようと、彼の部屋に忍び込んでみたものの・・・

鈴鈴「・・・くかー」

朱里「……すぴー」
雛里「……にゃー」

すでにうちの幼女三人組が、一刀君と一緒に寝ていた。

三人が三人とも幸せそーに寝ているのがうらやましすぎる。

……わたしも添い寝したかったのにー。

……いやいや、まてまて。

私、大人。

三人、子供。

一刀君、大人。

いやーん、まるで三人の子持ちかぞくうー。

「雛里「……不気味です」朱里「……同意」

人の気配に気づいて薄目をあけると、なぜか桃香会長が顔を赤くしてクネクネしてる。

同時に目覚めたであろう朱里ちゃんに視線を送ると、朱里ちゃんも解りかねるようだ。

天才秀才の名前を欲しいままにする朱里ちゃんに解らないことが私に解るわけもない、と思っっているところで、鈴鈴ちゃんが起きあがった。

「……むにゃー、なんで桃香ねえちゃんがいるのなあ？」

はっと我に返った桃香会長は、ちよつと怒ってますと言う感じに胸をはる。

「……もう、一刀君は連日の仕事で疲れてるんだよ？ もっとお

休みできるようにしないと・・・」

「お兄ちゃんは、鈴鈴たちと久しぶりにはなせてうれしかったと行っていたのだ。いい気分転換になったっていてたのだ。」

すばらしい切り口です、鈴鈴ちゃん。

「そりやそうだよ。でもね、鈴鈴ちゃんたちとはなす時間よりも、一分でも長い休養をだね・・・」

「寝てるだけが休養じゃないのだ。体だけじゃなくて心も大切にするのがいいのだ。」

すばらしい、すばらしいです、返す刀で滅多切りです！

瞬時に私たちはアイコンタクト。

絶句の桃香会長に畳み込みます。

「・・・会長、我々は確かに女子ですが、未だ『それに』至っておりません。ご安心を。」

「・・・人肌が恋しい夜もあるのです、我々も、一刀さんも」
『誓ってやましいことはしていません』

きまりました！！

「えっと、それじゃあ・・・」

もじもじとした桃香さんは、なぜかコチラにダイブ。

「わたしもひとこいしー」

計算外ですー！

「北郷一刀……っ、ごほごほごほ」

とりあえず逃げました。

朝で、女の子の匂いが充満している部屋なんか居られるはずもありません。

タダでさえいろいろな事情で女性には見せたく無い状態なのに。その上、布団にダイブしてきた桃香さんが、上目遣いで「……いいよ?」とか言われて正常でいられる分けないし……!!!!

走るがままに浜辺まで行き、海に飛び込んだ。

水着? 知りません知りません。

まずは頭を冷やしたい!!

存分に海を堪能した僕は、濡れネズミの状態で浜辺にあがる。

蒼天と蒼海と、白い波と白い雲。

やばい、本気で樂園だ。

「……朝っぱらから水泳とは、何の訓練だ?」

「ああ、ちよつと頭を冷やしたくてえ……!!」

振り返った瞬間、再び海へ視線を戻した。
戻さないとやばかった。

「そうか、なら、一緒に泳がないか?」

ああ、雲関愛紗さま、そんなに背後から抱きつかないでください！
あなたの今着てるビキ二な水着などでは押さえきれない二つの山
が、双丘が……。

「……私などでは、迷惑、か？」

「いえ、そんなことはありません！すつつごく光荣です！！」

僕のその言葉に、花がほころぶような笑みを浮かべた愛紗さん。

「なら、朝食まで、ちよつとつきあつてくれ。日差しが強くなる前
に、な？」

「……はい！」

波打ち際で、バカップルみたいに戯れてしまいました。

……いい朝だ。

「雲関愛紗」……ふむ、好評なようだな。」

視線で女はきれいになる。

紫苑先生の指導のたまもので、朝から一刀の良い視線をうけられ
た。

無骨な私の体など興味の対象になるのか不安だったが、抱きしめ
た背中から強い鼓動を感じてうれしくなった。

まるで映画のワンシーンのような時間を過ごせて、非常にうれし
かったのだが、さすがに大胆な水着のまま出歩くのは気が引けた。

そんな風に逡巡していると、一刀が上着を掛けてくれる。

「……その、汗くさくて、すみません」

ぶつきらばうに照れた仕草が愛おしい。

この時間を永遠に出来ないものかと思うけど、そうは上手く行かないのが南洋校舎。

「かいちょー！ー！！」

第二生徒会所属の代食堂班が集団で一刀を奪取してゆく。
まあ仕方ないだろう。

あの時間をせしめることが出来ただけでも曙光だ。

「後で行くから、なにかくわせろよー！」

「……はい！！」

遠ざかりながらも力強い声。
胸の内が熱くなる思いだった。

「角田詠」……おいしいじゃない」薫ゆえ「おいしいね」

久しぶりに一刀が大食堂で仕事をするというので見に行くと、すでに満員御礼で長蛇の列になっていた。

「うわー、これじゃあ一刀さんに迷惑だねえ。」

苦笑いのゆえだけど、私にはわかる。
あいつの手料理が食べたいのだと。

「詠ちゃん、また今度にしましょ？」

だめだめだめ！ 押し通す勇氣と知略があればいいの！！

「でも、こんなにお客さんが居るんだから、無理は言えないよお？」

無理じゃなければいいのよ！

・・・そうだわ！

私は自分の思いつきに惚れた。

「おーだーおねがーい！！」

「はい！！」

詠ちゃんのアイデアはすごかった。

客として店に入れないなら店員としてはいい。

さらにはマカナイをせしめようというのだから。

当初計画よりも忙しくて大変だけど、私はこう言うところで働くのが楽しくて嬉しかった。

「ラーメン定食、焼きそば定食、中華定食お待ち！」

『おおおおお』

「和定食、カルボナーラ、すし定食お待たせしました」

『うおおおおお』

くるくる働くのが楽しくて、私はこう言うのに向いているんだなーって思う。

詠ちゃんは苦手そうだけど。

「・・・うがー！注文まとめなさいよ！」

「こらー！ 逆注文しないのー！」

「だって、一刀おーーーーー！」

『わはははははは』

目論見はずれたけれど、それはそれで楽しい日だと思った。

客足が途絶えたところで一刀さんがマカナイを作ってくれた。海鮮丼とおつけものだったけど、美味しくて美味しくて。久しぶりに食べる一刀さんの味は、たまりませんでした。

「へう、毎日でも食べたいなあ。」「・・・そうね」

私たちの言葉を聞いて、ひどく嬉しそうな一刀さんだった。

「うー、ねねは家庭用の量は苦手なのです」

音宮ねねちゃんが一刀さんの隣で頬を膨らませている。

「・・・ねねのご飯も美味しい」

「恋さま~~~~~！」

ねねちゃんの反対隣に恋サンガマカナイをカキコンでる。

どうやら、この風景は結構一般的らしい。

ちよつと焼き餅が焼けます。

ねねちゃんや恋さんみたいな最良がない私たちには真似できませんし。

「・・・んん、いいにおいがする」

「ほんとですう」「おいしそうなにおいです」

「おなあへつたのだーーーー！」

ひとかたまりで現れた桃香会長、朱里ちゃん、雛里ちゃん、鈴鈴ちゃんがフラフラと歩いてくる。

一刀さんは自然なたち振る舞いで追加を準備してテーブルに並べた。

「えーっと、ご相伴に預かってもいいのかなあ？」

小首を傾げる桃香会長に、一刀さんは満面の笑みでうなづく。

『いっただきまーーす！！』

四者四様、というよりも、勢いだけは別で、一様にカキコみ始める。

良いたべっぷりに満足そうな一刀さんでした。

く布宮恋「……………」

昼の配膳が終わった後、みんなでお昼を食べて休憩にはいった。私が出来るとは配膳ぐらいだけど、一刀はすごく助かるといってくれるのが嬉しかった。

料理や食器洗いが出来ればいいのだけれど、私は不器用で上手く行かない。

ねねは小さな体をいっぱいに使って手伝っているのに、チョット恥ずかしい気がする。

「向き不向きがありますから」

ちょこつと撫でてくれながら何時も微笑んでくれる一刀は大好きだ。

お客さんが集中するお昼と夕方の合間、木陰で昼寝している一刀に、ねねと一緒に寄り添った。

暑いし汗もかくけど、でも、安心できる。そう思える。

あんなに人見知りが激しかったねねも、一刀相手だと心を許すらしく、腕の中で寝てしまえるぐらいだ。

そんな風にねねに安心をくれる一刀が大好きだ。

「・・・一刀、だいすき」「・・・だいすきですぞ」

ささやくだけで心が温まる、そんなすてきな魔法が一刀にはかかってるのだろうと思う。

だからみんな一刀が好きなんだろう。

「・・・ん、やっぱり大好き」

私は彼の頬をついばんだ。

「北郷一刀「だいまんぞく！」」

いろいろあった一日だけど、朝から晩まで大満足でした。

夜に語り合い、海で遊び、存分に料理をして。

今まさに宴の時。

・・・あんまりお酒は飲ませてもらっていませんが。

「・・・一刀はあんまり呑んじゃだめ」

隣に座る恋からダメだし。

「そうですぞ、一刀。また乱行は困るのです」

頬に両手を当てて真っ赤になったね。

その節はお世話になりました。

「・・・とはいえ、皆が呑んでいるのにおあずけでは、ねえ？」
「・・・そうですね、ええ、不公平といいますが」「あー、みんな怪しい目つき・・・」「沙和だまれ」

なぜか一升瓶片手に近づいてくる皆さん。

えーっと、お酒呑んじゃいけないんですよ？

「いやいや、適量、適量」

「そうそう、適量ですよ」

『ふーっふっふっふっふ。』

あーれ。

く子雲 星「・・・ねっとりとした台風、再発」

「曹魏カリン」なんで私を呼ばなかったのよ！」

第三生徒会ルート 拠点フェイズ3（後書き）

いかがでしたでしょうか？ 南洋校舎第三生徒会ルート日常編。

お楽しみいただければ幸いです。

もう少し拠点をに入れて、第一生徒会ルートをアップします。

おたのしみに。

第一生徒会ルート 第一話（前書き）

第三生徒会ルートの拠点を破棄して、第一生徒会ルートの開始です。

というか、自分が書くことを我慢できませんでした。

なんという情けなさw

第一生徒会ルート 第一話

第一生徒会ルート

第一話

「北郷一刀……恋バナじゃないよ？」

長い長い船旅だったけど、気持ちのいいぐらいの仲間、初めてのルームメイトたちのおかげで、ずいぶんと楽しい船旅となった。

「……で、一刀。その幼なじみっていうんは、迎えにきてくれるんか？」

真桜の一言に、僕は首を傾げる。

「たぶん来てくれていると思うけど、全員はいるかわからないかな？」

「全員つて、何人幼なじみが南洋校舎にいるんだ？」

驚きの表情の風は指三本。

「知り合いが三人もいるのか。すごいな。」

「じゃ、三人と同じ生徒会なの？」

僕がうなずくと、風、真桜、沙和が驚いた。

「じゃあ、一刀も、そこにいくんか？」
「うん、たぶん。」

そう、僕はそのためだけに南洋校舎を目指したのだから。
気高き孤高の女の子。
曹魏カリン、君に会うために。

船は予定通りに港についた。

聖フランチエス力学園 南洋校舎。
学びと学生の天地。

僕たちは船から下りたって息をのんだ。
なにしろソコは「戦場」だったのだから。

「1班から4班は防御線をはれ！」

「騎兵前進！」

「一人たりとも通すな、新入生を守れ！！」
「押し戻せ、すべてだ！！」

プラスチックの盾を構えて防御する人々が、港に進入しようとしている人々を遮る。

どんな状況なのか、なにが良いのか悪いのか。

全く判断が付かない僕たちだったが、ある人物を見つけ僕は走る。

「春ねえ！！ 何事！？」

「・・・おお！！ 一刀。きたな！！」

木刀を片手に指揮をしつつ、僕をなでつけてくれた春ねえ、
春蘭は片目を閉じて不器用なウイंकをした。
夏峰

「なに、いつもの小競り合いなんだがな、どうも新入生に男が居ると聞いてトチ狂ってるみたいなんだ。」

しばん！と木刀を降ると、突進してきた生徒が吹っ飛ぶ。

「・・・じゃあ、僕が身の証をたてれば収まる？」

「やってみるか？」

春ねえの木刀を預かり、僕は天にささぐ様に構える。

「新入生、北郷一刀はここに誓います。我が知を南洋校舎のために、我が勇を第一生徒会の為に、我が武を曹魏カリンにささぐ事を！！」

瞬間、静寂が生まれたが、それを遙かに越える声が響く。

それは歓声、それは熱狂、それは・・・

『・・・第一生徒会会長曹魏カリンは、その身の証を受けましょう』

まるでモーゼかのように人垣が割れて現れたのは、懐かしき彼女。

「よく来たわね、一刀。」

右手を差し出す彼女を無視して抱きしめた。

きゅっと抱きしめると、彼女も抱きしめてくれた。

「もう、いつまでたっても甘え癖が抜けないのね。」

「むりむりむり、どれだけ会いたかったか知ってるくせに」

もう一歩抱きしめに力を入れようとしたところで引きはがされる。

「こら、一刀。場所をわきまえろ」

薄紅色の悔い紅をさした彼女は、

「秋ねえ！！」

「元氣そうだな、一刀。」

ゆつたりと抱きしめてくれた。

これが春ねえだと、骨の限界に挑戦とばかりに抱きしめられるのが恐ろしい。

「本隊、みでの通りだ。第二を押し返せ、我らに正義あり！！」

『おおおおお！！！！』

士気の上がる盾持ちたちに押し返された生徒たちは、そのまま三々五々に散っていった。

「良いタイミングだったわよ、一刀」

「ああ、絶妙だったな。」

秋ねえとカリンにほめられて、すこしくすぐりたい。

「村の騎馬団体相撲とかだとタイミングが命だから」

「ああ、あれは面白い遊びよね」

「うちも訓練で取り入れてみますか、カリン様」

「春蘭がバカみたいに突撃していなされるだけよ」

朗らかに笑う二人に僕は一步離れて礼をする。

「久しぶりです、カリン。・・・そして、ただいま。」

一瞬、虚を突かれた顔のカリンだったが、ゆったりとした微笑みで口を開く。

「おかえり、一刀。」

「楽進 凧「・・・すごい展開だ」

飯スト北郷一刀に知り合いがいるといわれていたので、紹介してもらおうと思っていたのだが、さすがに一生徒会の会長と副会長だったとは思わなかったので、正直に驚いた。

啞然とする私たちの前でアメリカンな包容をする彼らをみていると、嬉しそうな顔で彼女らを連れてくる一刀の顔を見れた。

「紹介するよ、カリン。彼女たちがこの船旅で世話になった飯スト、凧・真桜・沙和。」

あわてて頭を下げる私たちに、強い覇気を感じる笑顔を彼女は浮かべた。

「私は聖スランチエス力学園南洋校舎第一生徒会会長、曹魏カリンよ。一刀が世話になったことを心から感謝するわ。」

本土まで鳴り響く「覇」の生徒会、その会長。差し出された右手を私たちは恭しく握り返した。

「で、一刀。この娘たちはどうなの？」

何事かわからないが、問われた一刀はにこやかに微笑んだ。

「知勇武はもとより、心根もカリンの想いに違わないよ。」
「そう。」

満足そうに頷いた彼女は、にこやかに微笑みながら私たちに言った。

「凧、真桜、沙和。貴女たちが望むなら、第一生徒会は貴女たちを受け入れます。希望するかしら？」

私たちに選択を迫る声だったが、目は違うことを言っている気がした。

（貴女たちがほしいわ。ウチに来なさい）

一も二もなく頷いた私たちは、トントン拍子に第一生徒会幹部に迎え入れられた。

後で、私たちのことをんいも知らないのに、なんで幹部なんかにしたのかをカリン会長に聞いてみたのだけれども、答えは想像を絶するものだった。

「一刀が推薦したんだから、信じるしかないわ。もし間違っていたら一刀に責任をとらせるだけよ。」

怖いヒトだと本気で思った。

「夏峰秋蘭」・・・良い男に成長したものだ。」

幼なじみ、というか幼い頃に知り合った少年、北郷一刀は純真無垢な少年だった。

身体能力は遙かに私たちよりも劣るものの、毎日私たちについて着たものだった。

だが、あの日、私たちがフランチエスカに転出を決めた日、一刀は盛大に泣いた。

わがままも弱音も見せなかった一刀が、この世の終わりとばかりに泣いたのだ。

あまりの泣き様に逆に感心した私と姉上だったが、カリン様は微笑んでいた。

感情らしい感情を大きく制御していたカリン様が、何よりも愛おしい者を見るかのように。

泣きながら立ち尽くす一刀を抱きしめて、カリン様は一刀に言った。

「強くなりなさい、大きくなりなさい。私の思いに答えられるほど強くなったと思えたなら、私の元に帰ってらっしゃい。」

「・・・でも、カリンねえ。カリンねえが行くところは女の子しか行けないって・・・。」

「私を誰だと思ってるの？ この曹魏カリンが嘘を言う？」

正面から見据えられた一刀は、ちぎれんばかりに首を横に振る。

「そうよ、この曹魏カリンが来いというのだから、あなたが強くなつた頃に来れるようにしておくわ。」

強い、強い意志のこもった瞳で見つめられて、一刀は涙を拭って微笑んだ。

「・・・わかったよ、カリンねえ。がんばって強くなるね」

誰もが強がりだと解る微笑みだったが、カリン様はそれにうなづいた。

「もしあなたが来れなくても責めないわ。でも、来れたら、そのときが着たら、一つ約束しなさい」

「・・・？」

「再び出会うことができたなら、あなたは私のことを『カリン』と呼びなさい」

チョットだけ考えた素振りの一刀だったが、今度は真っ赤になって頷いた。

「強くなる、絶対に強くなる。」

ブンブンと頷いていたあの少年が、目の前にいる少年になったとは誰も信じないだろう。

しかし、私も姉上も、そしてカリン様も、一目で彼が「北郷一刀」だと解ってしまった。

引き締まった身体、整った顎筋、意志の強そうな眉毛。

どれもがあのころを彷彿とさせた。

「秋蘭、一刀は強くなったみたいだな。」

「ああ、姉上。カリン様の名を呼ぶことを自らに許すほどには鍛えている。」

まるで自分の子供が立派に育ったかのような感慨に違和感を感じないのがおかしかった。

カリン様の一步後を歩く一刀に続き、その場で勧誘した三人の少女たちも、かなりの才能を感じる少女たちだった。

一応、仮勧誘のつもりだったが、一刀の評価を聞いて、カリン様は幹部として、新部署要因として取り入れることを決めた。

それは一刀がくると聞いて、彼の仕上がり具合で決めようとしていた部署なのだが、一目して私たちの思いは決定した。

自治遊撃警備隊、そう、小賢しい第二への牽制部隊としてあたってもらうことと。

「夏峰春蘭」・・・予想以上じゃないか」

とりあえず、採用試験として私と剣を合わせさせた。

沙和はまあまあ、というか、才能に寄りかかり修練が足りない。

これは本員のやる気次第なので言うつもりはないが、私にいなされたのを屈辱に思っているのがいい感じだ。

負の感情は武を曇らせるが、それでも修練のバネになる。その先に至れば、負の感情が晴れるだろうことは間違いない。そんな性格だ。

逆に真桜は、才能や運を信じず、着実に自分を積み重ねるタイプであるとみた。努力を怠らず、才能におごらず、だ。しかし集中力が続かず、攻めの鋭さが瞬間的に落ちてしまい打ち負けた。

集中力の持続は、今後の課題として、今の実力は十分といえる。

一番の掘り出し物は風だろう。

武器持ちの私と小手当・臍当て打ち合い、降着させたのだから。聞けば、無手の武術の心得があり、ずいぶんと武を積み上げていることが解った。

これで先ほど行った学力試験でもいい成績だというのだから無敵だろう。

採点をしたカリン様も「いい買い物だったわ」と微笑んだほどだ。

が、一番の予想外は一刀だろう。

ひ弱で足も遅く、いつ泣いてもおかしくない状況で我慢するだけだった少年が、私の剣をいなしつつ、隙について反撃するまでになつて帰ってきたのだから。

武の積み上げは尻に劣るだろう、武の才は沙和に劣るだろう、しかし集中力は群を抜き、頭三つは上回っている。

「・・・春ねえ、手を抜いてるでしょ？」

「・・・結構本気だぞ？」

「・・・ということは、結構手を抜いてるんだ。」

その上、目もいい。

二三剣を振り抜いた後、私の剣が一刀ののどに届いたところでカリン様が声をかけた。

「そこまで!!」

結果は全員合格。

当たり前だ。

少なくとも、私と対等に渡り合えるレベルであることを示した四人は、幹部として他の幹部候補たちからも認められることになった。

「ところで、一刀。なんであなたは剣をとったの？」

小首を傾げる一刀にカリン様はいう。

「あなたの武は、無手でしょ？」

な、なにに！？ では、おまえの剣の腕は？

「ほら、武器つて手足の延長だって言うじゃないですか。だからその感覚で……。」

もしかして、武器の武は初めて、とか？

「……え？ 言ってなかったっけ？」

「曹魏カリン」一刀つて、ある意味バカよね」

知を試す試験を行ったところ、全員がすばらしい成績を収めた。武を試すための試験を春蘭相手にさせたところ、全員がいい成績を収めた。

が、私としては少々不満だった。

私知っている一刀は、剣の修練などしていなかったから。というか何で剣が上手いのかしら？

だから聞いてみると、

「ほら、武器つて手足の延長だって言うじゃないですか。だからその感覚で……。」

何というデタラメ。

その人ことに啞然とする周囲だったが、春蘭は再び剣をとる。

「かああずうとおおお？ もしかしたら、もしかしたら勘違いかもしれないからきくがぁ？ わたしに『手加減』したのかああぁ？」

怒気で真っ赤になった春蘭に、一刀は正面から頷く。

「当たり前だよ。春ねえは女の子なんだから。」

びくつ、と体をふるわせた春蘭の隣にたち、きゅつと体を抱きしめる。

「春ねえは、きれいでかわいいんだから、ね？」

瞬間、別の意味で真っ赤になった春蘭はその場で崩れ落ちた。

・・・やるわね、一刀。

どんな修行をしてきたのやら。

「あ、あれ？ 春ねえ？ 春ねえ！！ カリンどうしよう、春ねえが倒れたあ！！」

・・・バカね、本当にバカな子。

私は久しぶりに沸き上がる笑いを抑えることが出来ず、はしたなくも笑い続けてしまった。

く干田沙和「・・・すごいところなの」

流れるように流されて入った第一生徒会はすごいところでした。

日本の領土の最果てでありながら、電気水道は完備、携帯電話もメールだけなら使え、さらには食糧配給用のコンビニまであるんです。

寮の部屋はランクにもよりまずけど、最低でもエアコンが付き、ちよつと頑張ればシャワーが個室につくというものでした。

そう、その程度がすごく感じるほど、他の生徒会がひどいようなのです。

よくよく情報が入る第三は、総合成績は低くないものの人数が少ないので生徒会の総合成績平均への影響力が少なく、配給がよくないため、生活物資を押さえるだけで息切れしていると言います。

だから電気などのインフラはほとんど手に入れられていないため、電気製品関係の装備もなにもないと言います。

もちろん、第三は第三なりの努力をしていると言いますが、多勢に無勢、じり貧という言葉の通りだと思います。

第二についても配給品分別の時のデータを見れば解りますが、インフラは弱いのはよくわかります。

つまり、本土の生活をもっとも引き継いでいるのが第一といえます。

で、そんな第一でも、生活に格差が生まれます。

それは、学生生活の指標ともいえる「学力」が生活のレベルに直結しているのです。

勉強を頑張ればいい部屋に住めますし、怠ればよい部屋に住めません。

ある意味平等ともいえますが、それを不満に思う学生も少なく、生徒会から離反する生徒もいます。

それが、今日の前で校舎を占拠している人たちです。

三つの生徒会のどこにも参加せず、授業も試験も受けずに無為な時間を過ごしている人々「浪人学生」。

第三から逃げたというヒトは聞きませんが、第二から逃げたという人が一番多く、続いて第一から離反したというヒトが多いそうです。

「えーっと、その校舎はあゝ、第一生徒会管轄の校舎でえゝ、皆さ

んがぁ〜ここで生活しているのはぁ〜、不法占拠なんですよぉ〜」

私の説明に、中にいる人たちは怒声で答えます。

「うつせー！ー！！ 金と成績ばかりのうるせーガリベンどもはお家で自習でもしてろおー！ー！！！」

確かにそっちの方が楽ですけどね。

「何だつたら、おれたちをこうせいでもさせてみつかぁ！？」

げらげらと下品に笑う彼女たち。

仕方ないなー、と校舎の陰に張り付く人たちに合図する。

すると離れていても解る、にこやかな笑みで一刀君が、隊長が笑う。

了解、とポーズを取った後、音もなく校舎に飛び込んでゆく。

「・・・ひゃ、なんで男が・・・」「いや、ちょちょちょ、つとまって、ください・・・その」「だ、だめだめだめ、そこははいつちやだめ・・・」「あ、あ、あ、ちがうちがちがう、それはあたい、じゃない私のじゃないってばぁ！！！」

すごいです、さすが第一のリーサルウェポン「ジゴロボム」。

見た目が格好いい隊長が、それっぽい格好で乱入し、ばいばい窓から投げ出した先にあるマットに到着。

前後不覚状態の彼女達の前で料理を振る舞い懐柔。

情にグラツいたところで第一へ帰順を唆し、補習校舎送りにすると言つ恐ろしい流れを、この一週間続けているのだけれども、ものすごい勢いで成果が出ている。

浪人学生に占拠されていた校舎の内、10棟を正常化して、2棟を補習校舎に変更。

今では浪人学生用に解放している緊急避難用の校舎以外に浪人学生が以内という状態になっています。

本日が最後の追い出しで、彼女たちが無事補習校舎に移動した時点で第二作戦が始まります。

そう、中間試験を前にした、第一生徒会の底上げ作戦が。

「曹魏カリン」・・・ほんとうに可愛いこと」

一刀の幹部入りに際して反対しなかった桂花が、会議の際の一刀の言葉に猛然と怒りを燃やした。

会議の内容は「浪人学生の駆逐と第四エリア製作隔離」についてであつた。

浪人学生問題は、きわめて微妙な問題であり、触れれば責任を持つて後始末をつけないければならない問題として、歴代の各生徒会も対応できなかった。

唯一「徳の生徒会」である第三が、無償配給という形で関わつてはいるが、あれは自分達の自尊心を満足させる以外のなにものでもない行為といえる。

はつきり言えば何ら解決を迎えることの出来ない愚考ともいえる。とはいえ、そんな責めを出来るほどの第一の方針もたいしたものではなく、隔離と放棄が意見の中心であつた。

その内容に意見をあげたのが、一刀だった。

「その方針はカリンの理想じゃない。すべてを救える訳じゃないのはわかるけど、救える者を救わないのはカリンの方針じゃない」

正直に言おう、目覚めたかのような気持ちだった。

目が覚めた、と言ってもいい。

一刀が追いかける私の背中 of のなんと気高いことか。
しかし、私の心もそれで決まった。

「・・・この、バカ男！！ カリン様の口利きだから会議に入れてやれば！！ 何も知らないくせに、バカなことう」 あかりいわないでちょうだい！！ 浪人学生問題は長年の懸念で、私たちだって色々チャレンジしてもどうにもならなかったのよ！！ 勉強しない、努力しないなんて本人の問題じゃない！！ そんな当たり前のことも解らないで勝手なこといわないで！！」

血の絶叫ともいえる桂花の言葉を聞いて、一刀は微笑む。

「桂さん、二週間ください。人員と資材も。出来ますしやります。もし出来なければ僕は退学します。だから・・・」

真剣な一刀の言葉に桂花は頭を冷やした

「・・・わかったわ。あなたのやり方をみせなさい。結果がでなければ退学してもらっわ」

声は冷静だったが、のどから血が出んばかりの声だった。

「わかりました。では逆に成功したときの話を」

「いいわ、何でもいうことを聞いてあげるわよ、できれば、ね」
「ありがとうございます」

ぺこりと頭を下げた一刀は、頭を上げる際に少し私をみた。
いたずら小僧の小僧のような笑顔は、私に深い安心を与えた。

「では、私の決定よ。北郷一刀、本作戦指揮を認めます。人員は好きに使いなさい！」

深々と一礼した一刀は、再び立ち上がり作戦概要を話始める。それを聞いた桂花が、次第に青くなるのがおもしろかった。本当に可愛い子だわ。

第一生徒会ルート 第一話（後書き）

第一生徒会ルート開始しました。

第三とはちょっとスタート地点が違います。

さらにいえば、第三より展開が非常に速いです。

そうしないと「間に合わない」のですから。

第一生徒会ルート 第二話（前書き）

おかしい。

通常の話を書いているはずなのに、なぜか拠点っぽくなってしまっ

カリン愛が強すぎるのでしょうか？

第一生徒会ルート 第二話

第一生徒会ルート

第二話

「嘉和 稟「・・・ね、ねむい」程ヶ谷 風「・・・ぐう」

本作戦指揮を担当することになった北郷くんは、カリン様の幼なじみらしく、知勇に優れていた。

さすがに名前を許されただけのことがあると、彼の指示によるテキストを見ながら思う。

なんというか、内容と順番が絶妙で、染み込むように理解させる内容と言えいいだろうか？

少なくとも、私はこのテキストを作っている段階で苦手の歴史が補完されてしまった。

桂花の指示でコピーを幹部候補に回して分析させたのだけでも、その答えがさらに恐ろしかった。

「こんな巧妙で意識をさせない洗脳は始めてみました」

洗脳、確かに洗脳だろう。

学習というこう事態はその一面があることは事実だ。

しかし、本人とその周辺に広がってゆくという「感染」と言う手法まで聞いたとき、本気で身の危険を感じた。

巧妙な洗脳、明快な意識改革、絶妙な進行。

彼が政治工作員なら、この島全体を別の世界に出来ること請け合いだ。

「でも、お兄さんはそういう野心がないのですよ?」

風の言うとおりだった。

彼はまるで風のように柔らかで暖かな少年だった。

だからカリン様も信じて彼に任せただ。

「料理もおいしいのです。」

そう、我が第一生徒会の料理番ともいえる悪来ルルが一目をおくほどの腕であったことにもおどろいたが、その味で男嫌いの桂花も唸らせたのも驚いた。

なんだかんだと文句を付けて、ぜったに口にしないと言い切っていた彼女が、おいにつられて一口食べた後がすごかった。

まさにカキコむように完食し、真っ赤になりながら「おかわり」をしたのだ。

まさに快挙、さらには作戦の成功を感じさせた。

「とはいえ、このテキスト、外に漏れるとまずいですねえ」

たしかにそうだ。

このテキストがあれば、他の生徒会の成績上昇も間違いなく、私たちのアドバンテージも失われる。

そのことをカリン様に進言したところ、軽く笑われてしまった。

「このテキストも手法も一刀のものよ? 私がどうこうするものじゃないわ」

それでも、カリン様が命じれば、と言い重ねると。

今度はちょっとご機嫌に。

「私は予言するわよ。そんなことを私が命じれば「それはカリンの行いじゃない」って一刀は怒るわ。」

カリンの行い。

少なくとも今までにない行動指針だった。

とはいえ、清廉なる行いの霸王というものは私たちも好むところだったので、引き下がった。

「べたばれ、ですね。」「べたばれ、だな。」

今までの、能面のようなカリン様も好ましかったが、喜怒哀楽が透けて見えるカリン様も愛おしかった。

こんなカリン様を見せてくれた北郷一刀に感謝しなければならなのかもしれない。

「桂 花代「・・・」

中間試験の結果は、驚くどころの話ではなかった。

第一生徒会平均成績 80・2点。

二位の第三生徒会の62点を大きく引き離す結果となった。

私の試算では70点台で、隔離排除によつて70点代後半を維持する予定だったが、正直に言えば信じられなかった。

そう、信じられない原因は、今回の得点原動力が「補習校舎」組だったことだろう。

彼女たちの平均が82点台というのだから、通常生徒の成績こそが足かせになっていたとも言い切れる。

・・・言い切られる。

私は結果発表の席で、全身をこわばらせていた。

あいつは、結果に自らの進退をかけた。

ならば、あいつが求めるものと同じ重さであるはずだった。

進退につりあう対価は進退のみ。

退学につりあうものは……。

「……一刀、ご苦労様。あんたの行った作戦は完全な成功だったわ。」

「違うよ、カリン。みんなで頑張ったから成功したんだ。材料を提供したからって料理人の努力を忘れないだろ？」「……そうね。でも貴方の材料があつてこそその作戦よ？スパイスがなければ貴方の大好きなカレーも作れないわよ？」

「……痛いところをつかれた。」

ぐつと膝を折るまねをするアイツをみて誰もが微笑む。

そんな風景を見て胃が痛んだ。

「……さて、貴女が作戦前にかけた内容、覚えているわね？ 桂花」

私は絶望で視界が真っ暗になった。

しかしここで頷かないわけにはいかない。

「……（コクリ）」

私が頷くと、カリン様はあの男を招く。

「さて、一刀。あなたが退学をかけてまで願ったのはどんなこと？」

ぎゅっと私の胃がちじまるのがわかった。

動悸も激しく、目の前に青い何かがちらちらしている。

「・・・さあ、おっしやい。一刀は桂花に何を望むの？」

どきどきと、鼓動が止まらない。

ずきずきと胃が痛い。

耳の奥で「きーン」と高い音が響き、頭痛がする。

たすけて、たすけて、だれかたすけて・・・。

視線をあげると誰の顔も見えない。

私から視線をはずし、顔さえ見せない。

ああ、これが絶望なんだ・・・。

仲良くやってきたなんて思わない。

それでも、それでも・・・。

ああ、あの男が口を開く、開いてしまう。

絶望が・・・。

「あの、桂さんのこと、桂花^{けいふあ}って呼ばせてください。僕^わのことは、一刀って呼んでください」

・・・え？

何を言われたか解らない私は、カリン様をみた。

カリン様は、そう、なんというか、今までみたこともないような表情をなさっていた。

視線を逸らしていた幹部達も、よく見れば視線を逸らして方をふるわせている。

・・・まるで、笑いをこらえているように・・・。

「あ、あんた、わたしをだましたわねえええ！！！！！」

つかみかかった私に小首を傾げる男。

「え、なにが？」

だってそうじゃない！！退学をかけるほどの願いがそんな内容だなんて誰も思っ分けないじゃない！！

恥よ、恥をかかされたのよ、ひどい屈辱だわ！！！！

これだから男って最低なのよ！！

抵抗できない相手をなぶり、笑いものにして！！！！

「夏峰秋蘭」・・・ばかもの」

一刀につかみかかり、口汚く罵る桂花を私はたたいた。

一瞬何をされたか解らなかったようだが、強い憎悪で私をにらむ桂花。

「君は賭をして負けた。そして何をされてもおかしくない状況で受けた条件を聞いて、なにを逆上してる？」

「・・・だって、ふざけてるじゃない!!」

「ふざけてない。一刀は君が重度の男性恐怖症だと聞いて、それでも名前で呼ばれないのは悲しいから、と私たちに相談してきただけだ。」

桂花はビクリと体をふるわせる。

そう、あれだけ嫌っていた男につかみかかっていたことに気づいたのだ。

二歩ほど下がった桂花に私は言う。

「私たちは一刀が何を望んでいるかを知っていたが、おまえは何をされるかおびえていた。いや、自分がしようとしていたことをされるとおびえていたんだろ？」

すっと視線をしたに下げる。

損あんことは誰もが気づいていたことだから言わずもがなだが、言わねばならないことがある。

「・・・本当に気づいてないのか？」

私の言葉に視線をあげ、怒りを露わにする桂花。

「たとえその権利があっても、カリン様が直接採用した幹部を、一刀が勝手に解任するわけがないだろ。」

真っ青だった顔色が、真っ白になる。

いや、表情すべてが抜け落ちて崩れ落ちた。

「・・・わ、わたしは・・・。」

つぶやいた桂花をカリン様が抱きしめた。

「・・・信じてもらえなかったのは悲しいけど、たとえ一刀が貴女を退学だと言っても許すはずがないでしょ？ 私のかわいい桂花」

「・・・か、かりん、さまぁ・・・。」

ぼろぼろと泣き崩れる桂花を抱きながらカリン様はささやく。

「だから、以降、一刀のことは「一刀」と呼ぶこと。いいわね？」

ゆっくりと、カリン様の胸に顔を埋めながら頷く桂花。

一件落着、と言いたいところだが、この顛末を録画していた風に、のちのちカラカわれることになる桂花に同情しないわけではない。

↳ 遼瀬 シア「・・・たいしたやつちゃ」

第一生徒会つうところは、よくて規律ある悪くてギスギスとしたところだった。

実力第一主義、といえばよく聞こえるが、勉強できりゃ偉くなるというシステムにや、ちよっと反感があった。

勉強なんつうものは生きる上での補助みたいなもんで、なくても

生活は出来る。

それでもそれを柱に出来る環境ならそれもまたいい、そんな程度のものだと私は思っていた。

まあ、生徒会幹部なんてやってれば、そういう意見をたたき伏せなければならぬこともあり、少しストレスだった。

でも、アイツがきてから変わった。

北郷一刀。

知勇武、どれも人並み以上に出来、見た目も可愛い。

私なんかは人目で気に入ったけど、桂花代は違った。

男がいない環境を求めて南洋校舎にやってきたアイツには、一刀は存在すら許せない人間だった。

そんな排他的思想ってやつは、異性どころか同姓にも向いていて、浪人学生の隔離放棄なんつうプランまで出る始末。

流石についていけん、そう思ったところで一刀は言いきた。

「……カリンの行いではない」

いや、驚いた、というよりもびびった。

その言葉を言ったときの一刀が格好よくて。

いやいや、可愛いとは思ってたけど、格好いいとは思ってなかったから、もう、ドキドキ。

一も二もなく作戦協力したんだけど、手並みというか手口があざとくて怖かった。

不法占拠している浪人学生の前に、正装して現れて、びびったところで放り投げて、飯を食わせて惑わせて優しい言葉で補習校舎送り。

立派な詐欺の手口。

思わず、

「一刀、おまえ、詐欺っぽいでえ。」

と言ったところ、

「信じたい内容こそが真実です」

と真顔で答えた。

心底恐ろしいと思ったけど、その先がもっと恐ろしい。

補習校舎で行われた先行授業、補講、模擬テストと繰り返す度に、点数が爆発的にあがってゆき、授業内容に関する履修率は10割に届くほどになった。

ありえんって。

どんなに努力したって、どんなに頑張ったって、全員100点なんて幻想だ。

そういった私に、一刀は微笑む。

「そういう幻想を塗りかえるのが僕の仕事です」

気づけば周辺の補習校舎生徒が、一刀と同じような笑顔で笑っている。

・・・まずい、なんかまずい。

よく分からないけど、かなりまずい気がする。

「サア、シアサンモ、チョットジシュウシテイキマショー」

「ま、まち、まちいな、まっとくれ、まって~~~~」

何というか、中間のテスト返却をみて、その、怖かった。

平均89点。

信じられん。

信じられない。

でも、

「たいしたやつちゃ。」

あー、なんだか一刀色にされたんかしれんな。

「許 着依」にいちやんはすごいね。」

春蘭さまを軽くなした北郷一刀さんをお願いして、兄ちゃんと呼ばせてもらうことにした。

兄弟なんていなかったから、ちょっと不自然ななって思ったけど、呼んでみるとすごく自然だった。

「・・・私も、兄様と呼びたいです・・・。」

ちょっと泣きそうなるルルのお願いにも笑顔で答えてくれる兄ちゃん、けっこう懐が大きいと思う。

そんな兄ちゃんが仕掛けた「作戦」は、幹部や幹部候補も参加していて、内容とか指揮とか結構評判がいい。

成績が上がったとか、成績のおかげで仕送りが増えたとか。

でも、実は、本当に評判がいい理由は、兄ちゃんが結構な「男前」だからだと思う。

顔がいいとかそういうんじゃないくて、女の子にたいする態度が真

摯だとか、桂花に対する態度とか。

だって、幹部会でのあのシーンみたら、本気で惚れるよ、うん。そんなことを幹部候補集會室で話していたら、ふらふらと風ちゃん登場。

「おや、キイちゃん。こんなところで何を？」

「ちよつと打ち合わせ。すぐに終わるけど、風ちゃんは何を？」

言われた風ちゃんは、一枚のディスクを出す。

タイトルは「泣きぬれて桂花」。

・・・うわぁ、いい根性してるなぁ、風ちゃん。

「ああ、風様。とうとう焼きあがったんですね！」

「お待たせしました。」

幹部候補達がわれさきにディスクを奪い、集會室にあるデッキに入れた。

お茶やら茶菓子を用意した幹部候補達がそろったところで再生ボタンが押されたのだけど、いつの間にか音量が最大に・・・。

「・・・さぁ、おっしやい。一刀は桂花に何を望むの？」

やばいやばい、退散退散。

熱心に見入る幹部候補達を背後に、ダッシュで逃げる僕だった。

背後で聞こえる桂花の叫び声と破壊音は絶え間なく続いていた。

「悪来ルル」・・・兄様は尊敬が出来る人です」

最近、第一幹部はそろって食事をする習わしになっています。

それもこれも、兄様、北郷一刀さんが着てからです。

キイは私のご飯が好きだから、と毎食作ってほしいというのが、さすがに仕事の量もあるので毎食とはいきませんえした。

ですが、兄様は家事がお得意で、中でも料理がお得意なため、朝夕の食事を私と交代で作ってくれるので、私の仕事にも負担が少なくなり、カリン様も許可してくれたのです。

やっぱり出来合いのものよりも、いんすたんとよりも、暖かいものおいしいのは誰もが一緒に、すぐにみんなで食事をするのが当たり前になりました。

「・・・一刀、今日の干物はいけてるでえ。」

「ありがとうございます。シアさん」

「・・・うん、一刀。さすがに豆腐を自分で作るとはおもわんかったぞ」

「春ねえ、昔一緒に作ったときは、春ねえから教わったんだけど？」

「そうだぞ、姉上。」

「・・・覚えてない」

『あはははははは』

まるで本当の家族のように。

「兄様、おかわりをどうぞ」

「ありがとう、ルル」

「隊長、うちもおかわり！」「沙和も！！」

「はいはい、ちよつとまっけてね」

なんだか合宿所みたいに。

「一刀、まさか調味料まで自作してないでしょうね？」

「あー、一応発酵食品はやばそうなんで、塩程度はいいよね？」

「・・・発酵食品は禁止よ。納豆なんてもつてのほか・・・!!」

そっかー、カリン様は納豆が嫌いなんだ・・・。

一緒に食事するのって最近から何で知らなかったなー。

「・・・風は結構好きですよ？ 納豆」

「・・・風、まさか密輸してないでしょうね？」

「さすがに密輸はしてませんが・・・」

「してませんが？」

「・・・ぐう。」

『ねるな!!』

「おお・・・！ あまりの緊張に眠くなりました」

密輸の話は結構ある、というかあるのは間違いありません。

本来補給物資として入り込んでいるもの以外のものが、巡回の時に何度も摘発されているから。

いろいろと緩い規範の南洋校舎でも、たばこや常習性のある薬品は禁止されています。

それでもどうしても薬剤が必要な部分もあるので、連合保健室が一括管理しているのだが、その連合保健室は「第二生徒会」の支配色が濃い。

そのため動向が不透明で、第一でも第三でもあまり信用していないのが現状です。

「やっぱり、どうにかしないとけないでしょうかね。」

兄様が「おかわり」をよそいおえると、そんなことをつぶやいた。

「・・・一刀。あなたはどうおもう？」

巡回によく出る兄様は、第二や第三の隣接区へよくいらっしやる。だから、現場の状況をよく把握なさっている。

「第一の浪人よりも、『難民』のほうがまずいですね
「そうね。」

見つけ次第、即時保護校舎送りにされているのが、「第二生徒会所属難民」の存在です。

初めて発見された難民は、着ているものも体もボロボロで、髪の毛もがさがさで立つこともできない状態でした。

現場判断で兄様が連合保健室の「蓋黄祭先生」へ連絡したところ、完全装備の第二生徒会生徒に包囲されたそうです。

曰く、

「その生徒は第二の生徒だ。勝手に連れ出したことを罪に問う。」

さすがの兄様も怒ったようで、難民の生徒を抱えて強行突破したとのこと。

一緒にいたキイも怒り心頭で、いつのもの三倍は怒りながら食べていました。

以降、連合保健室は「敵」と認識した兄様は、（実のところカリン様の黙認で）島外との密輸を開始したのです。

必須薬品や必須資材を連合保健室に押さえられたままでは身動きがとれないとカリン様も判断した上のことでした。

では、密輸における取引商品は、と聞いてみると、視線を逸らす兄様。

疚しいこと、かも知れないのですが、ちょっと怖くて聞けませんでした。

どうか兄様が悪に染まりませんように。

「北郷一刀「密会」」

今回の密輸には、実のところカリンドころか第三生徒会も絡めることにした。

なにしろ薬剤機材は連合保健室、いわば第二生徒会がせしめており、飲み薬はおるか緊急救急用品すら押さえているのだ。

こんな状況で難民問題どころか浪人問題すらおぼつかない。

今回発見した「難民」は第三生徒会も憂慮しており、何とかしたいけど何ともならない、できない、というのが本音だという。

そんなわけで、密輸の話第三生徒会に持ち込んだところ、大いに驚かれた。

というか、最初は「巻き込むな」と怒られた。

とはいえ、独自の資本、というか医薬品備蓄が欲しいという点は変わらず、最終的には合意に決着。

では何をコチラから売るか、という話になったところで、大いに白い視線を受けることになった。

かなり抵抗を受けたけれど、今回僕が導入した学習手法の開示をすることで引き受けてもらうことにした。

「曹巍カリン」……一刀……殺そうかしら？」

うれしい悲鳴、なのかしら？

一刀がしくんだ密輸製品は、向こうで大評判で、品不足、製作督促、偽物の横行とすごい勢いになっているとか。

でもね、ただの「塩」よ？

離島ならどこでも作ってる「塩」。

これに何の価値があるのかしら。

溜息一つで聞いたところ、視線を逸らした一刀が一つのパッケージを取り出した。

そのパッケージには、

『乙女の塩』

と書いてあり、タイトルの下には女性が塩田で塩を作っている絵が書いてあった。

.....

無言でにらむと、視線を向けていないはずの一刀が、びくりと震える。

なるほど、確信犯、ね？

ゆらりと立ち上がる私の気配を感じて、いつそうからだを堅くする一刀。

きゅっと首を私が絞めると、あきらめたように体から力を抜いた。

「で、この絵を描いたのは誰？」

私の言葉に、一刀は指を向ける。

その先にいるのは、真っ青な顔の桂花。

「ば、ばか！ 内緒だっ ていっ たでしょー!!」

語るに落ちるとはこの事ね。

お仕置きよ、おしおき。

ふたりとも、私の質問に答えなさい。

「なんで、この絵の肖像が私に似てて、さらにさらに・・・」

全裸なのよ!!!!!!

第一生徒会ルート 第二話（後書き）

お待たせしました、第一生徒会ルートの第二話です。

本編の一刀君は、かなりはっちゃけてますが、キャラ崩壊ではないと信じます。

ええ、信頼は大切ですw

ご意見感想、おまちしてます。

第一生徒会ルート 第三話

第一生徒会ルート

第三話

「劉蜀桃香「・・・ほんとうにいいんでしょうか？」

労働の対価ということ、塩田の上がりの半分ももらってしまっているんですが、本当にいいんでしょうか、と聞いたところ、北郷君はにこやかに「当然の報酬ですよ」と言い切った。

内々にカリン会長に打診したところ、カリン会長も「対価として当然よ」と言ってくれたのはいいんですが、こんなに医療品を大量に買うこともないんですね・・・。

そんな風にいう私に、朱里ちゃんと雛里ちゃんが教えてくれた。衣食に足りて初めて他人を助けることができるはずです、って。

そう、私たちって自分たちや応援してくれる人たちとの食事で精一杯で、他人を助けるなんて言うにはおこがましい活動しかできていないんだよね。

うん。

浪人学生問題だって、そのほとんどを第一が解決してくれたし、私たちが出来ることなんてあるのかなって思っていた。

でも、あった。

少なくとも、浪人学生問題なんて目じゃないほどの緊急事態。

『難民学生問題』

最初話を持ち込まれたとき、何の冗談かとおもったけど、領内で調査をしてみても驚いた。

第二との隣接区で、第一で見つかったのと同じような生徒が二人見つかった。

最初は連合保健室に連絡しようと思ったけど、第二の不信は私たちも感じていたことなので、第一の支援を受けて介護できた。

彼女たちから聞いた第二の生活は過酷の一語に尽きるもので、まさに生き地獄、と感じた。

何とかしたい、と心から感じたけど、私たち第三では力が足りない。

無力感にさいなまれた、苛まれていた私たちに、北郷君が怪しげな話を持ち込んできた。

塩を作って売りましょう、島外にと。

そう、完全に「密輸」。

幹部全員で否定したけど、でも、北郷君は一人でもやります、でも、力を貸してくれたら報酬をお分けします、といってくれた。

色々悩んだし、色々会議したけど、結論は出た。

やる、と。

で、やってみたら結構おもしろかったし、作る喜びってこういうものなんだって感じられた。

かなりの量が出来たところで、北郷君が持ち込んだパッケージをみて私たちは固まる。

「な、な、なんですか、この『乙女の塩』といういかがわしい袋は……」

朱里ちゃん雛里ちゃんは真っ赤になって倒れたし、愛沙ちゃんは

すごい勢いで木刀を一刀君に打ち込んでいた。

いや、なんというか、下品だけど、描いてある絵は綺麗だよ？
でもさ、なんでカリンさんの全裸っぽい絵なの？

そう聞いた私に、北郷君はまっすぐに答える。

「言い出したのは第一ですから、やばい橋はこっちでもたない」と

これが第一の、北郷君の強さなんだって分かってしまった一幕だった。

はじめに少量、父島方面に流したところ、一気に本土の好事家に蔓延し、もっともっとと要求されることになり、今ではたぶん、蔓延している塩の五倍の偽物が流れているだろう、って話。

塩は専売販売物なので、ばれれば凄いことになるけど、偽物が大量発生しているので、目くらましになるだろうって言うのが、北郷君の話だったけど、そんなことまで見据えているのはちょっと怖かった。

とはいえ、急場どころか、かなりの資金的余裕が出来た私たちは、始めることにした。

私たちが出来る、私たちがしたかった活動を。

「桂 花代「・・・ああん、カリンさまあ・・・。」

一刀の裏切りで私が書いたことがばれてしまった挿し絵だけど、冷静になったカリン様にはお褒めいただいた。

最初は第三の幹部が水着になって写真を撮り、首から下をトリミングする予定だったらしいのだけれども、それでは第三ばかりのり

スクが大きすぎると私が反対。

確かにその通り、と考えて、そして詰まる。

どうしよ、と。

マスコットキャラでもかくかとおもったけど、それでは「乙女の塩」のバリュー足り得ない、と一刀が強く主張。

男ってやつぱり変態。

そんなこんなで私がカリン様の姿絵を描いたところ一気に採用で、売ってみたら凄い反響で、カリンさまも興味がわき・・・

「・・・ああああああ」

急遽思い出してみもだえる私におびえる風。

分かってないわ、分かってないのよ。

おこさま風にはカリン様の愛らしさが分かってないのよね。

「風には、単に変態性欲に身悶えてるようにしか見えないのです。」

ふん、おこさまにはわからないですよー。

「それよりも、そろそろ購入品目を煮詰めますよ、大人の変態性欲さん。」

へ、変態じゃないわよ！

「程ヶ谷 風」・・・エロ塩」

お兄さんは、なんというか、予想の斜め上をいく人でした。

すごい学習方法の提案もそうですが、進んで密輸をしようという発想がスゴすぎです。

で、何を輸出するかと思いきや、塩です塩。

それも「エロ塩」

エロエロです。

はじめのはじめは汗とかから生成しようとか思っていたらしいのですが、さすがにヤバすぎます。

それでも女子が、汗水垂らして生成した塩と言うことで産地不明ながら大人気。

裏ネットで天井しらずの人気になっているとか。

需要が天井になったあたりで流す手法が堅すぎで、いくらでも資金が入ってくる状態になってしまいました。

逆に産地探索が始まっているので、しばらくは出荷しないと言っていました、おいしい稼ぎをどこまで我慢できるのでしょう？

「いや、我慢というか、自給する分だけでも生産すればいいかと」

さすがお兄さん、エロエロです。

自給と称して乙女の汗がなめたい、と？

「いやいやいや、風。それちがいますから!」

はねるように否定するお兄さんはからかいがありませんね。

「あはははは、からかわれてるんだ。」

がつくり肩を落とすお兄さん。

「まあまあ、第一と第三の供述をまとめましょう」

「うはーい。」

みんなにいじられて、かわいそうですねー。

・・・おもしろいけど。

第一と第三に收容された難民から、体力が回復し次第に集めた供述から、第二の現状というものがしれた。

配給レベルは最低で、どれだけ試験でいい点を取っても配給の反映されないと言う。

仕送りの大半をピンハネされ、生活は困窮。

雨露がしのげればよいとばかりの扱われ様は、非道の一語に尽きる。

他の生徒会への妨害活動に動員されている生徒も、大半は飯ストを人質に取られている生徒で、食糧事情がいいわけではないと言う。あそこで食べていられるのは幹部だけ。

そんな生徒会があつていいものか、お兄さんは怒っていました。

でも、どうなんでしょう？

正直に言えば、私たちがこんな状態の第二をしれたのは、お兄さんが速攻で浪人学生を纏めたからなんです。

だからその中に埋もれて解らなくなっていた「難民」存在が浮き彫りになり、そしてその対応を積極的にしようと言うことができたのです。

お兄さんが入学しなければ、もしかすると手遅れになっている人がいたかもしれません。

そうなれば、私たちは自分たちの無力を嘆いて居たのでしょうか？

いいえ、自分たちの責任ではない、第二の非道許すマジと勘違いも甚だしい怒声を上げていたのでしょう。

「・・・勘違い？」

そうです、お兄さん。勘違いです。

自分たちの手の中しか見ず、自分たちの周りしか見ず、自分たちに従うものたちだけを相手することが、果たして生徒会といえるでしょうか？

配下にならない人々も、支配下にならないところも、おしなべて気を使うべきだったのです。

風は今更ながら今までの行いを省みているのです。

「それは、後悔？」

後悔ではありません。

しかし、風たちは省みなければならないのです。
そしてこれから生かさなければならぬのです。

「とりあえずは、何をしよう？」

「、あ。戯言はおいておいて、カリン様の大方針を決めるための使用作り、これを早急に、ですね。」

「ふわーい。」

「曹魏カリン「・・・」」

第一生徒会内での決心はすんでいる。

いま相対する第三生徒会幹部との折衝だが、恐ろしいまでに和んでいた。

というか、一刀がお茶とか茶受けとかを用意していると、それを喜んで受けたり、先日の茶受けもよかったとかはなしているのって、どう言うことなのよ！

言葉にしない私の意志に気づいてか、一刀は小声で私に囁く。

塩田作業の合間に茶受けとか出しているの、と。

・・・まあ理解するわ、一応黙認してるし。

和やかな雰囲気もまあいいでしょう、そう言うものだとして理解すればいい。

たつぷりと時間をかけて計画所を読んだ、第三生徒会会長は、深いため息をついた。

自分たちの調べた内容とブレのない内容から、難民が語る第二生徒会の最小公倍数的な事実が拾えたと見ていいだろう。

「で、第一はとにかく第二生徒会の活動凍結と代行運営を行う、と？」

「それは最後の手段よ、桃香会長。少なくとも、我々ならとれる手段があるわ」

「・・・そう、ですね。」

浮かない顔の彼女だが、これは迷いではないのだろう。

あえて言えば「残念」。

できれば、できうるのならばと前置きするが、彼女は「みんな」が割れる環境を求めているのだから。

少なくとも第二幹部以上は切り捨てなければならぬ事態を考えると、決断しにくいのだろう。

「桃香会長。私はあなたが判断席内理由を理解しているつもり。だからあなたが判断しないと云うのならば独自にやらせてもらうわ。」

その言葉を聞いて、桃香会長は大きく息を吸った。
ぐつと胸を張りほえむ。

「いいえ、私たちもやります、できます。」

その瞳には迷いはなく、背負うものとしての光があった。

「なら、賛成してくれるわね？」

「はい。一部の条件がありますけど。」

この後に及んで交渉？　ちょっとおもしろい気分になった私に、
桃香会長はほえむ。

「絶対ギブアップは無し、ということぞ！」

「当たり前よ。」

私たちは手を握りあった。

その握手は一時的なものだったが、南洋校舎を思ふ気持ちは永遠
だった。

「真桜……目が回るほどの忙しさや」

第二生徒会解体作戦と銘打たれた今回の作戦は、主に三つの目標
があった。

一つは第二生徒会一般学生の救済。

一つは第二生徒会幹部の捕縛。

一つは第二生徒会の再生。

準備するための資料は膨大だし、必要なものも多すぎた。

しかし、密かに積み上げられた資金もかなりのもので、すべてを負担してもあまりある量だった。

こんな資金がどこから、と体調に聞いてみたけど、計画な答えは聞けなかった。

たぶん、人助けのためとはいえずいぶん無理をしたのだろう。

この人は毎日の中でもかなり無理してるのに、ピンポイントでもすこむ無茶をして困ってしまう。

「隊長、むしりたらあかんで。」

「今無茶しないでいつ無茶するんだよ。誰かが死んでからじゃ遅いんだ」

少し血走った目で、隊長は自分を追いつめているようだった。

「隊長、あんたが倒れたら、あんたの部下であるウチらが無茶せんとアカン様になるんやで？ あんたはそれを知ればもっと無茶する。アホのスパイラルになるちゅうのや」

少し目を見開いた隊長は、アタマを振ってほほえんだ。
少しだけいい表情に戻る。

「ごめん、真桜。・・・少し仮眠するよ。」

「ええって。そのあいだぐらいうちらでやるて」

「・・・うん、頼りにしてる。」

うちは、ちよつと元気を分けたるつもりになった。
ちよつと隊長の頬をついばむ。

「・・・え、真桜？」

「元気だしや、うちの初キスや」

「・・・え、あ、うん、ありがとう」

ほんま、真っ赤になってかわいいったらありやしない。
安売りはせんと決めとったけど、隊長相手ならええよな、おかん。

「あ、真桜ちゃんずるいの、沙和もするの！」

「・・・隊長、自分も・・・。」

あー、もう、うちらは三人ワンセットかいな。
それでもええけどね、もう。

「ところで隊長、風がいつていた『エ口塩』ってなんですか？」

あかん、隊長が急に倒れた。

だから無理したらアカンちゅうたやろ！！

「北郷一刀」・・・エ口塩禁止」

さすがに意識が途絶えましたよ、

「エ口塩」

あのお子さまは、何つつ単語をふれ回っているのやら。
不意打ちで僕の命が刈り取れます。
要注意としてもらわないと。

・・・なんていうんだ？

エ口塩は刺激的な単語なので、勘弁してください？

言えませんか。

いくら自分に正直な僕でも、言えません。

「まいったなあ……。」

思わずため息がでてしまった。

幸せが逃げるといいますので、逃がしてたまるかと捕まえるまね。

「で、一刀。何をしてるの？」

「ため息で漏れた幸せを捕まえたところ」

僕の枕元にたつカリンまでため息。

「ちょっとは正気に戻ったかと思ったのに、まだまだダメかしら？」

いやいや、もうかなり寝たので元気。

体感的には五時間はねたし。

「また倒れてから一〇分も経ってないわよ」

ありやま、と肩をすくめる僕。

「一刀、何を焦ってるの？」

さすがカリン、僕のことをよく解ってる。

だから、僕の心の内を話すことにした。

「カリン。なぜかは解らない。だけど急がないといけないんだ。

急がないと間に合わなくなる。ただそれだけが解るんだ。理屈じやなく、それだけが解る。」

心身症かもしれないし、考えすぎかもしれない。
でも、僕はそう感じている。

確信だけを胸に。

「そう。」

短く答えたカリンは、背後に声をかけた。

「桂花、いるわね？」

「・・・はい。」

「行程を一週間前倒し。」

「・・・無茶です、カリン様」

「私は命じたわ。」

「・・・っ！ 解りましたカリン様。なんとしてでも成し遂げます」

人の気配が消えると、カリンは僕に向き直った。

「これで何もありませんでした、ではすまないわ。

でも、何もなかったという結果が一番だというのが悲しいわね。」

そして、その結果は得られないことを、僕もカリンも感じていた。

作戦の開始は二週間後だったものを一週間後に縮められた。この
変更で修正できたかは解らない。

修正できていれば、もしかするとこの胸の内の焦燥感が治められ
るだろうか？

第一生徒会ルート 第三話（後書き）

お待たせしました、第一生徒会ルートの第三話です。

展開が第三生徒会ルートに比べて、早い・チートとご意見を伺っています。このへんはいわゆる「ひぐらし」ちつくな無意識外の経験累積があるかも・・・ということスルー願います。

続きます第四話は、ちょっと難産気味で、少しお時間をいただければ、ということをお願いいたします。

ご意見ご感想をお待ちしています。

第一生徒会ルート 第3・5話 拠点フェイズ1（前書き）

第一生徒会ルートで、こんなエピソードを書いていたのですが、速度優先で切り捨てました。

というわけで、ちょっと割り込みです。

第一生徒会ルート 第3・5話 拠点フェイズ1

祝 累計 一万人（10000ユニーク）ご来店記念。

割り込み 拠点フェイズ！！

第一生徒会ルート

拠点フェイズ 1

↳ 遼瀬 シア

一刀が倒れたと聞いて、とるものとりあえず走って行きたかったけど、そんなことをされて喜ぶ

ような奴じゃないことは短いつきあいでも解った。

だから、ぐつと我慢する。

心配なのは自分だけではない、と。

だから目の前の三羽がらすの頭をはたく。

「あんな、心配なんはみんないっしょや、でもな、仕事はせなあかん。せやないと倒れた一刀に

申し訳ないやろ？」

三人ともいい顔でうなづく。

そんな風に言っておりましたがあゝ

もちろん仕事が終われば抜け駆けするのです。

もうみんな休んだ頃だゝ、ということで、一刀の部屋に忍び込んでみると、ラッキーなことにだ

れもブッキングしていなかった。

こりゃ、寝顔独り占めやな、ということで、そつとベットに寄り添うと、うつすらと一刀の目が

開く。

「あ、シアさんだ……。」

一目でわかったという事で、褒美に撫でると、嬉しそうに微笑む。

あかん、あかん、いやされるわー。

……ちゅーしたるか……

「シア、そこまでよ」

気づけば曹ちゃんが首根っこをつかんだ。

「いけずや、曹ちゃん」

「……その手前までなら黙認よ」

「そかあ、せやったら、なでなでさせて。」

「……首から上だけよ」

「曹ちゃん、いけずや・・・。」

まあいい、目を盗むなどたわいもない。

「・・・シア、とりあえず、私の後よ」

「へーい。」

むー、お手つきでもいいけど、初物の方がおいしそうなんやけどなー。

「桂 花代「・・・できるわよ、やってやるわよ!!」」

主君の思いを形にする。

それこそが私たち文系の花道。

粛々と終える仕事も、颯爽と仕上げる仕事も、私たち文系幹部にとっては主戦場だといえる。

書類を叩き伏せる、書類をナギ払う、書類を・・・

「桂花ちゃん、もどってきてくださーい。」

はっ、思わず意識が飛んでたわ。

なにしろこの三日、寝る時間などないぐらいの忙しさ。

風ですら「ネタ」で居眠りのまねをしないほど忙しい。

凜など鼻血も出ないほど憔悴している。

元々は「一刀」の無茶が始めだけど、それでもあいつの言う「間に合わない」という言葉が実

感できないほど愚かではないつもりだ。

「そうですね、お兄さんの言うとおり、二週間では遅すぎると思いますしね。」

そう、この準備期間二週間というのは、我々にとっては最速だけれども、相手にとってみれば下

策中の下策だ。

なにしろ相手がほしいものは「時間」なのだから。

我々が分析した第二生徒会の方針は「時間稼ぎ」だった。存在のはじめから今に至るまで、なにを目的としてなにを終着としているかすらわからないけれ

ど、大まかな方針を分析すると「何かを待っている」としか思えないのだ。

いや、「一刀」が「間に合わない」と言い出したことから引っこかり気づいたともいえる。

「せっかく気づけたチャンスは、潰さないようにしなければなりませんね、桂花。」

「・・・そうよね。」

事務は文系の花道！！

とはいえ、挫けそう。

「北郷一刀……やっとベットから出る許可ができました」

第一生徒会は上を下をの大騒ぎ中。

とはいえ疲労で倒れた僕には休養が命じられていて、身動き一つ出来なかった。

風や沙和たちが状況を細かく教えてくれるのだけれども、そのたびに動きたくなる。

人目を忍んで部屋から出ようとすると、なぜか春ねえや秋ねえが現れて説教地獄になるのが恐ろ

しい。

そんな缶詰四日目でどうにか外出許可が出たので、急いでみんなの手伝いに入った。

「助かるわぁー隊長。」

真桜の話では、そろそろ集中力の限界だということところで僕が戻ってきて、どうにか持ち直したと

か。

なるほど、そういうカンフル効果も狙ったのか。

わが会長カリンの手腕に驚く僕だった。

弛緩した雰囲気はゆつくりと張りなおされてゆく。

それは実行が迫っていたから。

決行が迫っていたから。

第一生徒会ルート 第3・5話 拠点フェイズ1（後書き）

2010/6/26 に割り込みました。

ご感想をお待ちします

第一生徒会ルート 第四話（前書き）

すんごくおまたせしました。

第一生徒会ルート 第四話です。

第一生徒会ルート 第四話

第一生徒会ルート

第四話

「夏峰春蘭」・・・まるで歯ごたえがない」

およそ無茶とも言える強襲作戦が実施された。
実働員は第一及び第三の総務。
そして私たちだった。

限りなく無茶苦茶なものだったが、着実な成果が出ていた。
少なくとも、進む方向の第二生徒会所属の生徒による妨害はなく、
救助必要者の山が出迎えるばかりだった。

進行班は後の処理を後方班に任せ、さらに前進する。

先頭を走っていた一刀が息切れを始めている。
とはいえ、自分からさがれる奴じゃない。

「一刀、先頭を代われ」

「・・・まだいける、よ」

「おまえの速度にあわせてたら、行軍が遅れる」

「・・・うん、わかった。」

先頭が変わる瞬間「・・・春ねえ、ありがと。」「なんていうのだから、自分でも限界だったと理解したのだろう。

素直じゃなさすぎるが、そういう愚直なところも嫌いじゃない。

「これから先は情報にあった防戦エリアだ。気を抜くな!!」
『おう!!』

武に優れたるんかまが続いてくれる。
それだけで私の力がみなぎる。

「姉者、そろそろ中間地点の構築位置だ。」

「わかった。・・・一刀は中継地点の構築指示、その場で風を待つ
て拠点を!」

「わかった、春ねえ!」

「あとのものは私に続け!!」

『おお!!!!』

めざせ、そして落とせ!

「孫呉雪連」・・・なに、何のこの早さは?」

細作からの報告で、第一生徒会及び第三生徒会の連合による第二
生徒会への侵攻が始まったという。

どうにも早すぎる。

少なくとも、周辺収集にあと一週間。
さらに侵攻決定まで時間がかかるはずだった。

「冥林、どういうこと?」

「わかん。少なくとも劇的に行軍を早めさせる要因があったのだ
ろっ。」

「・・・連合保健室の情報もあてにならない、か」

聞けば最近、第一も第三も連合保健室へ来ていないという。たしかに、第二の支配下にあると、あからさまな示威行為はしていたが、我々の性別は薬品の類一切を不要とできる性別ではないのだ。

しかし、連合保健室へ支給を求める声がない。ということは、何らかの手段で補給物資を偽装して入手しているということになる。

この地の戦いは温く緩慢だが、動きが早い。
何度も感覚の修正に手間取る。

「で、どこまで侵攻されてるの？」
「全面包囲寸前だな」

あつそ、と軽いため息。
ならば次の戦いは・・・

「舌戦か」
「舌戦ね」

この辺は昔から変わらない、本当に。

しかし早い。早すぎる。

「曹魏カリン「観念なさい。」

包囲は完了した。

すでに中継陣での救援活動が開始され、重傷者は後方に送られている。

細かい指示などしなくても第三と連携をとって動いてくれるのが助かる。

本当に一刀は良い男になって帰ってきてくれた。

あの子に目を付けた過去の私に感謝したい気持ちでいっぱいだった。

「カリン様、後方から難民収容完了の報告と、幹部への協力者の説得に移るとの報告です。」

なんだか本当に順調すぎて怖い。

はじめに計画された内容の三歩先に行っている。

本来であれば本部包囲後の第二幹部解体を実行し、その事実を持って難民救済をするつもりだったが、時間の関係で越権ともいえる実行救済を先に行うことにより、第二幹部に意味なしの状態を実現しようと言っただ。

「どちらにしても、はやく桃香には来てもらってちょうだい」

「はい、カリン様。包囲完了の伝令が戻るのにあわせて急がせていきます。」

「・・・いいわ、ありがとう」

目的が徹底されていれば、その目的に向かって全員が全力を尽くす。

曖昧な目的設定ではなく、確固たる明確な目標を提示できれば組織は恐ろしくまとまる。

わかっていたけど、今日ほど実感したことはない。

「さあ、無能な統治者を引き吊りおろす、その瞬間よ!!」
『おおおおおお!!!』

く桂 花代「・・・なんなのよ？」

およそ理性を越えた、異常な口調でまくし立てる孫呉雪蓮の言葉は急に止まる。

絶句と言うよりも、何かの衝撃を受けて全身を固めたようだった。見開いた目から涙がこぼれ落ち、ガタガタと震える体を支えながら崩れ落ちる。

なにが起こっているのか、と思ってみれば、何故か第二幹部の大半が同じような調子だった。

「・・・なにが起きてるの？」

突如現れた北郷一刀が私の隣でささやく。

「・・・わかんないわよ。って、耳元でささやかないで」

ごめんごめん、と離れる一刀に、前のような嫌悪感を感じていなかったけど、恥ずかしくて邪険に扱ってしまう。

そんな一刀がカリン様の方へ歩いてゆくんだけど、なぜか第二の幹部の視線が一刀に注がれていることに気づいた。

そんなに男がほしいなら、本土に戻りなさいよ。

そんな風に感じたけど、その視線はもっと違い色だと気づいていた。

「・・・大丈夫なの？」

思わず声をかけたカリン様に視線を合わせる孫呉雪蓮。

「・・・ええ、もう大丈夫よ、もう。」

ゆっくりと立ち上がった孫呉雪蓮は、ぼろぼろに流した涙をそのままに不適な笑みを浮かべた。

「・・・いいわ、第二の凍結を受け入れるわ。」

「雪蓮！！」

「冥林、わかったでしょ？　今回はここまで、ここまでなのよ？」

きゅつと孫呉雪蓮が隣の女性を抱きしめた。

お互いに抱きしめあった後、強い意志を秘めた瞳でカリン様をみた。

「調停や条約は明日でも良いでしょ？　今日は飲みましょう。あなたたちの戦勝祝いよ？」

どこまでもふざけた言いようだったが、誰もそれを口にしなかった。

どこまでも彼女の視線が負けていないことを感じていたから。

「北郷一刀」・・・なんなんだ、この雰囲気」

戦勝祝い？　なんだろうか。

第二のホールで始まった立食パーティー（？）は、オモイツキリ盛り上がりにかけるものだった。

だって、ほら、なんというか、負けてないんですよ、第二の幹部の人たち。

僕やルルが作った料理を「すごくおいしい」と堪能していたし、いろんな人に話しかけて華やかだし。

圧制を引いていたとか飢饉寸前まで生徒を追いつめたって罪悪感とかいっさいないんですよ、ええ。

予めカリンから「生徒会運営に関する一切の干渉の禁止」が言い渡されているので、誰も口にできないけれど、内心では面白くない、というよりも理解不能だった。

「どないなってるねん。」

と呟く真桜の言葉が、みんなの共通意識だった。

とはいえ、表面上は「にこやか」に会話する三生徒会長の意図があるのだろうから、従わないわけにはいかない。

まあ、こつちとしても死人がでたわけではないし、ギブアップや本土介入なんて事態は真っ平なので、呑み込むところは呑み込むべきなんだろうけど。

そんな中、呑み込むべき感情について吟味している僕の隣に、一人の女子が現れた。

褐色で目つきが鋭いところは、孫呉会長に似ている気がする。

「・・・あ、あのぉ、はなしても、いい？」

険しそудった眉をゆるめ、気弱そうな表情。

なにが彼女をそこまでさせているのかわからないので、肩をすくめてみせると、ちよつと明るくなる。

「か、かず……いえ、あなたは、その……」

「第一生徒会所属 北郷一刀です」

瞬間、彼女の瞳にブワツと涙が浮かぶ。

両手で口元を多い、まるで口から何かが漏れるのを押さえ込むようだった。

ぶるぶると震えるからだを押さえ込んだ彼女は、一度深く呼吸した。

「……その、大丈夫ですか？ 体調が悪いなら……」

「い、いいえ、いいの、気にしないで。……ちよつといろんな事を思い出して……感極まっただけだから」

なんだろう、今までの僕との会話の中で、どこでそんな要素が？

「立っているのが苦しいなら、ほら、そこに一度座りましょう、ね？」

「……うん、ありがとう、うん。」

その女子の肩を抱き、会場端のイスに導く。

一度厨房まで走り、水をいっぱい持つてくつもりだったが、何故か僕の裾をつかんでいる彼女。

何事だろうか、と覗き見ると、真つ青な顔。

「あの、その、おねがい、もう少しそばにいて、くれないかしら？」

どうしよう、と思ったけど、僕は元の位置に戻った。

彼女の隣の壁の役。

彼女は申し訳なさそうに、それでいて、安心を込めたため息をついて僕に寄りかかった。

「……沙和について行けばよかったか？」

沙和の危機回避能力はスゴいのかも知れない。

隊長やルルさんの料理につられた私と真桜は正直にそう思った。
なにしろあの「戦勝会」会場はスゴいいやな気配が渦巻いていたのだ。

思い出すだけでも、胸が痛い。

中でも第一幹部の視線が一部に集中していた。

隊長、北郷一刀が第二幹部女子と仲むつまじく会場端で会話したり、イスを勧めたり、水を持ってきたり、みをよせあったりりりりりりり．．．。

「風、なぎ、しっかりせえ、なぎ！」

いけないいけない。

思い出して暴走してしまった。

戦勝会会場を片づけながら、私と真桜は少しはなしていた。

そう、第一幹部数人が私のような調子だったので、明らかに会場の雰囲気は悪かったはずなのに、第二の幹部が異常なテンションで盛り上がっていたため、ほとんど力オスな状態だった。

「しかしな、**風**。あいつ等なに考えてるんやろ？」

「
・
・
・
・
全くわからん」

そう、全くわからないのだ。

今までの運営状態から見れば、よくて停学本土送還、悪ければ本土送還のうえ退学、刑事告訴なんて線もある。

捜査の関係があるので、警察の手がこのしまにはいる可能性すらあるのに、彼女たちは気楽に酒宴を楽しんでいるようだった。

いや、一つだけ、本当に一つだけ、邪推としか言いようがないけれど、一つだけ可能性がある。

それは、

「隊長やる？」

「ああ。」

第一幹部が隊長を追う視線、視線の色合い、表情、すべてが女の感覚に訴える。

いや、女だからこそわかる色合いを醸し出していた。

理論も論理も時間感覚も越えて。

あれは、恋する女の目ではなく愛を確認する女の目、だと。

「・・・うちはそこまで確信はもつとらんけどな。」

「しかし、大まかには一緒の考えだろ？」

「・・・せやな。」

ぱりぱりと頭をかく真桜。

「言われてみれば、ストンと落ちるもんがあるなあ。」

自分で言うのもなんだが、私にそんな感覚があることに驚いたが、それでもこの感覚は、この共感嘘ではない。

そう、彼を愛した女の共感だ。

「しかし、うちの隊長、どこでそんな大量のナンパしてるんや？」

「わからん、しかし・・・うむ」

考えがまとまらない。

とてもいやな、本当にいやな感覚だけ感じていた。

「遼瀬 シア「酒がまずくていかんわ」

「カリンちゃんの命令で、文句一つ言われへん。」

ムットしていたが、目の前の応急処置が先と言うことで気合を入れる。

ホンとなら戦勝会にでようと思ってたが、絶対におもしろくない目に遭うことがわかっていたので、沙和と共に中継皆まで戻って応急処置の手伝いをすることにした。

「ホンマは一刀の料理にも興味があつたんやけどな」

「隊長は、料理も家事も得意なの」

「ええよなー、嫁にしたいわ」

「沙和も隊長は嫁にしたいの」

本当に北郷一刀は嫁向きだ。

料理洗濯掃除はもとより裁縫も得意ときは女の自分を疑いたくなる。

「ま、でも、いろいろと男って面がいいの」

「せやなあ、あれでもいろいろと男やしなあ。」

処置を受けていた第二の女子がぐぐつと顔を寄せる。

「おや、興味があるん？」

『ぜひ詳しく！』

「ええでーええでー、詳しくはなしたろ。」

「おまかせください」

ふらりと現れたのは風。

「ちょうどよいところに、泣かせるビデオが」

取り出したるは「桂花代の涙」と書かれたディスク。
うつわー、それ破棄されたんちゃうんか？

「・・・バックアップは必ず確保しているものですよ？」

「風チャンは恐ろしい子なのー」

「・・・ぐう」

「おい、起きや」

「・・・おお、あまりの酷い言いように、つい眠気が」

もちろん、みんなで楽しみました。

桂花、第二の人気もんやで。

「曹魏カリン」・・・ここはなんなの！？」

第二幹部を軟禁の上、施設を確認していた。

あれだけのピンハネをしていながら、校舎内は質素の一語に尽き

るものがあり、税の極みとは正反対の校舎だった。

料理を担当した一刀やルルの話でも、食材や保存品は他の生徒会と大して変わらないらしく、贅沢の贅の時も見あたらないと言う。

ならばピンハネされた物資はどこに行ったのだろうか？

そこで私は、春蘭・秋蘭・一刀を伴って校内探査をした。

一度の探査では見つからなかったが、ルルから厨房の奥からすきま風があるという話があり、そこから隠し戸があることがわかった。吹く風から海側につながっていることがわかっていたが、長い階段の先まで降りきって、私たちは言葉を失った。

そこは水の張られた洞窟で、遙か昔の中華船が数隻浮かんでいたから。

どこにも行けない巨大船舶。

これがピンハネの結果なの？

あきれるより驚愕の方が大きい私たちだったが、裏付けをとらねばならぬと乗り込んだ。

「北郷一刀……なんだろう、なんなんだろう、この胸の内は」

僕は奇妙な感覚を覚えていた。

それはあの階段を下りているときから感じていた感覚。

懐かしいようで、恐ろしいようで、消しがたい何かが、失い難い物を思わせる何かが胸の内側にいた。

視界が広がる先にあったそれを見て、まるでハンマーで殴られたかのような、そんな衝撃を覚えた。

な、なんなんだ、この木造船は！

見上げる先の船をみて、僕たちは絶句していた。

乗船して中身を調査してわかったのは、この船が「貯蔵庫」だと言うことだ。

飲食物や調味料、医薬品・工具・衣料品……。

莫大な量のそれはまるで、

「移民船のようね」

そう、まるで、生活を数年できるほどの量に思えた。
ただ、奇妙なことがある。

缶詰ばかりか単なるパック品の食料まであるのに腐っていないのだ。

「……こんな量の物資をどこからどこに持ち出そうというの？」

そう、ここは水があるとはいえ周囲を岩盤で囲まれた場所。
この大きな船たちをドコから持ち出そうというのか？

「とりあえず、船の搜索と周囲搜索に分かれましょう」

カリンの指示の元、僕と春ねえが周囲搜索、カリンと秋ねえが船の搜索を続行した。

何度調べても大きな出入り口などない。

僕らが降りてきた階段以外の口はなく、真上に穴があるだけだった。

たぶんどこか、海側のどこかに通じているのだろうけど、船が通れるような大きさではなかった。

なぜ、ここに船があるのか？

どうやって、この船を持ち出すのか？

なぜ、食料がこの船に積まれているのか？
どうして、彼女たちは……

「……一刀、一刀おおおおお！！！！」

カリン尾悲鳴が聞こえた。

「姉上！！ 一刀は一刀はそこにいるかぁ！！！！」

秋ねえの絶叫。

「なにを言ってる、一刀はここにいるぞぉ！！」

「……来てくれ、一刀を連れてきてくれ！！！！」

錯乱一歩手前の調子を、春ねえと共に不振に思いながら、僕らはカリンと秋ねえの元へ急いだ。

第一生徒会ルート 第四話（後書き）

はい、第四話でした。

実は、この後はつるべ落としです。

一気にアップしても良いかと思っていたのですが、校正する時間も欲しいということで、間隔をおきます。

おたのしみに。

第一生徒会ルート 第五話

第一生徒会ルート

第五話

「秋峰秋蘭」・・・錯乱できるものならしかった」

緊急集合かけられた第二幹部たちを前に、カリン様は冷静さを真持つの精一杯であった。

あの場所から一時間と経っていないのだから仕方ないだろう。

姉上もしつかりと一刀を抱きしめ、その存在が嘘じゃないことを確かめているかのようにだった。

わたしとて、私と手それを確かめずにいられず、彼の右手を離せないでいる。

「で、なんなのよお。まだ夜はあけてないんだけどお？」

孫呉雪蓮の言葉にカリン様の気配が変わる。

しかし、その激情を押さえ込んだようだ。

「孫呉雪蓮、及び第一生徒会幹部に問うわ・・・」

一度、ほんの一瞬言葉を着るカリン様。

このまま続けて言葉を発してしまえば、感情が先走ってしまう。それを押さえるために。

「あの、船の中の「あれ」は何あのかしら？」

思い出されるあの脱力感。

見た瞬間、私たちは全身から力が抜けた。

あの顔、あの髪。

瞳は閉じられていてわからないし、肢体は大きく違っていた。

筋肉の付き方もバラバランスも全く別人。

しかし、しかし私たちにはわかってしまった。

そこにいる人物が誰なのかを、全く冷気を感じさせずに立っている氷柱の中にいる人物が、誰なのかを。

「……一刀、一刀おおおおお！！！！」

なぜ、なぜなんだ！

姉上と共に探査していたはずの一刀が、なぜ氷柱に……。いや！？

「姉上！！ 一刀は一刀はそこにいるかあ！！！！」

そう、ここに一刀だけいると言うことは、姉上は無事。ならばと思い、

「……なにを言ってる、一刀はここにいるぞお！！」

安心、その言葉が胸の内にとる。

カリン様もようやく正気の色を戻す。

「……来てくれ、一刀を連れてきてくれ！！！！」

立ち上がる気力を取り戻した私は、カリン様に手をさしのべる。

「だいじょうぶ、よ、たてる、わ。」

言うほど大丈夫ではないことはわかる。

しかし、カリン様が立てると言うならば、私はそれをサポートするだけだ。

しばらく、ほんのしばらく体を震わせたカリン様だったが、何とか立ち上がる。

しかし、ふらつく体を押さえることができず、私を支えにせざるえなかった。

「・・・ごめんなさい、ちょっとだけ支えていてちょうだい。」

「・・・はい。」

カリン様と共に、氷柱の人物を観察していると、背後に現れた人影が絶叫する。

「な、なんだこれは!!」

駆け寄る姉上は氷柱を殴りつけたが、何の影響もでていない。

姉上の顔面は蒼白だったが、それ以上に、それ以上に一刀の表情が気になった。

振り向けばそこには、困惑を浮かべた一刀が棒立ちだった。

「一刀、あなたに兄弟は?」「・・・いないよ」

「一刀、あなたに従兄弟は?」「・・・いるけど、見た目は別人」

「一刀、この腕の傷に見覚えは?」「・・・わからない。」

深いため息のカリン様は、ずっと息を吸い身を奮い立たせる。

「一刀、上半身、脱いで」

「夏峰春蘭」・・・一刀。」

なにがどうなっているかわからない。

でも、あの不思議な氷の向こうにいたのは一刀で、北郷一刀で間違いなかった。

なぜとか、どうしてとかわからない。

でも、あそこにいたのは一刀だった。

今、私に抱きしめられている一刀と変わらない、いや、傷や怪我の跡が違うし、身長や筋肉の付き方が別人のようだけど、でもわかる。

カリン様も、秋蘭も、私もわかる。

あそこにいたのは一刀だった。

「春ねえ、くるしいよ。ちょっとゆるめて」

だめだ、だめだ！！

今離してしまっただけ、離してしまっただけ、あそこに行ってしまう、あそこに入ってしまう。

私にはわかる、私たちにはわかる。

だから秋蘭も一刀の手を離していないのだ。

「春蘭、ちょっとだけゆるめてあげて。一刀は窒息しそうよ」

あ、すみませんカリン様。
というか、一刀。

「北郷一刀「なにが起きてるんだ？」

会見の名を借りた事情聴取の場で、孫呉会長はちよつと驚いた顔。

「あら、もしかしてあれ見つけたの？」

まるでちよつとした隠し事が見つかったかのような顔。

「あの、船の中の「あれ」は何あのかしら？」

先ほどと同じ問い

とぼけることすら許さない、そんな気迫に満ちていた。

「……………」

無言で、ゆつくりと表情を固める孫呉雪蓮。

無表情に近いのに、それでいて透明な何かに支配された表情。

そう、それは、まるで、透明な狂気に。

「……わざわざ説明が必要かしら？あれが何なのか、その肌で感じたんでしょ？」

瞬間、カリンが総毛立つのを感じた。

「・・・答え合わせをしたいわけじゃないわ。答えなさい、孫呉雪蓮！……！」

裂帛の覇気を浴びせられた孫呉雪蓮は不敵に笑う。

「・・・ふふふ、結構楽しませてくれるわね・・・。」

がらりと雰囲気が変わる。

まずい、そう思った瞬間に走り出していた。
かなりまずい、非常にまずい！！

春ねえの腕の中から抜け出して、カリンの座るイスを引き倒して・
・・・

「……か、かずと……！」

カリンを、カリンを守るんだ！！！！

「孫呉雪蓮」……………あ。」

隠していたナイフは立食パーティーのときに手に入れた。

危機意識の薄いヤツらは、未だ勝敗を決められていないことに気づいていない。

本当なら、こんなバカなこととはしない。

また「ツギ」があるのだから。

しかし、見つけた。

可能性という砂漠の中で光る宝石を。

だから少しばかりの無茶だってできる。

ねらいは調印式だろう、そう思って早々と寝ていたところで、呼び出しがあった。

あいては曹巍カリン、春蘭、秋蘭、そして一刀。

彼らの顔色を見れば一目瞭然だ。

「あれ」を見つけたのだろう。

私たちの「・・・」を。

ちよつと意外だったのは、彼女たちもまた、あれが何かを瞬間的に悟っていることだ。

それだけで酷く不快に思う。

あれを一目でわかってしまう関係に。

「あの、船の中の「あれ」は何あのかしら？」

わかっているはずだ。

だが、理性がそれを認められないのだろう。

なんたる愚かしいことか。

だから私は答える。

「・・・わざわざ説明が必要かしら？あれが何なのか、その肌で感じたんでしょ？」

私にはわかるけど、あなたはわからないのかしら？

そんな私の問いに、曹巍カリンは覇気をみなぎらせる。

幼く稚拙な覇気だが、あの覇気を思い起こさせるものだった。瞬間、私の体に火が付いた。

付いてしまった。

「・・・ふふふ、結構楽しませてくれるわね・・・。」

隠していたナイフが滑る。
体が歌うように踊る。

突き出されたナイフが、曹魏カリンに・・・。

「「「か、かずと!!」「」」

一刀に吸い込まれ・・・・・・・・っ!!!

「・・・・・・・・あ。」

一刀の腕に吸い込まれた。
あの腕に。

「・・・・・・・・あ、あああああ。」

あの逞しかった腕に。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あああああああ！！！！」

私が、私が傷つけてしまった。

「かずとおおおおおおおお！！！！」

一刀が、一刀がまた、また死んじゃう！！
今度は私が、私が・・・・・・・・！！

「かずと、かずとかずと・・・・・・・・」

あふれる血潮を押さえ込む、腕周辺で止血する。
何でこんなに冷静二からだが動くのかわからなかった。

「いや、いや、いやだ、しないですらないで、しないで、かずとお・・・・・・・・」

言葉はだめ、思考もだめ、でも体は一刀を助けるために動いた。
二度目はない、二度とない、今この瞬間こそ・・・・。

さわ。

優しく私の頬がなでられる。

『・・・雪蓮、また泣いてるのか？』

あの声が聞こえる、あの言葉が聞こえる。

『泣き虫の王様だな』

その目、その声、間違いない、間違いないのよね？

『・・・雪蓮。おまえは兵を率いるんだろ？ 将だろ？ 王だろ？
泣くな。立ち上がれ。そして勝ってこい。・・・俺は待ってるか
ら。』

そういつて、そういつて死んだじゃない！！

『いいや、死なない、死んでたまるか。おまえを守って死んだなんて格好よすぎるから・・・な。』

一刀の手が私の頬から離れる。

いやだいやだいやだ、また、また私を残して、私たちを残して往
つてしまうの！？

「かずとおおおおおお！！！！！！」

「曹魏力リン」・・・意味不明ね」

イスごと引き倒されて凶刃から守られた。

手荒な手段に文句の一つでもいおうかと起きあがろうとしたところで、春蘭秋蘭が盾となった。

予想された第二刃は起きず、腕を刺された一刀を孫呉雪蓮が抱き起こしていた。

放心の孫呉雪蓮を、と一步前にでたところで春蘭が止めた。

「・・・・あ。」

「・・・・あ、あああああ。」

「・・・・・・あああああああ！！！！！」

「かずとおおおおおおおお！！！！！」

錯乱状態にも関わらず、見事な措置で止血や応急処置を始める孫呉雪蓮。

「かずと、かずとかずと・・・・・・」

「いや、いや、いやだ、しないですらないで、しななで、かずとお・・・・・・」

幼子のように泣きわめきながら、てきばきと処置する姿は滑稽で異常だった。

そんな中、一刀の手が孫呉雪蓮の頬をなでる。

ささやくように何かを言っているのだが、私たちには理解できなかった。

日本語ではない、別の国の言葉、そんな言葉。

小さくささやきあう二人だったが、しばらくすると、一刀の手が落ちる。

ゆっくりと、ゆっくりと、孫呉雪蓮の表情に狂気がともる。

顔色は白く、いや、青く。

数秒の空白の後、彼女は叫んだ。

「かずとおおおおおお！！！！！」

瞬間、周囲は光に呑み込まれた。

私たちが気づいたときには、第二生徒会本部がなくなり、地面をさらすだけになっていた。

校舎内にいた第三幹部及び第一幹部は全員無事元の敷地に投げ出されていた。

腕を刺された一刀も、一応は無事であった。

「・・・わけわからないわ。」

彼女たちは消えた。

一刀の腕の応急処置を残して。

「・・・意味不明よ」

一刀と彼女らになにがあったかはわからない。
でも、これだけは言える。

「私の一刀に手を出すんじゃないわよ」

その後、第二の幹部の消息が一切つかめなくなっていた。

傷の癒えた一刀の腕には、あの人物にそっくりの傷跡が付いていた。

第一生徒会ルート 第五話（後書き）

はい、どうにかこうにか5話です。

いかがでしたでしょうか？

謎の一端、更なる謎、というかぶっちゃけ確信の一端。

とはいえこの話も時間切れ。

あとはエンドロールと後片付け。

最後はやはり「謎あかし」。

最後のルートまで、おつきあいください。

第一生徒会ルート 第六話

第一生徒会ルート

第六話

「北郷一刀」・・・忙しすぎる」

毎日が忙しすぎた。

第二生徒会消失は本土も知ることとなり、あわやギブアップかと思いきや「第二生徒会再建」と「新生徒会長の選出」という二項目を実施するように言われただけだった。

事実上の黙認であることは間違いない。

ことは重大と言うことで第一と第三の幹部がこぞって選出に頭を痛めたのだが、カリンが「面倒ね、一刀。やりなさい」とか言い出した。

桃香さんまで「それはいいですね、一刀さんにしましょう」とか言い出した。

「いやほら、だって・・・なんで？」

僕の言葉を聞いて、心底不思議そうな顔のカリン。

「あら？ 私はやりなさいって言ってるのよ？」

うっわ、ドコの世紀末霸王ですか、あなたは。

「私は、一刀ならできると思って推薦してるのに、あなたは出来な
いって思ってるのね？　つまり、私の目が信じられないと？」

あー、あのー、カリンさん。

だんだんと怖いトーンになってますよね？

「・・・一刀、やるの？　死ぬの？」

・・・はい、やりまーす、うれしいなー、これからは「カリ
ン会長」「一刀会長」のなかですねー。

「なっ、・・・あなた、私を脅すつもり？」

え？　それってどういうこと？

「か、一刀は、私が「一刀会長」とか呼んでもイヤじゃないの！？」

あー、それはイヤかなー。うん、だから・・・

「これからは役職で呼ぶなんて事はやめるわ、いいわね、桃香。」

「はいはい、賛成ですよ、カリンさん、一刀君」

なんだかよく解らないうちに第二の生徒会長にされついまいまし
た。

とはいえ、幹部全員が行方不明、生徒会関係書類全部紛失という
巨大な緊急事態のため、事務関係をフォローしてくれる助っ人が結

構集まったのが助かる。

「お兄さん、そろそろ打ち合わせ時間ですよ」

「了解、風副長。」

「お兄さん、役職を呼ばない話しなのです」

「すまんすまん、じゃ、いこうか。」

事務中心と言うことで、そちらが強い程ヶ谷 風を第一から副長に迎えて何とかやっていた。

風はちびっ子ながら、僕の4倍は事務処理が早くて助かる。

「お、北郷遅かったな。」「そろそろやるぞ。」

第三からは馬場姉妹の姉、馬場翠さんと子雲星さん。

「おそいのです!! とつとと片づけるのです!!」

さらに、昔第二に所属していた元浪人学生 音宮ねね。

もう一人、布宮恋がきてくれたけど、事務には向いていないと言うことで、巡回してもらっている。

「それじゃ、本日も業務開始しましょう!」

「「「はい!」「」「」

「曹魏カリン」「まるで夢物語ね」

二ヶ月もすれば、どうにもこうにも流れというものが出来る。

第一や第三に避難していた生徒たちが、じわりと第二の敷地へ戻りだしたのだ。

来る者拒まずの第二は、今では「博愛」の第二とか言われているが、実際は試験成績の反映のための最低人員をそろえなければならぬだけなのは秘密だ。

前回の期末試験も好成績ながら、一步人員が足りなかったのだ、悔しかろう。

ともあれ、電気や電信のインフラなど全くそろっていない第二になぜ、という向きもあるが、その辺を越えて第二は活きやすい環境になりつつあることが要因だろう。

第二生徒会は、実のところ南洋校舎一番の革新集団になりつつあるのだ。

治安維持も巡回も学習意欲の維持についても、様々な役職を「クラブ活動」にしまったのだ。

たとえば、日々の巡回、たとえば困窮学生の救済、たとえば周辺施設の清掃等々。

本来は生徒会幹部が部下を連れてやるところを、「クラブ活動」が実施することにより、生徒の自主性と活動範囲の拡大をねらったのだ。

加えてこの「クラブ活動」は、活動自体に予算が配分され、実施毎に予算が配給される。

この予算で食事にあり付いてもいいし、本当に「クラブ活動」をしてもいいというわけだ。

勉強以外の活動の場合は、今のところ生徒会しかない南洋校舎には驚くべき変革であり、恐ろしい変革だった。

現状、第二にしかその場がないため、勉強以外の活躍を望む生徒たちは、そろそろと民族移動を開始しているというわけだ。

さすが作り直されたばかりの生徒会。

やることが大胆すぎる。

幹部たちでも「うちもやりますか？」という話はあるが、やめておいた方がいいだろう。

第一でそれが成功するというなら、今頃第一の生徒全員が第二に行ってるはずだ。

逆に第三は第二にないクラブを設立して生き残るだろう。

体育会系・文化系・生徒会、そんな住み分けになるように思える。

まさに天下三分の計、かしら？

「北郷一刀「この湯船だけは作りたい」

カリンの話を聞きに第一まできていた。

なにしろ第二は素人集団。

こう言うことに詳しい人が一杯居る第一に相談しようと言うことで、みんなで第一まできたんだけど、書類関係のスリ合わせがあると言われて、早々に僕は追い出されてしまった。

どうしようかなーと思っているところで、本日が大浴場に火が入る日だという事に気づいた。

聞いてみれば、すでに火は落としているけどまだ暖かいという。これ幸いとお邪魔することにした。

もちろん扉には「北郷中」のカードを指しておく。

いまだ、「北郷中」のカードがあつたのを嬉しいと思います。

いやーこのへんが、施設の第一と言われる所以だね。

インフラもそうだけど、この大露天風呂は他の生徒会にはない。うらやましい。

うちでも作りたいけど、風に怒られるだろうなー。

そんなことを思いながら湯船につかっていると、カラカラという戸の音。

え、え、え、まじ、まじ、まずい……。

誰か知らないではいつてきちゃった？

う、う、う、うわぁ……どうしよう……。

脳味噌が沸騰する勢いでパニックになっていると、その人がするりと僕の隣にはいつてきた。

「もう、一刀。何かたまってるのよ」

そりゃもちろん、カリンが隣にいるからですよ、はい。

「あら、結構初ね。……もしかして女の子って初めて？」

あ、あ、あ、当たり前です。僕はカリン一筋だったの。

「その割には、雪蓮と仲良さそうだったわよ？」

またです、またですよ、この何ヶ月もずっとそのネタを使ってきましたがね、僕には何の記憶もないし、なにも覚えていませんし、雪蓮さんなんてあの日初めてあっただけですし、カリンだけですから……！！

「へー、そう？」

ちよっとうれしそうなカリン。
だけど、意地悪そうな顔になる。

「じゃ、春蘭も秋蘭も眼中にないの？」

あーもー。この人は知ってて意地悪するー。

「・・・ふふふ、嫌いになった？」

僕はカリンの耳元でささやく。

「大好き、です」

二人ではいても余裕の露天風呂で、僕らは互いを抱き寄せた。この時間が、この時間だけがずっと続けばいいのに。そんなことを考えていた。

第一生徒会ルート 第六話（後書き）

あとは第一生徒会ルートのエピローグになります。

いくつかの拠点をこえて、最後のルートが幕あけます。

ご意見ご要望がございましたら、よろしくお願いします。

第一生徒会ルート エピローグ

第一生徒会ルート

エピローグ

）

南洋校舎第二生徒会幹部と校舎の消失は、本土の知るところになった。

様々な干渉や野次馬根性をたぎらせた愚か者たちが南洋校舎の寸前まで船でやってきたが、急遽設置された第二生徒会海上巡視部によって阻まれていた。

きわめて能動的に、きわめて連動性に高い海上機動は、海上自衛隊や海上保安庁からの注目も高く、卒業後の進路として考えてほしいとの連絡が止まない。

上陸への防衛も陸戦部なる組織が阻んでおり、今のところ上陸に成功したという強者の話は聞かない。

急遽、閉鎖性を高めた南洋校舎だが、その熱が冷めたかということそうではない。

消失した幹部の替わりに生徒会を切り回し散る人間が、かなりの有名人だったから。

北郷一刀

フレンチエス力唯一の男子生徒でありながら、南洋校舎へいくことを許された少年。

彼が治める「博愛」の生徒会を希望する生徒は引きも切らないと言う。

来る者を拒まず、そして第二ばかりか島全体を守るために腐心する「博愛」。

「覇」「徳」「博愛」三つの生徒会が治める南洋校舎を、目指すものたちがいる。

今も、これからも。

第一生徒会ルート エピローグ（後書き）

エピローグでした。

最後のルート、第二生徒会ルートはちょっとお時間を頂きます。

その間にいくつかの拠点構築をしますが、なにかご要望がありますか？

2010・06・25を締め切りに募集させていただきたいと思えます。

第一生徒会ルート 拠点フェイズ2

第一生徒会ルート

拠点フェイズ 2

「北郷一刀……奇人かな？」

ふらりとカリンが第二生徒会にやってきた。

曰く、「久しぶりに一刀の手料理が食べたいわ」とのことだった。春ねえも秋ねえも連れずにやってきたのは不審に感じたけれど、そういうこともあるだろうと思

って仕事を切り上げた。

思いのままに包丁を振るっている背後に現れたカリン。

「ね、『アレ』の話してもいい？」

いわずと知れた氷柱の「アレ」の話だろう。

僕が頷くと、カリンはオズオズと口を開いた。

「あのとき、従兄弟がいるっていたじゃない？ 私知らないんだけど？」

そりゃそうです。

僕だって、こっちに進学する寸前まで知らなかったし。

「・・・そういう事ってあるのね。」

まあ、一度会ってれば忘れないという意味ではカリンレベルに凄
い人だけど、カリンは貴人、あ

たちは「奇人」の部類だしなあ。

「・・・？」

背中でも感じて「疑問」の気配を感じたので、その辺の話は食事
を終えてから、ということにな

った。

食後のお茶を、と言う段になって、いつの間にか集まる第二幹部。
僕の過去に関わる話なら聞きたいらしい。

さあ話せ、と爛々とした瞳の星さんと翠さん。

興味なさそうにしながらも聞き耳を立ててる風。
まるで紙芝居を待っているかのような恋とねね。

そして、じっと待つカリン。

で、何故かいる桂花。

「って、桂花が何でいるんだよ？」

「カリン様のあるところ、私ありよー!!」

すげー、ストカーすげー。

「だ、だ、だれがストカーよー!!」

「桂花^{きみ}桂花^{きみ}。」

周囲の幹部も頷いてる。

「あら、こんなかわいいストーカーなら大歓迎よ?」

曰く、掃除洗濯はしてくれるわ、ゴミ捨ても分別もしてくれるわで、気にしなければ便利よ、と

のこと。

すげー、カリンすげー。

その懐の深さは犯罪クラスだ。

「そんなことより、その従兄弟の話しなさいよ」

べったりとカリンにしなだれかかる桂花の要望を聞き、ちょっと話す事にした。

その日であった零斗は、同い年だけど変な風格の有る男だった。子供っぽいところも有るといっ話だったけど、どちらかというとそれを演出している雰囲気だった。

た。

そんなことを指摘した途端、彼は大爆笑となり「なに、それ? どの厨²設定?」とかいって

いたけど、実際は引きつった笑みを隔すためだったんじゃないかと

考えていた。

直接会ったのはそのときだけだったけど、電話では何度か話す関係になっていた。

で、僕がフランチエスカに進学すると聞いた零斗は、しきりに羨ましがった。

『・・・だってよ、フランチエスカっていえば、あの元女子高だろ？』

「いまだって男子がないから殆どそうだけど？」

『くあああああああ！！！！　うらやましい！！！！！！』

「いやでもさ、今年あたり、入学資格を緩和するって話もあるし、男子がいっぱい入るかも、だよ

？」

『一刀、おまえ夢がねーな！。自分以外が全員女の花園で、選り取りみどりの状態だって考えてみ

ろよ？』

「経験上、気苦労の塊だよ」

『あのなあ、そりゃ、お前が一筋に思いこんでる「カリンさま」のこつたる？』

「・・・カリン相手に気苦労なんか無い！」

『あー、はいはい。ご馳走様』

「でもね、個人的には本校舎じゃなくて・・・。」

『南洋校舎だろ？　うわさは聞いているよ』

聖フランチエスカ学園南洋校舎。

それは小笠原諸島よりも南に位置する南洋最大の島にして最大の私有地。

学徒の天地にして可能性のパラダイス、となるはずの南の島。

『灼熱の太陽、南国ビーチ、覆い茂る木々つつか密林、謎の施設、はびこるゾンビ!!』

「はあ？」

『・・・いいよなー、南国ファッションのゾンビ美人!! 打ちたい放題やりたい放題!!』

「あの一、零斗・・・さん？」

『くはあーーーー!! 俺も行きたいゾンビパラダイス!!』

「そんな悪夢のような南国ねーよ!!」

その後は、「いつものように」ゾンビの魅力を熱々と語る零斗をつっこむ一刀というバカな関係

が続き、南洋校舎に旅立つ前まで続いた電話のやり取りだった。

『南洋ゾンビ美人を見つけたら、ぜひとも紹介してくれ!!』

というのが、決まり文句だった。

そんな話をしたところ、みんなやつぱりゲンナリしてる。

いや、桂花がガタガタ震えていた。

「あ、あ、あ、あんた、一刀!! なんて不気味悪い話したのよ!

」

「?」

肩をすくめた僕だったが、周囲の幹部は判ったようだ。

そこから始まる海＋南洋＋謎の施設に関する怪談は熾烈を極めた。

追記

ねねはぐんぽの話の時点で気絶していたそうです。

第一生徒会ルート 拠点フェイズ2（後書き）

ども、神代です。

今回は実験的に他のSSからキャラをゲストでカットインしていただきました。龍の骨さんサンクスです。

拠点につきましてはこんな感じで民マサンのご希望を細かく反映できれぱと思っています。

これからもよろしく願いします。

第二生徒会ルート プロローグ（前書き）

お待たせしました、南洋校舎正規ルートの最後の開始です。

できうる限りお待たせしないように連載をしたいと思いますので、
よろしく願います。

第二生徒会ルート プロローグ

第二生徒会ルート

プロローグ

）

輝かしいまでの日差しの中、彼女が苦笑いしてる。

だれもが知っている彼女の飄々とした表情ではない。

背負う重さを知っている、その重さをがんばってはねつけている、そんな顔だった。

「・・・・・・・・・・」

なにを言っているかわからなかったけど、僕は笑顔を浮かべた。

が、視界の端に何かが写る。

瞬間的に彼女を引き倒す。

焼けるような痛みが腕に走った。

「カズト!!!」

彼女が僕を呼ぶ。

だけど僕の意識は闇に飲まれていった。

それがいつも見る夢の内容。

彼女の顔も格好もわからないけど、彼女の声だけが頭に響いてる。
僕の名前、北郷一刀の名を呼ぶ声が。

あの声を思い出す。
あの声を。

)

第二生徒会ルート プロローグ（後書き）

プロローグなので、ちょっと短めです。

以降は一話五千文字前後に落ち着く予定です。

第二生徒会ルート 第一話

第二生徒会ルート

第一話

く北郷一刀

久しぶりにあの夢を見て飛び起きた。
わりと精神的に追いつめられると見る夢で、
忘れた頃に思い出したかのようなタイミングで「あの」夢をみる。

「・・・あ、一刀。起きたんだ。」

目を開けるとそこには少女が一人。
孫呉シャオレン、自称シャオだった。

「もう、こんなに若い奥さんが尽くしてあげるって言うのに、
なんで逃げるかなあ？」

そりゃ、口にギャグボールがまされて、全身くまなく縛り上げら
れている状況が続けば、普通逃げるさ。

「あー、もしかしてシャオに不満があるって言うのおー？」

無いわけがない。

毎日毎日突進してきて僕の体を打ちのめす行動にどんな好意をも

てつつんだ。

いまだって両手をベットに縛られて、猿ぐつわって、どんなシャイニングだったの。

「もう、贅沢なんだから。」

腕組みで怒りながら部屋を出ていく子供をみつ、荒縄で縛られた両手の関節をはずす。

すんごくいたかったけど、抜き出して、かなり泣きそうだったけど、無理矢理関節を入れて、ニギニギ。

・・・よし、ということで、猿ぐつわをはずして体を縛るロープもはずす。

結構な長さなので、ここが三階だろうと四階だろうと逃げ出せる。

よしよし、ということで、脱出劇の再開だ。

僕がすでに二桁回目の逃走が続いている。

ここ、第二生徒会本部は、数々の罠や待ち伏せが準備されていたけれど、あの「村」のアルティメット鬼ごっこに比べれば、お遊戯程度のものでしかない。

だから、倉庫から食料や道具を持ち出して、長期戦を目的とした逃走を繰り返しているんだけど、一定の場所を越えとなぜか捕まってしまう。

どんなに抜いても、どんなに回り込んでも、必ず孫呉雪蓮が現れて、僕を捕まえてゆくんだ。

捕縛率100%は恐ろしすぎる。

そんなわけで、今回も逃げたわけだけど、一応、ルートを変えた。今までの動きなら、三階のこの窓からロープでしたまで降りて森

の中に潜みつつ逃走というパターンだけど、捕縛率がなぜ高いかを調べるために、わざわざ屋根の上に潜んでみた。

「あー！ー！！ 一刀また逃げたあ！！！！」

「もう、シャオ！ 見張り一つできないの！？」

「お姉さまを呼びにいっただけよ！！」

シャオとレンファ登場。

「ならばものの五分ほどで抜け出したか・・・。」

「窓みてください、ロープ！！」

「ふむ、窓から逃走、森に一直線、か？」

メイリン、ミンメイ。

よしよし、いい具合に攪乱できてるな。

「・・・お待ちください。普通の人間が、そのような行動が可能でしょうか？」

「アーシャ。そうはいうが、手加減中でも雪蓮と打ち合う人間だぞ？」

アーシェの言葉に祭先生がツツコミ。

・・・って、あれで手加減してんのかよ！！

人間か、あいつ？

「ごちゃごちゃうるさいわねー。あたしがここにいるって事をよく考えなさい？」

雪蓮の一言に、周囲が唖る。
ん？どういうこと？

そんな疑問の僕の目の前に、突然現れる雪蓮。

「ふっふふ、やっぱり一刀って面白い」

僕は屋根の上での乱闘を諦めておとなしく捕まった。
今度は鉄格子のある部屋に入れられてしまった。

く孫呉雪蓮

学園の新生生輸送船から奪ってきた「北郷一刀」は想像と予想を
超えた逸材だった。

衆人環視の中逃げ出すこと12回。

夜間に逃げ出すこと8回。

縛り上げられた状態から逃げ出すこと22回。

面白すぎる少年だった。

本当に「北郷一刀」なのか疑問に感じるほどだったけど、瞳が、
雰囲気、心が同じだった。

あれだけの力の差を見せつけても、あれだけの殺気をぶつけても、
彼はにこやかに微笑むだけなのが「変わらない」。変わってない。
それがうれしすぎた。

「しかし、未だ兆しなし、か。」

冥林の懸念もわかるけど、私やレンファ、そしてシャオは、一刀
とじゃれあうことができるのがうれしいばかりだった。

彼自身は何の記憶が無くてもいい。

でも、私たちの心が、喜びで悲鳴を上げている。

「姉様、御蔵船の氷柱に反応が・・・」

かけあがつてきたレンファに私は肯く。

「また、夢を見ているのだな。」

「ええ。」

いつの、どんな夢を見ているかは知らない。

しかし、一刀の見ている夢が、安らかなものであることを心から
祈る私、私たちだった。

）

目覚めればそこは夢の中だった。

明確に夢の中で目覚めた意識がある状態。

明晰夢、だっただろうか？

夢の中で僕は、体中がしびれるような、体中が焼け付くような、
そんな状態なのがある。

瞳の中に写る誰もが涙を流している。

すがりつくのは、

「***、***!!」

泣きながらすがりつく彼女の頭を撫でる。

部屋の入り口で歯を食いしばる**。

滂沱の涙を流しながらも立ち尽くす**。

ああ、マズい、みんなを泣かせてる。

そんなつもりはなかったのに。

でもまあいい、***を守れたんだから。

「一刀おおおおお!!」

）

く北郷一刀

独房の割にはベットが豪華だな、と思う。

とはいえ、ここのところ毎日いろんな目を見るんだけど、なぜかみんなが泣いている。

このみんなというのがクセモノで、人の顔だとわかるのに誰の顔か認識ができないという中途半端さ。

どこかで、すごく深く関わりがあるはずなのに思い出せない、いや、認識できない。

直接見ているのに、見ているはずなのに・・・。

「かーずと、げんき？」

格子の向こうではシャオがにこやかに手を振ってる。

「こんなところに閉じこめられてなければ、ね。」

「だって、一刀つてば逃げるんだもの。」

「そりゃ逃げるでしょ。」

生徒輸送船から誘拐されたんだから。

「こーんなにみんなに愛されて、シャオの旦那様にもなれるのに、なーんで逃げるかなあ〜？」

「・・・よくわかんないんだよ、君たちが」

そう、よくわからないのだ。

第二生徒会と呼ばれる集団の幹部は、なぜか僕に優しい。

微笑みかけてきたり、笑顔を見せてくれたり、優しく抱きしめてくれたり。

なんというか、勘違いしてしまいそうぐらい優しいのだ。

そんな中でも、シャオなんかはベツタリだし、レンファもなんだか好意を寄せてくれている感じがする。

そう、その辺の感覚が鈍いんで確証はないんだけど。

だけど、何でこんなにも好意を持たれているのかわからない。なんでこんなにも優しくしてくれるのかわからない。

そして、なんで閉じこめられているのかわからない。

そう、何もわからないんだ。

「・・・そんなの気にしないでいいんだよ。一刀は一刀。シャオが大好きな人。それじゃだめなの？」

「じゃあ、なんで僕のこと好きなの？ シャオ」

瞬間、ちよつと悲しそうな顔のシャオ。
それでも太陽のような笑顔に戻る。

「シャオはね、一刀が一刀だから大好きなんだよ?」

くるりと身を翻してその場を去るシャオ。

「・・・わからないよ、シャオ。俺には・・・」

冥林

聞けば、北郷は独房で毎日うなされているという。

さすがに「御蔵船」に近いせいか、影響が大きいのだろう。

この島に来る前から「あのときの夢」は見ていたそうだから、ここ数日の夢見で近づいていることは間違いないだろう。

「でも、脱走しなくなったのはつまんなーい。」

さすがに独房からの脱出はうまくいかないだろう。

どこぞのコミックヒーローじゃあるまいし。

「でもでも、一刀ならやってくれると思うんだけどなあー」

まあ、初めてあつて思ったのは、体つきも判断力も恐ろしいレベルの高さだという事がわかるぐらいだったし、逃走に次ぐ逃走は雪蓮なしに追うことすら難しい勢いだった。

我々ですら追えない一刀を雪蓮は確実に追いつめて叩き伏せ、捕

縛っていた。

その武は、かの地で見せた片鱗が現れており、その力を使えることを喜びとしているようだった。

さすがにこの地の敵に、武を唱えることなどできないのだから。

「あーあ、一刀、脱走しないかなー」

まるで子供のようにムクレる雪蓮。

しかし、私は、今の喜びよりも礎を望んでしまう愚かな女だ。

「とはいえ、これだけ捕まれば、かの南蛮大王とて根を上げるぞ」

「そこが一刀の良いところじゃない」

きやーとかいって自分の体を抱きしめる雪蓮。

・・・やはりベタばれだが、狂気は少ない。

いい影響ばかりだな、北郷。

く北郷一刀

とりあえず、逃げ出しました。

独房に入れられてるし、監視されてるけど、逆になぜか不満が少なくなっていることに疑問を感じている。

少なくとも、自由の阻害なんつつ暴拳が一番許せないはずなのに、そんな心の動きを怪しく思い、逆行動、むりやり逃げてみると、ここ数日脱走しなかったせい、警備が緩い。

倉庫の警備なんてしてなくて、門の前もガラガラだから、いろいろ

ると持ち出してしまった。

食料やら道具やら。

そんなこんなで森の脱出なのです、ええ。

つつか、こんなしゃべりかたしてたっけ、俺。

く孫呉蓮華

一刀が最近うなされているという。

それは間違いなく「御蔵船」の影響だろう。

あの船の「あれ」が一刀にどんな影響を与えているのか、本当の意味で知っている人間はいない。

だけど、最近、一刀の視線が優しくなっているのを私たちは感じてる。

毎日挑戦的で抗戦的で敵意に満ちていた視線が、柔らかなものになっっているのを心地よく感じてる。

昨日も食事を持っていったら、

「・・・ありがとう、蓮華」

名前で呼んでくれた。

名前で呼んでくれたのよ、一刀が！

心が浮き立ち舞い上がるのを感じる。

ああ、今日も一刀の声が聞けるんだ。

そう思っただ独房の前まできて、

「・・・いない」

いない。

一刀がない。

またいない、目の前にいない、またいない、姿も形もない・・・。

「かずと、かずと？・・・か・・・」

かずと――――！！！！！！

く北郷一刀

まるで胸の内側がえぐられるかのような絶叫が背後から聞こえた。なんだろう、まるで精神がつぶされるような、心が壊れるかのような、そんな声だ。

あまりの声の悲しさに、両足の力が萎える。いや、本当に力が抜けてしまった。

「あら、そこにいるのは、一刀さま？」

やばい、ミンメイに見つかってしまった。

「こんなに食べ物を持ち出して・・・」

てきぱきと倉庫に食料が戻される。

「ほらほら、ご飯はまだですよ」

そついいながら力の抜けた俺を担ぐミンメイ。
思いの外力持ちだね、君。

「あれー、蓮華様。どうなさったんですか？」

見ればそこには大量の涙を流して座り込む蓮華。
その姿を見た瞬間、力が戻った。

ミンメイの肩から降りて、蓮華の肩に手をかける。

「・・・か・・・かずと？」

俺がうなづくと、子供のような笑顔を浮かべて抱きつく蓮華。

「か・・・かず・・・とお・・・、もういなくなっちゃいやだよお・・・
きえないですよ・・・しなないですよ・・・」

子供のように泣く蓮華を抱きしめながら、なんだか絡めとられて
しまったかのような虚脱感を感じる俺だった。

く孫呉シャオ

一刀と遊ぼうかと思ったのに、蓮華ねえさまが独房の中まで入り
込んで一刀を抱きしめてた。

なんでも、おなかの空いた一刀が、どうやってかは知らないけど、
独房から勝手にでて倉庫に行ってたそうだ。

それを知らなかった蓮華ねえさまは、「また」一刀がいなくなっ

たと勘違いして錯乱してしまったそうだ。

たぶんあの時から、私たちの孫呉は狂ってしまったんだろうなあ、
って思う。

雪蓮ねえさまは狂気に走り、蓮華ねえさまは悲嘆に狂い、私は日
常に狂喜した。

そんな国がいつまでも続くはずもなく、あれほどの隆盛を誇った
国も……。

私たちはあり得ない光明をつかむためにここにいるんだ。その一
点を支える一刀には申し訳ないけど、私たちの心をここまでつかん
だ責任はとらせないといけない。

絶対に逃がさないんだから。

く北郷一刀

泣きつかれた蓮華を腕の中においたまま、独房のベットに戻った
俺は、どうしたものかと悩んでいた。

蓮華はそのまま寝てしまったし、独房の入り口をのぞきにくる人
たちは「ニヤニヤ」してるし。

「……もお、つぎはあたしだからね？」と雪蓮。

「……正妻はシャオなんだからね。」とシャオ。

……なんだろう、本当に。

こんな可愛い女の子を抱きしめているのに、ドキドキするどころ

か「安心」している自分がいる。

泣きつかれた蓮華の顔を優しく縫うっている自分に違和感を感じなかった。

そんな違和感を感じない自分に戸惑っていた。

・・・本当にわからない。

なのに、心が凪いでいる。

スタイルバツグンの美少女を抱きしめてるのに、劣情が・・・・・・いや、全くない訳じゃないよう？

でも、我慢ができる範囲ってというのが変だし。

・・・うん、へんだ。

俺はどうなったんだろう・・・・。

あれ？

おれ？

自分のこと、おれ、なんて呼んでたっけ？

第二生徒会ルート 第一話（後書き）

一応、第二生徒会ルートは7月中までに終了する予定です。

お付き合いいただければ幸いです

7/3 誤字の修正を行いました。ご協力感謝です。

第二生徒会ルート 第二話

第二生徒会ルート

第二話

く 孫呉蓮華

身を寄せた相手に鼓動がある。

身を寄せた相手に暖かさがある。

身を寄せた相手に呼吸がある。

それだけで私は泣きそうになった。

それだけで私は崩れ落ちそうになった。

私は彼にすがりついた。

私は彼を抱きしめた。

私は彼に溺れていた。

目覚めても彼が消えない感動は、なににも代え難い感動であり、

この幸せを得るために乗り越えた苦行など塵に等しい。

ちよつと汗ばんだ彼の胸に頬を寄せる。

「ねえ、蓮華、汗で汚いよ」

それでも私は彼の胸に顔を埋めた。

「一刀……。」

彼の鼓動も、彼の体温も、彼の汗も、全部私たちのものだ。
なぜならば、彼こそが私たちを真の意味で……

「……あー、もー、逃げないからちよつと離れる。俺も汗くさいの嗅がれるの、いやなんだつてば。」

強引に私を引きはがす手もイヤじゃない。

ああ、私は変態になってしまったのかもしれない。

く北郷一刀

不満たらたら蓮華を伴って、風呂まできた。

つつか、入ってくるなよ、と釘を差すと、今まさに脱ごうとしていた蓮華が驚きの顔。

散々にグズる蓮華をなだめつつ、どうにか短時間のシャワーでてくることで了解させた。

「私も汗を流すから、まってね？」

言外、いなくなったら死んでやる、的な陰を感じるのが恐ろしい。
なんでここまでデレられてる、俺。

病む寸前だしなあ。

何か変なフラグたててるみたいだなあ、と首をひねる。

「あら、一刀。なにしてんの？」

現れたのは暴風生徒会長、孫呉雪蓮。

「・・・いま、失礼なこと考えなかった？」

ぶんぶんと首を振る俺に「まあいいけど」と笑う。

「で、なに？ のぞき？ のぞきなだね？」

きーめーっけーるーなー。

とりあえず、なんかフラグたちっぱなし状態の蓮華にここにいるようにいわれている旨はなすと、ぷぷつと笑う雪蓮。

「なーに？ 一刀ってばヘタレ？」

ヘタレいうな！

なんでもかんでも食っちゃって、未婚の母とか父とか責任とりきれないでしようが！？

きょんとした雪蓮だったが、深みのある笑みを浮かべる。

「それって、責任とってくれるってこと？」

俺は胸に手を当てて、反対側の手を挙げる。

「そんぐらいの気持ちでしか出来ないだろ？そついう事って。」

ふうーん、とうれしそうに関して、その上で、

「やっぱりのぞきなさいよ、相手は蓮華でしょ？」

あのなー！！！！

「蓮華も望んでるし」

もー！！！！

「怒らない怒らない。モテモテなのよ？ 一刀」

・・・ああああ、もう、かなわないなーこの人には。

もちろん覗くことなく待っていた俺に、蓮華に加えた雪蓮がひっついて独房までの道筋をいくことになった。

なんだかなあ、もう。

よく解らない安心感が胸の内に満たされる。
本当に奇妙だと思う俺だった。

く冥林

久しぶりに一刀が逃走した。

いや、蓮華に取り乱し様がないところを見ると、どうも蓮華を取り込んで言いくるめたようだ。

雪蓮は納得しなかったのだろう、全面抗戦の上での逃走らしい。

私たちもその後を追ったが、遅すぎたことに気づいた。

二人の交戦が絶対守備範囲を超えていたのだ。

「まずいな、ノン。配下周囲を取り囲ませてくれ。」

「わかりました。」

「思春、遅いかもしれんが、一刀の接触は・・・。」

「・・・解っております」

皆が走り抜ける中、私は二人を発見した。
見る限り、本当に遅すぎたらしい。

力なくブラブラとさせた両腕、だけど強い意志の力を感じる瞳の
一刀。

そして、一刀の強い抵抗に理性の半分をとばされて狂気の喜びに
浸りつつある雪蓮。

「ふふふふふ、おとなしくなさい、かーずーとおおおおお！！
！！」

渾身とも見とれる蹴りを交わしつつ距離をとる一刀。

「・・・答える、雪蓮。・・・この生徒はなぜあんな様子だった
！？」

まるで舞うように蹴りを繰り出す一刀だったが、雪蓮に通じるわ
けもなく、軽くあしらわれる。

しかし、その動きでさえうれしそうだった。

「あら、解らなかったの？ 庶人は生かさず殺さず、為政者の義務
よ？」

拳と足を旋風のように一刀にたたき込みつつ微笑む雪蓮。

「・・・生かさず殺さず？」

細かくよけていた一刀が、まるで大地に根ざした巨木がごとくに
雪蓮の攻撃を受け止めた。

その目には怒り、その目には悲しみ、その目には・・・

「・・・雪蓮、おまえの孫呉は、おまえの守るべき民は、そんな扱いを望んでいたかあ！！！！！！！！」

瞬間、私は凍り付いた。

いや、私たちは凍り付いた。

いま、一刀はなんといったのか？

今、一刀は・・・。

真っ白に燃え上がる私たちの心の内。

視界の中で一刀が崩れ落ちるまで、誰も動けなかった。

）

事件はすでに起きていた。

事の起こりは生徒輸送船から生徒が強奪されたことだ。

犯人は第二生徒会。

不可侵を貫かせる謎の生徒会だった。

それが生徒輸送中の船から、一人の生徒を強奪した。

その名も「北郷一刀」。

今年度までで唯一の男子生徒であり、唯一南洋校舎へ入校を許された逸材。

どの生徒会がとるか、密かに注目もされていた。

機会は均衡にということで港から出るまで接触を禁じていたわけだが、すっぱ抜かれた形となった。

「私たちの飯ストを救ってください！！」

北郷一刀と一緒に船に乗ってきた新入生たちが頭を下げるが、第一生徒会も第三生徒会も動けなかった。

来る中間試験に向けて新入生の学力調整をしないことには他の生徒会への干渉をするほどの余裕などなかったから。

まずは自分たちの足固めからしなければならぬことを説明する各生徒会に、新入生たちの支持は暴落していた。

浪人学生という制度上の抜け道を知った生徒の一部が、自ら生徒会に身を預けずに浪人学生となる道を選んだ。

現生徒会に「覇」なし「徳」なしと詠う三人に追従した数名が離反したただだが、それは後々の禍根となるのは明白だった。

何とか説得しようとした各生徒会幹部だったが、彼女たちの意志は強く、鬱蒼と茂る森の中へ消える姿を止めることは出来なかった。

第一・第三生徒会にとっては迷惑な話だった。

第二生徒会の暴挙を阻止できなかった、さらには対抗出来ないと言われているだけだったから。

実際のところ、学園法規上生徒会同士の抗争は禁じられているし、現場を押さえているのが生徒会役員でない以上、手の打ちようがないのが事実なのだ。

基本、亀のように身を縮めて情報すらも出さない第二生徒会。接点がなければ交渉すら出来ないのだ。

そう、全く交渉の糸口すらつかめずに、中間試験を迎えることになったのだった。

）

く北郷一刀

再び明晰夢、なんだろうと思う。

先ほど見た光景がひどすぎて、脳味噌に焼き付いて夢に見ているのだろうと。

やせて体をふるわせる生徒たち。

一声かけてもおびえて逃げる有様。

なにが起きているかすら理解できない様子で、瞳に光が失われていた。

「ご、ごめんなさいごめんなさい、もっとせいせきをあげますしけんもいいてんとります……」

誰もが何かにおびえていた。

いや、誤魔化すのをやめよう。

明らかに怯えていたのだ、第二生徒会を。

俺は走り回った。

まるで難民キャンプか奴隷商人の小屋のような有様を目に納めるために。

俺は走った。

森の各所に散りばめた脱出道具の確認をするために。

そして対峙して問う。

雪蓮に、この生徒会の長に。

「……答える、雪蓮。……この生徒はなぜあんな様子だった!?」

答えは非常そのものだった。
だから俺は切れた。

だってそうじゃないか！

あれだけ民を愛し、国を愛し、すべてを守ろうとした雪蓮が！！

思い出す風景、思い出す情景。

次々と浮かぶそれは、今まで見たことも聞いたこともないものばかり。

けどわかる、そこにいるのが「彼女」なのだと。

「・・・雪蓮、おまえの孫呉は、おまえの守るべき民は、そんな扱いを望んでいたかぁ！！！！！！！！？」

王たる者の重みと力のあり方を知る雪蓮。

君がそんなことをいうなど許せるはずもない！！

『そうだ、雪蓮。おまえはすてきな王様になるんだろ？』

く 孫呉雪蓮

私は泣いていた。

私たちは泣き崩れていた。

私たちが待っていた瞬間がそこにあつたから。

『そうだ、雪蓮。おまえはすてきな王様になるんだろ？』

寢言で囁くように言う一刀の言葉。

それは私たちのよく知る「言葉」だった。
いや、私たちとともにあった「言語」だった。

『かずと、一刀は帰ってきてくれたの？』

『・・・まだ安心は出来ません。ですが、もうすぐでしょう』

蓮華と思春が寄り添っていた。

穂とシンメイが、シャオと祭が寄り添って一刀を見つめている。

みんなが望んだ、みんなが待ち望んだ。

艱難辛苦の末のこの瞬間。

今はまだその瞬間ではないだろう。

でも、間違いないのだ。

間違っていないかったのだ。

疑ったときもあった、絶望したときもあった。

それでもこれしかないと思ち上がり、そして進んできた。そして
たどり着いた。

『そうね、たどり着いたのよ、ね』

『そうだな、それも大いに時間を残して、だ。』

これほどの曙光は二度と無いだろう。
私たちはこの瞬間にすべてをかける。
すべてを。

）

浪人学生を纏める事に成功していた楽進凧は、その意志が強い人間たちと会合を持つことにした。

彼女たち自身も南洋校舎のあり方に疑問を持っており、限られた人間による陣取り合戦以下の馴れ合いに辟易としていたそうだ。

無論、直接的な暴力を盲信しているわけではない。

しかし、ルールに縛られて出来ることをしないのでは本末転倒だと凧が訴えると、会場は歓声を上げた。

「とはいえ、大本は『男を助ける』んだろ？」

混ぜっ返しの言葉に爆笑が渦巻くが、凧は笑顔で答えた。

「それになんの問題が？」

その言葉に再び爆笑が渦巻く。

目的もなく、ただ無為な時間を過ごしていたはずの浪人学生たちが、一つの勢力として纏まった瞬間だった。

）

第二生徒会ルート 第二話（後書き）

えー、第二話です。

なんとなくですが、第二の人たちが走りすぎて、まったく周辺が追いついていません。

いやー、こえー。キャラ暴走。

第二生徒会ルート 第三話

第二生徒会ルート

第三話

く曹魏カリン

中間試験の結果は散々だった。

やはり中庸学力層の新生入生に注力できなかったことに原因があるだろう。

第三も結果としては散々で、第二も含めた全生徒会の成績は60点台でしかなかった。

これは補給物資や嗜好品が軒並み減量されるラインであり、せめてうちだけでも越えなければならぬ成績ラインだったが、越えることが出来なかった。

やはり、あの件が響いてる、わね。

新生入生の一部が三生徒会に加わらず浪人学生になったことは有名な。

さらにはその新生入生たちが浪人学生を纏め、一大勢力を築いているという情報もある。

基本、補給のない浪人学生に生活を支える手はないのだが、それなりに生活しているというのだから解らない。

幹部の分析でも詳細不明、仔細調査中という状態がもどかしい。

「カリン様、お耳を」

・・・？

私は桂花の言葉に耳を寄せる。

く 北郷一刀

目覚めると誰かを抱きしめてる生活に慣れ始めている北郷一刀です。

けっして責任のとれないような行為には至っていませんが、身の潔白を訴えるには些かまずい状況です。

まず、男性の朝の生理現象が発生しており、わたくし北郷一刀の腕の中で寝ていた雪蓮が、興味深そうにいじるんですよ、ええ！あれはですね、放っておけば収まるたぐいのものじゃないですか！それをワザワザいじりますかねえ！？

正直、限界まできたので逃げ出したんですが、その姿を何人もの幹部な人達に見られてしまい、恥ずかしいやらなんやらもう。

トイレから出てきた俺を、舞ってましたとばかりに取り囲む孫呉姉妹。

キヤイキヤイと盛り上がってくれるのはうれしいけど、そろそろ道をあけてほしいなー、パンツ一丁なのですよ、俺。

赤くなってみせる蓮華はかわいいけど、雪蓮とシャオは興味津々だったりする。

「ねえ一刀。結構筋肉質よね、あなた」

「そうそう、一刀のからだって、けっこうゴシゴシよね」
「……（ぽ）」

結果としてペタペタ俺の体の品評会。

「なんじゃ、まるで奴隷市場のような情景は。」

苦笑いの祭先生だが、品評会には参加らしい。

「ふむ、北郷。よく締まった体じゃな。」

「でしょでしょ？一刀ったらシャオのために……。」

「うんうん、これならば夜の生活も……。」

「もう、祭ったら……でも、うれしいかな。」

「一刀一刀、試合しよ、ね？」

こんな日常に流されている俺だが、先日情景を忘れたわけではない。

ただ、目覚めたそのときにはすでに「彼女たちを信じる」気持ち
が固まってしまっていただけだった。

思いこみだと解ってる。

でも、この心の底から沸き上がる確信は嘘じゃないことも解って
しまってる。

「あー、ところで、みなさん。」

そろそろ道あけません？

）

彼女たちの活動は、信じられないほど順調だった。

はじめに不足するであろう予定だった食料や物資が、第二生徒会領地の森の中に点在していたからだ。

腐りにくいものや保存性のよいものがこっそりと。

加えて、森の中自体が食べ物の宝庫だったので、植えること自体があり得ない状態だった。

風は食に関するそのへんの事情に明るく、サバイバルな状態での活動に意欲的だった。

周辺の人間も三日もするうちに慣れてしまい、放棄された校舎を改造して生活空間を確保していった。

どんな環境でも生きることには苦労しない女、それが楽進風と言う女であった。

加えて真桜の生活環境改造、沙和の生活環境維持活動は日に日に向上を見せ、密林ジャングル暮らしが加速度的に田舎暮らし程度までレベルをあげてゆく。

ついてきた少女たちや周辺浪人学生たちも、生活レベルの向上という施策に熱中し、暴走していった。

面白いことがあると暴走してしまう、それは仕方ないことなのかもしれない。

だって、面白いのだから。

そんな中、風は第二生徒会の所属の学生たちが合流していることに気づいた。

こっそりと、ばれないように入り込んでいるが、その見た目の悪さ、というか栄養状態の悪さをみれば一目瞭然といえた。

いや、彼女が目にしたのは、その姿勢だった。

受動的で後ろ向きで、そして無気力で。

この南洋校舎まで来れたとは思えない有様は、疑問よりも怒りを
感じるものだった。

だから、実直に怒りをぶつけた。

前を向いたら全力疾走、崖に落ちたつて前を向いている女、それ
が楽進 凧という女だった。

怒りをぶつけられた第二生徒会一般学生は、おびえと諦観と残念
にまみれていた。

いわば心を折られていたのだ。

逃げることもできず、さりとて他の生徒会に移る力もなく、浪人
学生となる勇気もなく、ただ、少ない配給を受けて生きているだけ
だった。

力があるのなら、助けてほしい。

食料があるなら分けてほしい。

そんな泣き言を聞いて、第二生徒会の処置が処置の理由が分かっ
た気がした。

つまり、そういうことなのだ。

自分で切り開くことが無く、自らで得るわけでもなく、そして環
境を切り開くこともない。

ただ寄生するだけの、そんな存在を「絆」を謳う生徒会が欲する
だろうか？

互いに支えあえるような、そんな関係じゃなければ意味がない。
故の処理だと、凧は看破した。

だから、第二生徒会の行動様式の一端に触れている気がした。

力あるものよその力を示せ、力持つものよ、その力で切り開け。

苛烈にして熱烈なる想い。

正面から受けていれば、私はその思いに共感しただろうと、凧は心の底から感じていた。

）

）思春

ミンメイの調査から、第二生徒会の領内ぎりぎりの廃校舎で生活を始めた手勢がいるとの報告を受けた。

自分たちで水を引き、校舎を清掃し、整地をし、周辺伐採をし、とかなり手慣れた様子であつたとのことだ。

私は蓮華様に調査する旨を断り、早速現地に向かった。

廃校舎周辺には簡単な「鳴子」や監視小屋などが造られており、危機意識は十分な様子だ。

さらには、手荒い場、水浴び場なども作られており、衛生管理を十二分に意識している。

食材の乾燥、保管なども実施している様子から、長期生活を主眼においた活動をしているのが分かる。

「ミンメイ、ここの主塊は分かっているか？」

「はい。新入生の楽進 凧という生徒です。」

聞けば、一度も生徒会に属することなく森に入り、浪人学生たちを纏めあげて旗揚げしたという。

まるで劉備の義勇軍だな、と笑うと、ミンメイも苦笑だった。

「……じつは、彼女たち、一刀さんの飯ストだったんですよ。」
「……ふむ、なるほど」

港で降り立ったところで、北郷一刀誘拐の事実と解放への力添えを頼んだが、断られて出奔、か。
流れとしては稚拙だが、少なくともそれを現実のものにできる力を持っているのが好ましい。

「実に骨がある。好ましいな。」
「そうですね。それに比べて……。」

廃校舎の脇に小屋があり、そこにそろそろと並ぶ人影が見える。
そこでは少量ながら配給をしているそうで、その配給につられて第二の生徒が集まってきているそうだ。

なにもせず、なにも作らず、なにも行わない。
ただ生きているだけの存在に何の価値があるうか。

「一刀さんや、楽進さんを見ると、人それぞれなのは分かりますけど、第二はちょっとダメツコが集まりすぎですねえ。」
「……いうな。それでも民草を導く役目があるのだ。」

それがたとえ永遠でなくても。

曹魏力リン会長からの面談が申し入れられたのは昨日のことだった。

面談場所は第三生徒会本部。

まるで自分の居城にいるかのような様子は、王者としての風格を
持っているように見える。

とはいえ私も弱小ながら生徒会会長。
胸を張らざる得ません。

きゅつと胸を張ると、なぜかちよつと視線をはずす曹魏会長。
なんででしょう？

それはさておき、議題はすでに確認しあっている。
お互いの会計が話を詰めているからだ。

「・・・で、劉蜀会長。あなたはどうかしら？」

「私は賛成できません」

曹魏会長の提案は実に魅力的だった。

しかし、私は即答した。

現在のところ、曹魏会長の提案は魅力的で必要性も有用性も認め
るところだけど、やってはいけない事だったから。

「理由を聞いてもいいかしら？」

「理由はいくつかありますが、なんら正統性もなく『第二生徒会解
体』を実行してしまえば、生徒会が独自に三つある理由がなくなり
ます。また、同じ理由であらゆる組織の解体を実行できる前例を作
ることになります。それは吞めません」

「・・・まったく、今の第二の施行してる内容は知ってるのよね？」
「それでも、その待遇に甘んじ、助けも呼べないほどではありません
ん。」

ふう、と深い溜息の曹魏会長。

「腹を割るけどね、あたしは第二のやり方は嫌いな。」

「第三のやり方も嫌いだとお聞きしてますよ？」

「腹の探り合いはやめて。」

私も姿勢を正します。

「相手のやり方が気に入らないからといって解体では、子供の喧嘩
いかです。明確な理由を示してください」

そう、私は解体に賛成できない。

その私の意見を翻らせようというのだから、利ではない「徳」を
刺激する説明をしなければならぬのだ。

「・・・未確認情報よ。」

そういつて切り出したのは北郷一刀君のことだった。

彼は誘拐されてから何度も脱走を繰り返していて、その度に孫呉
雪蓮会長に取り押さえられているそうだ。

最近では猛烈な乱闘になり、ボコボコにされて回収されたとか。
で、ここ数日、その姿を見ていない。

もしかしたらマズイかもしれない、と曹魏会長は考えている、と
いう訳だった。

「曹魏会長、そういう話は一番初めにするべきだと思いますよ？」

「確度が低い上に、あんたたちを狙い撃ちのネタなんか恥ずかしく
ていえるもんですか。」

苦笑いの私たちは背筋を伸ばす。

「私、第三生徒会会長 劉蜀桃香は、本件に関する合意を発行する準備がありますが、要調査であることを提案します」

「私、第一生徒会会長 曹魏カリンは、本件の合意発行についての検討条件を問います」

「条件の確立と情報の共有。」

「了解したわ、桃香会長」

「了解です、カリン会長」

私たちは手を握りあう。

これが一時の休戦であろうとも、一つの真実を探る戦いになることは自覚していた。

第二生徒会ルート 第三話（後書き）

書いているうちに暴走しました。

風、活躍しすぎ。

あと、プロットになかった理由もでっち上げすぎ。

勘違いとか言いたいけど、孫呉の人達を思うと、明らかに「それっぽい」理由になってしまった。

そういう意味では、第三や第一って、上の立場から何とかしてあげる姿勢が強い組織で、見ようによっては口から大量の砂が出かないリバーズ組織だったりします。

まあ、第一はカリン様の支配による愛の組織だし、第三は桃香から溢れる慈愛が組織浸透して動いているような組織なので、トップダウンは仕方ないところなんです。

次の更新は遅くとも月曜ぐらいを予定してます

第二生徒会ルート 第四話

第二生徒会ルート

第四話

)

それは簡単な碑のようだったけど、その雰囲気は違っていた。碑と言うよりも、もっと誰かのためのものだった。そう、いわば……

「これ、母の墓なの」

彼女は自嘲気味に言う。

この墓を何年も取り戻せなかったと語る彼女は、いつもの天真爛漫な彼女ではなかった。

とっさに俺は、泣けない彼女が泣いているのだと感じた。民を導くものが母親のためとはいえ人前では泣けないのだ。それが「王」というものなのだから。

肩をふるわせる、それだけで終わらせなければならぬ重責。そんな重いものを彼女は背負っているのだ。

俺は、そんな彼女の肩に手をかけて……。

「っ！ 雪蓮……！」

俺は全力で彼女を、雪蓮を引き倒した。

く北郷一刀

「・・・っう!!」

腕に激痛を覚えて目を覚ました。

・・・いや、痛いのは腕ばかりじゃなくて全身なんだけど。

特に腕が痛いのは、雪蓮が寝ぼけて握ってるからだろう。

この怪力女め、と思いつつ撫でてやると、ゆっくりと力が抜けた。この怪力も恐ろしい武も、狂気と暴走、それが雪蓮を蝕んでいるからだという。

思い出したかのような狂気に蝕まれ、その狂気に踊らされて暴走する。

普段は幹部総出で押さえるそうだが、最近はないと冥林の話。なぜかといえば、

「最近北郷と遊んでたからな。いいストレス発散になってたんだろ?」

というけど、あれ、ほとんど撲殺寸前だったんだぜ。
そんな風にいったのを思い出し、さらに昨夜の雪蓮を思い出した。
狂おしいほどに猛る力、嵐のように吹き荒れる暴力。

狭い部屋で起きたそれは、人一人を肉塊に変えてもおかしくない
ほどのモノだった。

その恐怖に当てられれば誰もが逃げ出し、身の危険を感じていた
はずだった。

が、俺は逃げられなかった。

俺は、そんな嵐を抱き止めたから。

そうしなくちゃいけなかったから。

泣きわめく子供のような雪蓮をそのままにしていられなかったか
ら。

そして今、裸で抱き合う俺たちは、それなりの時間を過ごした後
ということに気恥ずかしい時間を過ごしているはずだったんだけど・
・。

「ん~~~~、すつきり」

まるで一月ぶりの快眠をしたかのような雪蓮の台詞にゲッソリ。

なんつうか、もうすこし情緒ってモノをですね。

「ふふふ、だって、これから何度も過ごす朝よ？」

ぶはっ、そりゃ、スゴい話を・・・。

軽く体を伸ばした雪蓮は、につこりほほえんでウインク。

そこには狂気のきの字も感じさせない明るいモノだった。

「さ、この勢いで、うちのみんなを『こまして』ね。」

でてきた台詞は狂気だったけど。

く 孫呉蓮華

昨夜、姉様の狂気を一刀が納めた。

そして、結ばれた。

それを聞いて私の心は張り裂けんばかりだったのに、そんな心の動きよりも安堵が胸を満たしていた。

私の心を癒し、姉様の狂気を癒す。

北郷一刀、あなたは本当に「一刀」なのね。

私は、胸の内に灯る炎を愛おしく思う。

「あ、蓮華、どうした？」

彼の部屋の前でモジモジとしていた私に声をかける一刀。

ここに来たときのトゲトゲしさはもう無かった。

にこやかな笑みも、ほほえましい雰囲気も「一刀」そのもの。いいえ、やっと私たちの一刀に「成った」のだから。

「・・・ね、一刀。正直に答えて。」

「ん、なんだ？」

「姉様と、寝た？」

真っ赤になる一刀。

なんて可愛いんだろう。

「あー、そのー、勢いだったかもしれないし、自覚症状ゼロだったかもしれないけど・・・、不真面目じゃなかったし・・・。」

シドロモドロの一刀に私はほほえんだ。

「次は私だからね？」

「え！？」

「・・・ほんき、だからね？」

「・・・え・・・？」

く孫呉小蓮

くっそ~~~~!!

いつの間にか姉様たちが一刀を喰ってたあ~~~~!!

ひどいひどいひどい~~~~。

そりゃ雪蓮姉様はかなりアプローチしてたから解るけど、蓮華姉さまは一刀とのコミュニケーションは不足してたはずじゃなかったのー！？

「シャオさま、現実はまだ少しほろ苦いモノなのですよ？」

にこやかな穏。

・・・って、まさかあんだ！？

「・・・・・・・・（にこにこにこ）」

シャオつてば、穩にまで先を越されたの！？

フツフツと沸き上がる感情を押し殺して、穩を見る。

幸せそうに自分の下腹部をさすってるしい！！

・・・いやいや、まてまて。

この上で言えば、冥林や祭まで行っていることは間違いないだろう。

だがしかし！！ この私の最大特徴である「ロリバディー」をもつてすれば、一刀も骨抜き。

ブヨブヨ年増なんかには見向きもしないはず！！

「えーっと、そっちの戦力はすでにミンメイちゃんが・・・。」

がーーーーーん！！！！

く北郷一刀

今わたくし北郷一刀は、きわめて重い人生命題について思い悩んでおります。

過日至った人間関係が、電光石火で広がってゆき、今ではすでに広がる先がないほどになりました。

・・・ぶつちゃけ、全員シトネをともしてしまいました。

なんて流されやすいんでしょう、悲しくなります。

いやね、うれしいよ？

綺麗で美人で可愛くて、人生を十回ぐらいやり直しても出会えないような美人に、全員に、好きだって言われて想いを告げられて、さらにはみんなで独占するとか言われて。

十代の若者にとつて夢のハーレム。

・・・のはずなんだけど・・・。

心は重い、重すぎた。

正直に言えば、常識って奴が重すぎた。

一夫一妻の常識で言えば、狂っている。

さらにこれだけの人数の女性を妻として養うことなんて絶対に無理だ。

それでも、体を重ねてしまう。

だって男の子だもの。

いや、いいわけはよそう。

この時間をむさぼりたかったんだ。

この時間を刻みつけたかったんだ。

この時間を逃がしたくなかったんだ。

俺は、この時間が永遠でないと、なぜか感じていた。

く 楽進 風

私たち浪人学生集団「狼人会」の活動基礎となった、点在する食料が、じつはあの北郷一刀が配置したものだ気づいたのは最近だった。

最近脱走のない一刀の情報を集めているうちに、脱走前にウロウ

口していた所というのが、だいたい私たちが確保した保存食料の位置だったことが判明したからだ。

「こりゃ、どういうこっちゃ？」

真桜の疑問も尤もだ。

最初は誰か、主に一刀から私たちへの援護射撃かと思ったけど、私たちが旗揚げする前から誘拐されている一刀にその情報が伝わっているとは思えない。

つまり、一刀はそれなりの目的があって保存食料を隠したが、それを利用できない状態になっている、ということだろう。

「つまり、一刻を争う、つちゅうわけか？」

「かもしれない、と考えてる」

「だったら、すぐにでも！！」

この島に来たばかりの私なら、その意見にうなずいただろう。だが、いま、この時点で私は領けない。

あの二大生徒会が逡巡した理由がやっと解ったからだ。

この島はひどく死者を嫌う。

いや、学校というシステムの中では怪我人すら大問題なのだ。

島の中で生活していると忘れがちだけれども、この島であつても

学校施設なのだ。

暴力沙汰がいいわけではない。

怪我や病気がいいわけではない。

死人なんてもつてのほかだ。

そう、ここは「学校」なのだから。

私がそう話すと、二人とも呆然としていた。

いや、あのときの生徒会の行いを思い出し、はがみしていた。
私たちも、幾人もの仲間を得てやっと思い至った境地、彼女たちが至っていないわけがないのだから。

でも、もしかすると、この逡巡こそが命取りなのかもしれないとも感じていた私だった。

〱曹巍カリン

浪人学生による互助組織との連携はうまく行っていた。

あれほど苛烈に私たちを拒絶した三人は、私たちの接触を受けて会談の場を設け、その方向性について了解してくれた。

なにがそこまで彼女たちを変えたかと言えば、やはり人の上に立つという経験が彼女たちを成長させたといえる。

会談の席で、彼女らの代表である「楽進 凧」は私たちに頭を下げた。

港での一件は自分たちの考えが足りなかった、と。

さすがに物分かりが良すぎる展開だ、とは思ったけれど、彼女は瞳を光らせた。

北郷一刀が行っていた第二生徒会脱出の日々とその妨害による暴行、さらにその陰で行われていた保存食料の散逸。

よくもまあ周到に逃亡したものだと感じするほどの回数を彼は逃亡している。

さらには、周辺学生に分かりやすい形で保存食を散逸させることにより、生徒の地力をあげて反乱を起こさせようとモクロんでいた

らしいのだ。

ただ、第二の生徒のやる気のなさが反乱までの動機にいたらず、今に至っていると楽進は語る。

「じゃあ、今は？」

挟撃作戦や反抗勢力の台頭が認められない今、彼は諦めかけているだろう、と楽進はかたる。

なんて悲しいことだろう。

少なくとも、彼の行いが解る人間がそばにいて、彼が行おうとしていた作戦が見通せる人がいるのに、歯車が全くかみ合っていないため、こんなにも時間が浪費されている。

そのせいで、彼が疲弊し潰れかけているというのならば、それは私たちの怠慢だろう。

「いいえ、私たちも間違っていました。」

彼女曰く、生活の向上など目指さず、身軽な状態で第二生徒会を攻めていれば、よかったのだ、と。

今この段階で、すでに多くの柵ができてしまっている。

これをすべて断ち切って動くことはもうできないと彼女は理解してしまっている。

まさに絆に縛られて。

会談は腹を割った時点で決まった。

彼女らの本拠を中継にして、第二生徒会に攻めあがることを決心したのだ。

大方針は決定し、これからを決め始めるのだ。

まってなさい、北郷一刀。あなたの蒔いた種は必ず花にしてみせるわよ。

第二生徒会ルート 第四話（後書き）

お待たせしました、第四話です。

一刀はガンガン流されてますが、周りは加速してます。

流されているわけも、加速されているわけもありますが、それでも現実なんてものは真実の欠片しか見えないものです。

一から十まで説明してくれる説明オバさんは、どの世界にでもいるわけではないというわけですね。

とはいえ、風あたりがその辺に使いやすいのは事実ですがw

第二生徒会ルート 第五話（前書き）

申し訳ありません、ちょっと短いです。

話の区切り上、仕方なく。

ご容赦ください。

第二生徒会ルート 第五話

第二生徒会ルート

第五話

く 楽進 風

些か身勝手な話だが、第一と第三が北郷一刀救援に動き出したのを不快に感じている自分がいる。

もちろん、その行為自体を不快としているわけではなく、お題目の「第二生徒会難民救済」というやつだ。

実際、彼女らは難民でも何でもなく、単なる寄生虫にすぎないのだ。

第二がいやなら第三や第一に行けばいいのだが、求められる能力や思想が合わないと言うだけで、第二を離れず、成績的な努力もせずに食料にありつこうとする。

立地条件で言えば、第二はもっとも野生生活がしやすい状態だった。

庇護なんて気にせず自立したり第二の補給物資を盗んだり出来るともいえる。

が、彼女たちは、そんな行動もせず、お行儀良く飢えていった。そんなにお行儀良くしたいなら、なぜ南洋校舎などにきたのか！？

「楽進、そんなにいきりたつものではないわ。」

第一生徒会会長、曹巍カリンさんは言う。

「一度南洋校舎にきてしまえば、適正がどうのと言える状態じゃない

くなるわ。」

だからこれは、いいシェイクダウンの時期だ、と。
つまり、文字通りの「救済」ではない、と？

「当たり前じゃない。救済の名を借りた選別と第二領の分割併合、さらには北郷一刀の救出。このぐらいは目的として掲げないと割に合わないわ。」

政治というものの本質の一部を知った気がした。

くミンメイ

穏やかな笑顔でお休みの一刀様。

最近では言葉の方も、お戻りになられています。

どちらではなしているかわからなくなるときがあるようですが、どちらでもいいか、と笑ってくださいます。

「明命、おはよう。」

一刀様が向こうの言葉で話しかけてくれました。
その感動を込めて抱きしめます。

「なんだ明命、甘えんぼだな」

優しい撫でかた、なにも変わりません。
元通りです。

「しかし、この記憶も俺にとっては未来の記憶、なのかな？」

そう言う難しい事はわかりません。

それでも一刀さんが再び抱きしめてくれている、それだけが全てです。

「俺を抱きしめてるのは明命なんだけど？」

ぎゅーです、ぎゅー。

く北郷一刀

あの警戒心の固まりみたいだった明命が、かわいい寝息をたてて寝ている。

孫呉の彼女たちが言う「一刀」は俺本人なのかは疑問だけれども、記憶の向こうに感じていた夢の意味は分かった。

前世なのか後世なのか、はたまた未来なのか過去なのかはわからないけど、そのときの記憶が夢なんだろう。

未だ全てを思い出せてはいないけど、彼女たちが狂おしいまでに俺を求めてくれるほどのことを俺は成したのだろう。

過去ならば誇ろう、未来ならば奮起しよう。

何しろもう、受け入れてしまったのだから。

信用することにしてしまえば、全ての疑問がなくなる。

行うこと、実施することに訳と理由があるものと考えれば良いだけだった。

ちよっと考えれば自ずと筋道が見える。

ただ、少しだけ気になることはある。

彼女たちが急ぎすぎることだ。

もっとゆっくりなら俺も不信感を持たなかったのに。

いや、わかつてはいる。

急がなければならぬ理由があることを。

その理由はわからないけど、彼女たちがここまで急ぐ訳があることを。

とてもトテモいやな予感しかないけど。

↳ 遼瀬 シア

あの「楽進 凧」つつやつは良い奴や。

船部屋だけの飯ストを救うために立ち上がり、浪人になって仲間を集め、さらには生活コミュニティーまで作ってしまう。

その行動力は惚れ惚れするほど。

「なあなあ、凧ちゃんよー。このままうちらと生徒会せんかあ？」

「・・・シアさん。それでも私、オタツネモノですよ？」

これは事実。

少なくとも浪人学生であるだけでは問題ない。

でも、それを集めて勝手に統制してるのはあかん。

いわば闇組織。

これについての禁止校則があるから。

「せやけど、曹ちゃんは『必要悪というより必要』つつとったで？」

そう、個々で活動らしい活動をしておらんかった浪人学生が、この「狼人会」という組織を得て、まるで生徒会活動のような活発さで生活をまとめていったのだ。

さらにすばらしいことは、この「狼人会」には生徒会と生徒の垣根がないこと。

誰もが会を支える必要人員であり、誰もがこの会を動かしている運営人員だった。

みんなが会を把握していたし、志もある。

ここには小さいながら生徒会の基礎と理想の一端がある。

そう判断した。

そんな組織をまとめた「楽進 風」には新しい組織などではなく、自分の傍で何かをして欲しいと思う。

「だったら、シアさんがこっちにきませんか？」

・・・あかん、魅力的提案や。

こんな所での生活なんてごめん、なんて桂花あたりなら言うかもしれん。

せやけど、うちには・・・たまらんかしれん。
・・・曹ちゃん、うち、浮気してまうかも・・・。

く 孫呉小蓮

多分、もう時間がないんだろうな、と思う。

明命の話では、既に第一と第三が動いていて、準備は万端だとい

うし、第二の生徒達の解放も始まっている。

この流れが続けば、あと三日も持たないだろうと亜紗は分析している。

でも、実は私たちのほうも限界だった。

いつまでも一刀と共にありたいけれど、時間がそれを許さないから。

「蓮華姉様、御蔵船のほうは・・・？」

「もう殆ど消えかかっているわ。供物を使っても一日だって延ばせないほど、よ。」

じゃ、逆に、今の一刀は完全に「一刀」なのかな？

「違うわ、シャオ。ここにきたときから、ずっと一刀は一刀だった。私たちがの思い出に縛られていなくても、それでも一刀だったわ。」

流石は姉様。

誰よりも一刀を感じているんだねえ。

「・・・シャオだって、感じてるんでしょ？」

そりゃ・・・ね。

私たちは共に抱きしめあう。

そう、感じる。

私たちには、私たちの体には一刀が生きている。

その一事があれば、私たちは生きていける。

そのことを再度確認できた。

「私たちは幸せなんだね、姉様」

「私たちは幸せだね、シャオ」

この一瞬の幸せを私たちは永遠にできる。
それを信じてる。

第二生徒会ルート 第五話（後書き）

どうにかこうにか第五話です。

そろそろ終局間近、もうすこし時間をください。

第二生徒会ルート 第六話

第二生徒会ルート

第六話

〱劉蜀桃香

赤壁とも言われる第二生徒会本部が見えます。

この校舎を包囲したのは第一生徒会、第三生徒会、そして楽進さんがまとめた「狼人会」。

私たちにとつて、浪人学生を救うためにはそれ相応の予算が必要だという常識があつたけど、その常識を根底から覆した凄い人でした。

生徒会の生活物資に頼らず、独自努力で生活を支えるバイタリテイーもそうですが、基本的に予算によらない生徒生活という方向性は私たちに衝撃を与えました。

その彼女たちにその方向性を与えたのが「北郷一人救出」でした。

はじめにそれを彼女が言い出したのは、あの新入生入島の港のことでした。

今年唯一の男子生徒の出迎えに着た私たちが聞いた「第二生徒会による誘拐」という話は衝撃的でしたが、逆に「その手があつたか」と思わせるものでした。

なにしろ、入島したら自由に判断させるという理事判断だったので、入島する前に抑えてしまおうという第二生徒会の手法は「上手い」と思わせるものでした。

その所為で私たちの反応が鈍かつたんですが、それを不満に思っ

た彼女は、入島まもなくして浪人学生となることを決めました。

正直に言って、私は彼女が、彼女たちが直ぐにどちらかの生徒会に助けを求めてやってくると思っていました。

第一にいけば、それなりに揶揄されるでしょうが迎えられるでしょうし、うちに来てくれれば其れなりに戦力になるだろうから、早めにギブアップして欲しいとすら思っていたんです。

しかし彼女たちは大いに予想を裏切りました。
生活環境を構築し、相互互助を成し遂げ、そして本来目的にも届こうとしているのです。

負けた、という思い出一杯になりました。

今まで自分はなにをしてきたんだろう、とすら思いました。

先代から続く「徳」の生徒会を支えるためと言いつつ、私はルーチンワークに身をおじていなかったのだろうか？

この身はすでに生徒会長。

その立場から動こうとしないではなにも変えられないんだと身にしました。

だから動こうと思います。

まずは「北郷一刀」君の救出。
それから。

く 孫呉雪蓮

壮観、ってところかしら。

我が本部校舎から望む先には、数百名もの生徒会構成員が校舎を

取り囲んでいる。

腕に覚えがあるという見た目だけをみると、思わず本気を出してあの小娘たちの肝を冷やさせたくなるけど、体の中心で暖かな者を感じて収まる。

「冥琳、そろそろタイムアップみたいね。」

「ああ、本当に本当の時間切れだな。」

ニヤリと笑う私たちだったが、悲壮感とか絶望感とかそう言うものは一切ない。

すでに奇跡は起きているし、その奇跡で得られたものは十分だった。

対価を支払い、そして得るものは得た。

予定外の、予想以上の幸せまで胸のうちに秘められたのだ、これ以上求めるものなどあるうものか。

「姉様、御蔵船の発光が始まっています・・・。」

蓮華の表情にはすでに悲嘆はない。

もう得るべきものを得たと表情は語っていた。

「蓮華、未練は？」

「・・・あります。ですが、その想いと共に生きてゆきます」

強くなったものだとは私は感心する。

加えるならば、私も強くなった。

内なる狂気に踊らされることはもうないだろう。

あの懐かしき大地に戻っても、忘れえぬ思い出があれば生きてゆけることを私たちは知っていた。

「みなさま、そろそろお時間です。」
「ありがとう、明命。」

さあ、そろそろ私たちは帰りましょう。
あの懐かしい大地へ、江東の空の下へ。

く北郷一刀

寒気が全身に襲い飛び起きた。

何か悪いことが起きる、それを知っている。
腕の中には誰もいない。

こんな事など最近なかった。

まるで、誰もいなくなっただかのような寒気に部屋を飛び出ると、
そこにはシャオが立っていた。

にこやかな笑みで、寂しそうな笑みで。

「・・・一刀も気づいていたんでしょ？ もう時間がないって。」

なにを言ってるんだ？

時間なんかいくらでもあるだろ？

もっと一緒にいよう、そうだ、それが良いよな？

「ほんとうにもう、一刀は世話が焼けるなあ。」

そう言いながら シャオは一步前にでた。

それなのに距離が縮まらない。

俺も一步前にでたのに、全く距離が縮まらない。

「もうね、この世界につなぎ止めるための楔がだめになっちゃった

んだ。」

一瞬姿のぶれるシャオ。

「私たちをこの世界につなぎ止めていた楔、わかってるんだよね？」

悲しそうな笑み。

そんな笑みなど見たくなかった。

瞬間的に浮かぶ記憶。

見たことも聞いたこともなかった記憶が浮かび出す。

洞窟の中にあつた校舎。

洞窟内にあつたのに湿気の影響をまるで受けない校舎。

第二生徒会校舎下の大空洞の船たち。

そしてその中であつた氷柱と人物。

閃光と共に消え去る第二生徒会。

行方不明の幹部たち……。

「一刀に会いたくて、私たちの一刀に会いたくて、何度も何度もこ

の世界にやってきて、やっと一刀に出会えた。知り合えた。……抱きしめてもらえたの……。」「

ぼろぼろと涙を流すシャオを、俺は抱きしめることすらできない。

そう、あの氷柱の人物の存在が、すでに「俺」になってしまったから。

記憶も存在もすべて、俺が奪ってしまったから。

彼が彼であるすべてを俺が奪ってしまったから、彼が彼でなくなってしまったから。

「ごめん、ごめんな、シャオ」

「謝らないで、一刀。私は、私たちは、ふたたび私たちの一刀に出会えたことを、再び抱きしめてもらえた奇跡を感謝してるんだから」

涙でおぼれそうなシャオが、無理矢理笑顔を浮かべる。

「いまね、外で雪蓮姉さまが時間稼ぎしてるわ。」

俺はいつの間にながしていた涙を拭う。

「だから、お別れをしてあげて。」

俺はうなずいて走り始める。

「……バイバイ、大好きな旦那様」

あからさまな時間稼ぎだった。

こちらからの声明文や生徒会凍結などの約定を読み上げているのに、合いの手を入れたり茶々を入れる様は、滑稽以上に異常だった。まさに一分一秒を稼ごうとしているかのように見える。

そんな最中、第二生徒会本部の入り口が開く。

そこに立つのは、我らの飯スト、北郷一刀。

『*****!!!!!!』

良くわからない、それでいて言葉のつながりを叫ばれた孫呉雪蓮は、顔をゆがめた。

「・・・黙ってなさい、一刀！ もう時間切れなのよ!!」

「そつやって逃げる気が、孫策伯符!!!!」

目をむく私たち。

一刀はなにを言っているのか、と。

「・・・逃げるだなんて、人聞きの悪い。帰るだけじゃない。」

「帰る場所なんかどこにもないくせに、強がつてんじゃないか!!」

「・・・あるわよ、帰る場所ぐらいあるわよ!! 江東が建業が、私たちの土地が民がいるわよ!!」

必死に言葉をつなげる孫呉雪蓮を、一刀は抱きしめた。

「いくな、いくなよ!! やつと会えたんじゃないか!!」

瞬間、体をふるわせた孫呉雪蓮だったが、にこやかな笑みで一刀

にキスをした。

「・・・ふふふ、最後にデッかい幸せもらっちゃった。」

とんつと一刀を突き放した孫呉雪蓮は、すちゃっと敬礼をしてこちらをみた。

「じゃ、バイバイ」

音もなく光がすべてを飲み込んだ。

閃光と共に彼女たちは消えた。

校舎もなにもかも。

第二生徒会幹部は誰一人残らず消えていた。

校舎も、施設も、なにもかも。

そこに残ったのは、第一生徒会幹部、第三生徒会幹部、そして狼人会。

・・・加えて、滂沱の涙と共に崩れ落ちた北郷一刀。

彼には誰も声をかけられなかった。
もちろん私たちにも。

く北郷一刀

あの事件から二月が過ぎた。

誘拐事件の被害者から、第二消失の事件当事者へと格上げされた俺は、連日の尋問を受けさせられた。

はじめは黙っていたいようかと思っただけ、話したところで信じてもらえとは思えなかったので、堂々と話すことにした。

事の始まりは、今の時間から未来に当たる俺、北郷一刀から始まる。

ある事情で三国志の時代に飛ばされた俺、というところで盛大につっこみが入ったけど無視。

様々な事情で、猿術の客将をしていた孫家に拾われる。

フランチェスカ本校の制服を着ていたので、白く輝く衣を纏いし天の御使いとして看板にされ、戦闘を共にしていった。

しばらくの戦闘を続ける中で、猿術を打ち破り、とうとう宿願であった「建業」を取り戻した孫策は、俺を伴い祖先の、母親の墓を

詣でたときに事件は起きる。

曹操軍から先行した部隊が、孫建を暗殺しようとしたのだ。

その際、俺が彼女をかばったために暗殺は失敗したが、俺自身はほとんど死んでしまった。

殆どというのが難しいところで、たまたま近くにいたカダという医師により、どうにか命だけは取り留めたが、目を覚まさない状態になってしまったという。

立て続けに起きる戦乱を乗り越えて、どうにか三国同盟に漕ぎ着けた彼女たち「呉」だったが、しばらくして歴史からその名を突如失う。

「・・・つまり、それが、孫呉雪蓮たち、だというの？」

曹魏カリン会長の言葉に俺はうなずく。

いかなる秘術かはわからない。

ただ、半死半生の状態の俺を天の国に返せば生き返るのではないかという思いつきがはじめだったらしい。

様々な検討を行って、そして第一回目の帰還が行われたとき、到着したのは何と江戸時代の「南洋校舎島」だったそうだ。

第二回目、第三回目と繰り返す内にどうにか時代背景や歴史背景を把握した彼女たちは、十回目で今の時代へ焦点を合わせることができるようになった。

そして第二生徒会という組織に潜り込み、行政しつつも情報を集め、そして、北郷一刀本人の存在を確認した。

何度も何度も同じ時代同じ時間を繰り返し、半死半生の俺の記憶を流し込むことによって、俺に時間の流れを教え、同じ事が起きないようにと慈しんでくれたのだ。

そして、今、彼女たちはすべての記憶を俺に渡しきったと判断し、あの、三国志の時代に戻ったのだ。

あの懐かしき建業へ、江東の空の下に。

何度も何度も同じ話を聞かれ、調書とは別に当時の衣装や食生活、様々な話を聞かれた上で判断された内容は、

「総ての者に罪なし」

だった。

うれしい反面、総てを無かったことにされてしまったかのように寂しい。

とか何とか感傷的になることはできなかった。

なにしろ俺は唯一残った第二生徒会幹部として登録されてしまっており、第二生徒会の運営その他を押しつけられたからだ。

一応、風たちも協力してくれるということなので、彼女が立ち上げた組織「狼人会」を第二生徒会組織として再編させてもらったんだけど、それでも忙しい。

いままで雪蓮たちが行ってきた「かわいい子供は突き放し」政策の反動か、第二生徒会所属の生徒が事あるごとに「相談」と称してまとわりついてくるのだ。

「いやいいんですよ、ええ。」

相談結構です、いいことですよ？

それでもねえ、ご飯が多いの少ないのとか、寢床が綺麗だ汚いだとか。

ねえねえ、それで自分で毅然する範囲でしょ？

と声を荒立てないようにいつてみると、

「・・・自分でやっていいんですか？」

と逆に聞かれた。

だから、

「整理整頓掃除は自己達成目標。装飾は許可制」

と打ち出したところ、みるみる生活環境が改善されていった。

「一刀、第二の生徒って、一番第二に居ちゃいけないタイプばかり残ってるみたいなんだ。」

「・・・従順なお座敷犬タイプ？」

「・・・いい表現だな。」

はあー、と二人で大きなため息。

「まあ、何にせよ、目的やら目標なんつうものは決まってるんだし、がんばるしかねーでしょ」

「そうだな、やるしかないだろ」

見上げる空は、蒼天とも言える雲一つない空。

たとえこの空が地球上の総てにつながっていても、彼女たちの空にはつながっていない。

いいや、記憶をたぐり寄せろ。

氣力を失うな。

想いを忘れるな。

自分を愛してくれた彼女たちを思えばいくらかでも頑張れる。

前に進め、前に進め。

必ずたどり着くと信じて。

第二生徒会ルート 第六話（後書き）

第二生徒会ルートメイン事件、これにて決着です。

事件背景もそれっぽく語っちゃいましたので、それなりにご理解いただいたかと。

本当は解説ちゃんの「風」にでもやってもらおうかと思ったんですが、想いの深さは一刀が一番かと思いました。

後はエピソード……ですが、ちょっと弄ります。

第二生徒会ルート エピローグ1

第二生徒会ルート

エピローグ 1

）

南洋校舎第二生徒会幹部と校舎の消失は、本土の知るところになった。

様々な情報や憶測が乱舞したが、南洋校舎からきた「一切の問題なし。」の報告を信じると理事長が判断し決着をみた。

問題はあったが、これから起きるであろう問題に比べれば小さい問題かもしれない。

ただ、問題の渦中にあった者たちにとっては忌々しい今に違いはない。

そんな事を一切関知しない野次馬根性をたぎらせた愚か者たちが南洋校舎の寸前まで船でやってきたが、上陸寸前で引き返す者ばかりだった。

本人たちも不思議に思っているようだが、その話が広まるに従い、こんな憶測が流れた。

「南洋校舎には資格ある者しか近づけない」

以前から名高かった閉鎖制が再び名をあげたが、その熱が冷めたかというところではない。

消失した幹部の替わりに生徒会を取り仕切る人間が、かなりの有名な人だったから。

北郷一刀

フレンチエス力唯一の男子生徒でありながら、南洋校舎へいくことを許された少年。

彼が治める「慈愛」の生徒会を希望する生徒は引きも切らないと言う。

来る者を拒まず、そして第二ばかりか島全体を守るために普請する「慈愛」。

「覇」「徳」「慈愛」三つの生徒会が治める南洋校舎を、目指すものたちがいる。

今も、これからも。

第二生徒会ルート エピローグ1（後書き）

その名の通り、エピローグですが、「1」です。

エピローグは2まで書いてありますので、おたのしみに。

第二生徒会ルート エピローグ2

第二生徒会ルート

エピローグ2

く北郷一刀

どうにかこうにか人が回るようになった気がする。
雪蓮達が消えて三ヶ月の成果って凄い気がする。

俺が提案した学力向上プログラムはかなりの成果を見せ、第二生徒会の平均点が70点を超えた。

加えて、学習手法を第一や第三に公開することにした。

「・・・一応言うが、うちの優位性ってものが失われるぞ？」

凧の言葉に俺は苦笑い。

優秀な人間つてのを十住人集めると、その優秀な人間の中でも優秀な人間つて生まれるんだって。

「つまり、底辺をあげて島の底上げをする、と？」

頷く俺に凧も苦笑い。

とはいえ、色々と取引はしたいので、席を囲むことにした。

会食は第一生徒会で行われた。
内容は学習手法の開示と交換。

では、ウチで何を求めるかといえば……

「サバイバル技術の普及と向上？」

そう、この南洋校舎という特殊環境に住んでいるのに、やることといえば、エアコンのきいた部屋で勉強勉強勉強。

まったく幅がなさ過ぎる。

俺はサバイバルを提案してるけど、ほかに意見だつてあるはずだ。そう言つたところ、にこやかな笑みで桃香会長が手を挙げた。

「はいはい、私は「部活」をしたいです!!」

彼女曰く、インフラの整備や報道・放送を部活動ですれば、本土に頼った娯楽の一部を担える上に、予算削減・生徒の意識向上・モチベーションの向上とイイ事尽くめ、とか何とか。

「そのためには、生徒全体の成績向上が必須、よね？」

にやりと笑うカリン会長。
どうやら乗る気のようにだ。

なんとというか、みんなで何かをするという雰囲気であとまってゆく。

色々な意見を交し合つて、そして向上してゆく。

この心地よい空気を雪蓮、君にも味合わせてあげたかった。

「はいはいはい、これからは育児施設もひつようです！」

あのなあ、その間違いを起こした上で人様に迷惑をかけるつもり満載の意見はどうにかならないか……

「・・・雪蓮・・・？」

え？ 雪蓮？

「やつほー、一刀。ひっさしぶりー」

そこにはにこやかに手を振る雪蓮の姿があった。

「・・・雪蓮、おかえり」

「・・・ただいま、一刀」

ぎゅっと抱きしめる俺と雪蓮。

「・・・野暮なことはいいたかないけど、二つ聞かせて頂戴」

「なによあ、久しぶりの逢瀬なんだから、遠慮してよあ。」

「こっちの用件のほうが先よ！ 何であなたがここにいるの！？
帰ったんじゃないの！？」

そつだ、帰ったはずで、もう来れるはずがなかったんじゃない？

「・・・それがヒドいのよ！ 建業に帰ったら、同姓同名のオッサ
ンたちが呉王でございって胸張ってるのよ！」

曰く、あの時代の武將総てが「おっさん」であり、むさい奴らば
っかりだったという。

「汗くさいし汚いし美しくないわで未練なんかなくなったんで、一
刀のところに着ちやいましたー！」

でもどうやって？ 俺の遺体はもう使えないはずじゃあ・・・。

「ふふふ、私たちと一刀との間には、もっと深い絆があるでしょ？」

そついいながら下腹部をさする雪蓮。

「・・・ま、まさか？」

「そう、そのまさか！」

炎天下の100ワットな笑顔でほほえむ雪蓮。

「さ、愛あるところを証明してね？ みんな期待してるから」

「・・・・・・きゅう」

俺の視界は当然のように真っ暗になった。

支えてくれた雪蓮の柔らかさとその香りに包まれながら。

・・・・・・

第二生徒会ルートクリアー

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・ ・ ・

第四ルートを開始します。

準備はよろしいですか？

・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・

第二生徒会ルート エピローグ2（後書き）

これで、第二生徒会ルートの終了です。

謎とか真実とかはいろいろとあるとは思いますが、一応の決着と
思ってください。

この後は、新ルート＋怒涛の拠点ラッシュになります。

おたのしみに

統合生徒会ルート プロローグ（前書き）

お待たせしました。

第四ルート開幕です。

謎も憎しみもありません。お気軽のお楽しみください。

統合生徒会ルート プロローグ

聖フランチェスカ学園 南洋校舎

統合生徒会ルート

プロローグ

カチ、カチ、カチ、カチ……

時計の音だけが響き渡るこの部屋には、かなりの人口密度があった。

総勢は40名ほどだが、その色分が恐ろしいほど分かれている。旗にすれば

「覇の青」「絆の赤」「徳の緑」

と分かれる陣営だった。

それぞれの旗の下に集まる人員を端的に纏めるなら次のとおりだろう。

曹魏カリン率いる「覇」の第一生徒会。

孫呉雪蓮率いる「絆」の第二生徒会。

劉蜀桃香率いる「徳」の第三生徒会。

聖フランチェスカ学園南洋校舎を代表する有名人が居るだけでも凄いことなのに、更には彼女らの配下も全員いた。

そう、全員が、いるのだ。

……自分の周りに。

「……どういふことかしら？」

深いため息と共に沈黙を破ったのは、霸王と名高き曹魏カリン会長。

彼女が示した書類には、全部「北郷一刀」の名前が載っている。

一枚目は第一生徒会幹部リスト

二枚目は第二生徒会幹部リスト

三枚目は第三生徒会幹部リスト

記載日、参加日、全て同一であった。

「……少なくとも、第二では毎日脱走と捕縛を繰り返していたわよ？」

「……私だって一日たりとも手放してないわよ」

「……毎日ご飯作ってもらってたんでしょねー、第三」

じとーつとした視線。

みんな何か言いたげだったけど、こっちもこっちで困ってる。

何しろ「全部」記憶にあるのだから。

桃香さんたちと共に、南洋校舎改革を推し進めた記憶も、カリンと共に南洋校舎を運営した記憶も、雪蓮とあの日別れをして涙を流した記憶も！！

ああ、そうさ、気が狂ってるといわれても仕方ないけど、全部記憶してるんだ。

桃香さんを抱きしめたあの夜も、カリンと共に見上げた露天風呂の夜空も、雪蓮に噛み付かれて押し倒されたあの夜も！！

「……って、あれ？」

真っ赤になる三人の生徒会長。
その背後にいる幹部たちは、非常に白い目。

「北郷、もしや……………」

「北郷、きさま……………」

「おにいちゃん、けだもの」

「兄様、不潔です」

つて、やべ、喋ってた？

呪詛のような囁きが響き渡る中、ほいっと手を挙げる少女が一人。

「……………ならば、風との事も覚えているのですか？」

ゆっくりと頷くと赤くなった風は引込み、周囲全員が何かを期待する顔。

「……………ああ、そうですそうなんです。「全部」覚えているんですよ、はい。」

「（ぼっ！）」

うわっはー約一名以外全員赤くなりましたよ！　つか、その中でも鼻血で出血多量が一名！

やばいやばいと駆け寄って、風みたいに「トントン」すると、意識を取り戻した模様。

「ふ、ふああ、こんなところで、大胆ですね、一刀くうん……………」

しなだれかかる彼女を周辺の手が止めて、すつくと立たせる。

自分はというと、三人の生徒会長に引きずられるようにして元の場所へ。

「さて一刀。あなたがどう思ってた回りがどう思おうとも、アナタは私のものよ」

「そりゃ無いんじゃない？ こっちはそれなりの段階まですすんでるんですけど？」

「あはははは、私も一刀くんを「取られる」のは困るな」

《ガキン！》と音がするように、三者の視線が交差する。

自分はそんな状況で、心底情けなかった。

桃香さんを支えたかった自分が、カリンと共にありたかった自分が、雪蓮を失いたくなかった自分が同時に存在するわけないのに、なぜかここに居た。

本当に、どうしたらいいんだろう・・・。

ガツクリを頂垂れているとほぼに手を当てる誰か。

「・・・ねえ一刀。アナタはどうしたいかしら？」

判らない、どうしたらいいのかわからない。

桃香さんを支え続けた自分も本当だし、カリンと共にあることを誓った自分も本当だし、雪蓮が戻ってきたとき抱きしめた自分も本当だったから。

「・・・そうやって聞くと、最低男ね。一刀って。」

最低だ、本当に最低だ。がむしゃらに頑張ってきたはずなのに、何で・・・。

「・・・でも、そんな一刀君が結構大好きなんだよね、私たち」

見上げれば苦笑いの三人。

「・・・決まってるじゃない。一刀は私のものだもの。嫌うはずが無いわ」

「・・・所有宣言はおいといて、私だって向うより一刀を選んだんだもの。嫌いなわけないでしょ？」

「私は大好きですよ？」

『ず、ずるい！』

「あたしだって大好きよ、大大大好き！ 子供の頃から好きだったし、今も大好きよ！」

「あら、時間は関係ないんじゃない？ あたしなんか向うの人生捨てるくらい大好きよ？ 一刀が居れば世界なんか関係ないぐらい好きだし」

「人生とか世界とか重石につけるんじゃないわよ！」

「ふん、子供の頃の妄執を盾に取るのもどうかと思うわ」

「一刀くん、怖い人たちは置いて、こっちでお話しましょう」

わーいと自分の体を引き寄せる第三生徒会。

「徳とかいってて小細工すんじゃないわよ、桃香！」

「徳じゃなくて『御得』じゃないの！？」

再び中央に引き戻される。

なぜか両足に朱里ちゃんと雛里ちゃんがついてきた。

『がるるるるるるる』

「はい、おちびちゃんたち、ホーム、ホーム！！」

しつしと追い払われつつ唸りながら戻る二人。
随分と野生化してるなあ……。

「朱里ちゃんも雛里ちゃんも、一刀くんの手料理に飢えて……。」

うわーそりゃ申し訳ないな……。

「じゃあ、今度……。」

「一刀オ!!!!!!」

鬼がいてはる、背後に鬼がいてはる……。

がたがたと震える自分を中央に据えて、腕組の三人。

烈火の笑みのカリン、凍土の笑みの雪蓮、漆黒の笑みの桃香さん。
やばい、何か知らないけど、やばすぎる。

ああ、誰かたすけてえ！

何でこんなごちゃごちゃになったかは判らないけど、三生徒会の
決定が下された。

『北郷一刀 三生徒会各本部への常駐を禁じる。』

どこにも常駐するな、ということだと所払いかと思いきや、次の
条文が続く。

『新設の統合生徒会付き警備隊長を命ず 統合生徒会連名』

統合生徒会というのは、新しく作られた三生徒会共有の生徒会事務所。

三つの生徒会からほぼ均等の位置にある校舎を使ったもので、2週に毎に持ち回りで各生徒会が常駐しに行くという。

とはいえ、真ん中にあるのってらくだよな。
どこにでもいけるもの。

統合生徒会ルート プロローグ（後書き）

いかがでしょうか、統合生徒会ルートです。

色々な幅を持たせつつ、全員が自分のルートが主流だと主張している怪しげな空間になってしまいました。

とはいえ、これで念願の「紫苑・桔梗」拠点が書けます、書きます
！！

いやっほーい！

統合生徒会ルート 第一話（前書き）

ちよつと短めの日常編です。

統合生徒会ルート 第一話

統合生徒会ルート

第一話

く 北郷一刀

各生徒会からの指示で、統合生徒会が設置された。
場所は三つの生徒会から均等に遠く、均等に近い校舎が選ばれた。
その場所は、重複記憶の中でも輝かしい、新制第二生徒会の場所
と同じで、僕は感慨深いものを感じていた。
改装して大食堂を作ろうかと思ったけど、その労力を割くだけの
時間も予算もないということなので、仕方なくキッチン周りの強化
だけにすますことにした。

「十分凝りすぎだと思いますけど？」

様子をのぞきにきた朱里ちゃん雛里ちゃん。

そうですねー？ と首を傾げつつ、キッチン周りをみるけど、
そんなにすごいですかねえ？

「うちの三倍はあるかと。」

そりゃ、第三キッチン、キッチンと言うよりも「洗い場」だからねえ。

「あ、ははははは。」

「・・・うちじゃあ、だれも水くみ以外には使いませんし・・・。」

いまからこの二人を仕込めば、少しは改善するのかな？
ちよつと試してみない？

「・・・教えていただけますか？」 「・・・覚えたいです」

じゃ、ちよつとレクチャーですよ。

〵 劉蜀桃香

統合生徒会本部の先行整備部隊として、第三が選ばれたのはアミダによるところが大きいんだけど、実際は特性の問題だと思う。第三はとにかく無色な方向性が売りなので（カリン「無色？ 暗黒でしょ暗黒！！」）、どんな人間にも馴染みやすい空間が作れると思うから。

私たちが目指す島内クラブ活動の連絡拠点としても見込めることから、その辺の色づけも忘れてはイケナイ。

あ、そうそう、周辺校舎を押さえることを忘れちゃイケナイ。どうせミンナも連絡所がほしいと思うだろうから。

「桃香、ずいぶんと黒くなったものだな。」

「え？ 何が？ 星ちゃん」

「先行整備部隊とは名ばかりで、周辺校舎を押さえたり本部統合生徒会棟に自分たちの出張所を造つたり・・・。」

「大丈夫大丈夫。第一の分も第二の分も残してあるし。」

「・・・イイ性格になつたなあ」

「へへへ、ほめてる、ほめてる？」
「・・・関心はしてるよ」

私たちの記憶では、消失した第二生徒会の副長になっていたはずの星ちゃん。

この現実では第二はあるので、その処置はない。
そんなアンバランスな状態に不満はないのか聞いてみたけど、苦笑いが帰ってきた。

「道が交わると決まっているのなら、そんなに急がなくても良いだろう。・・・というか、多分急ぐ必要もないしな」

何のことを言っているのだろう、そう思った私だったけど、ちょっとさきで楽しそうな声が聞こえてきている方が
気になって移動した。

く子雲 星

楽しげな声は、厨房から漏れ出ているものだった。
ふたりのカミカミ少女と一刀が、きゃっきゃうふふと何かを作っている。

イイにおい、これは・・・クッキーか？

「ね、ねえ、なにをしているのか、なあー？」

「あ、桃香さん、ちょっと待っててくださいねー」

にこやかな笑みの朱里。

「・・・もうすぐみなさんの分も、できます。」

はにかむ雛里。

これはこれでいい！

GJ、一刀！

私のグットサインをみた一刀もそれに答える。

やはり道は交わるものだ、うんうん。

時間をおいて第三の幹部や生徒たちが集まった会議室にクッキ
と紅茶が振る舞われた。

大半が朱里と雛里が作ったものだそうで、みんな絶賛した。
それを聞いて恥ずかしげにしていた二人だったが、これからも一
刀から料理を習うつもりだとはなしていた。

自信にあふれた二人の少女を見つつ、一刀はうれしそうに笑って
る。

あー、いかんいかん、かなり「キュン」ときてしまった。

このまま死んだら「トキメキ死」だな、うん。

「・・・私にも教えてもらえないだろうか・・・」

愛紗、それはだめだ、それはだめだ。

とても大切なことなので二度言った。

あの、一刀ですら逃げ腰だ。

あやつには拭いがたい過去のはずだ。

あの時だって、「料理不能？それはないでしょ」と安請け合いし
たまででもいいけど、その先にあった失敗を見て寝込んだものだ。

あ、震えてきた、涙目だ、しゃがみ込んだぞ・・・

「か、一刀さん、気をしっかり持つてください」

「・・・一刀さんは私たちが守りますから・・・。」

涙目で二人を見上げる一刀を、雛里も朱里もときめいてだきしめていた。

ふむ、これもトキメキ死だな。

あ、愛紗も傷ついた顔をしてるけど、そりゃ自業自得だな、うん。

く 雲関愛紗

私の料理の才能は皆無らしい。

記憶の中にある練習でも、ずいぶんと迷惑をかけた。

だから心機一転でがんばりたかったのだが、一刀は困っているらしい。

イヤだとは直接言われていないが、あれだけ怯えられると心が折れる。

仕方ないことだが、恐怖は人を曲げるものなのだから。

とりあえず、キッチン周りの準備はみんなに任せ、私は翠と共に周辺施設の確認に回った。

「しかし、一刀をあんなに怯えさせるって、どんな料理出したんだ？」

「・・・レシピにちよつと手を加えただけだ。」

それである事態なのだから、才能が足りないのだろう。

「まー、愛紗の場合、レトルトを暖めるだけで爆発させるしな。」

事実だけに言い返せない。

「・・・なあ、愛紗。逆に考えろよ。」

「・・・逆？」

「料理上手な旦那に家を守らせて、妻が外で戦う、燃えないか？」

！！！！！！

衝撃が背中を走る。

なんて野心的な、なんて巧みな、なんてすばらしい発想なんだ！！
目から鱗が滝のように落ちる思いだ！！

「翠、貴様、いや、ソナタはなんという知恵者かあ！！」

私は賞賛を大いに浴びせかけるのであった。

そうだ、私が外で戦い、一刀が家を守る。

なんと効率的で取捨選択上申し分無いものか！！

ああ、すばらしい、バラ色の未来が開けた気がする。

統合生徒会ルート 第一話（後書き）

次話はそろそろ第三所属教師との爛れた話を準備しています。

というか、統合第三生徒会編の肝になる予定です。

おたのしみに。

統合生徒会ルート 第二話（前書き）

おまたせしました！

統合生徒会ルート 第二話です

個人的に、第三生徒会ルートの頃から書きたかった拠点です。
どうか書けました。

統合生徒会ルート 第二話

統合生徒会ルート

第二話

く北郷一刀

実に子供っぽい感情だなんておもう。

散々弄ばれたのか弄んだのかわからない夜が明けて、自分のベツトに折り重なる二人の女性をみて、胸の内の黒い感情が渦巻くのをかんじる。

経験豊かで自分の経験値をガンガンあげてくれる大人の女性、桔梗せんせいと紫苑先生。

良くないことだと思っけど、よるとさわると夜討ち朝駆けで「して」もらってしまっている。

そう、「して」「もらっている」だけなんだ。

それなのに、そう、本当に情けない話なんだけど、子供っぽい感情が頭をもたげてしまう。

ああ、本当に情けない話だ。

「ふーん。なにがそんなに情けないのかしら？」

「・・・子供っぽいんですよ、僕」

「そうか？ 実に荒々しい益荒男っぷりじゃったぞ？」

「そっいうんじゃなくてですね・・・。」

「じゃなくて？」

「なんで二人の初めてが僕じゃないのかなあつて。」

「…………ぶっ」

気づけば二人に白状させられていました。

…………くう、泣ける。

ケタケタと笑う二人は、大きな胸で僕を押し挟む。

「あのね、一刀くん。焼き餅をみつともないなんてかくしてほしくないのよ？」

「逆に盛大に焼いてほしいぐらいじゃな」

「ふふふふふ（ははははは）」

ああ、なんて格好悪いんだろう。

でも、二人の笑いが、印象的に残った、そんな記憶だった。

そんな暖かな朝を思い出したのは、いまが暗い朝の空を見上げて
いるからだろう。

真っ暗な空だった。

深々と降り積もる雪に埋もれながら見上げる空は、どこまでも遠くどこまでも深かった。

どこからあの雪は降りてくるんだろう、と熱を帯びてぼーっとなつた頭で考えた。

いや、何で頭が熱いんだ？

つつか、熱を帯びるって・・・

「ぐ、う、あ・・・。」

思考が灼熱して思い出せないけど、なぜ僕は彼処にいないんだろうと言う疑問が閉めている。

学習の天地、三つの生徒会がせめぎあう夢の大地。

見上げるかすんだ空は、うつりこむ周囲の風景は同見ても「そこ」ではなかった。

ああ、彼処に帰りたい。

ああ、彼処に帰るんだ。

雪蓮、いまなら君の灼熱の想いが解る。

自分のいるべき世界を取り戻したいと、僕は手を伸ばした。

く????

アパートの前の除雪を終えてみると、なぜかそこに男の子が埋もれていた。

何となく透明感のある男の子で、真っ白な学制服を着ていた。

ちよつとみてみると真っ赤な顔で荒い息をしていて、みるからに「風邪」を引いていそうで。

まずいかしら？

そうおもって近づこうとすると、彼はぐつと手を伸ばして、何かをつかもうとしている。

その姿が切なくて、私は彼を抱きしめて部屋まであげてしまった。ルームメイトはイヤそうな顔をしていたけど、そう言うことで反対はしない優しい娘なので、苦笑いで答えあう。

「ん？ おもしろいものを持っているぞ、この男」

ルームメイトが差し出したのは彼の懐には入っていた手帳。

みれば、聖フランチェス学園の校章。

裏には彼の写真と登録番号……。

「え？」

「おもしろいじゃろ？」

面白いどころではなかった。

まるで、まるで、お祭り騒ぎがやってきたかのような、そんなトキメキを感じた瞬間だった。

「ね、この子、しばらく面倒みちゃだめ？」

「ふっ、反対する分けなからう？」

二人は面白い玩具を見つけた猫のような顔で、彼の顔を見つめていた。

く北郷一刀

目を開けると、そこがアパートの一室だと言ったことが解った。そして、何となくだけれども、一人以上で暮らしているのが解った。

カップルかな、とは思ったけれど、それにしても男の持ち物がないのでルームシェアとか、そういう感じかもしれないと思った。

「あ、気づいた？」

部屋の扉が開いて、女性、というか少女？がこちらを見つめていた。

年の頃は、そう、高校二年とか三年とかそういう感じ。 . . .
にしては、その、かなりスタイルがよすぎる。

そっちに目がいかないように集中するのが大変すぎだ。

「ねえ、三日も寝込んでたけど、おなかすいてない？」

正直に言えばペコペコだ。

空腹で起きたといっても過言じゃない。

だからゆっくり頷くと、彼女はうれしそうにほほえんだ。

「そ？　じゃ、何か作ってくるわね」

パタパタとスリッパの音を立てて彼女が消えた。

かわるようにもう一人の女性が現れる。

いや、風格はあるけど彼女と同じぐらいの年だろう。

あの島にいと、そう言う目が鍛えられる。

「ん？ おお、気づいたか。」

にこやかな笑みでその人はベットの横に座った。
こちらにも凶悪なスタイルで、目のやり所に困る。

「で、具合はいいのか？」

「・・・あい。」

のどがガサガサで声にならなかった。

「あ、無理してしゃべらんでもいいぞ、北郷一刀」
「え、？」

驚いて彼女の瞳をみると、目の前に引つ張り出されたのは僕の生徒手帳。

なるほど、身元ぐらいは調べる、か。

理解した旨、頷くと、今度は彼女は面白そうに壁を指さした。
そこにはカレンダーがあった。

12月って、え？

いや、注目すべきところはそこじゃない！

「平成X年」

・・・え？

思わず彼女をみると、うれしそうな顔で生徒手帳の入学年度を指さしていた。

「面白そうな話を聞けると思ってるぞ、北郷一刀くん？」

タイムがパラドックスで未来が書き変わったりしないのかあ！？
思わず別の意味でのめまいを感じる僕だったけど、二人の追求はお構いなしであった。

く 巖 桔梗

実に面白い話だ。

彼の話では、この先「南洋校舎」が復活するというのだ。そして我が母校の教員として私と紫苑が舞い戻り、南洋校舎で教師をしているというのだ。

実に面白い。

加えて、この少年、北郷一刀は南洋校舎開設後初めての男子生徒として学習しているという。

南の島、白い砂浜、若い生徒……なんだか背徳的だなという
と、少年は真っ赤になった。

うぶだなあ、とにやついてところ、シリを紫苑につねられた。

うん、こういう焼き餅もかわいいぞ、紫苑。

それはさておき、未来を知りたい私たちであったが、色々と知っ
てしまうと面白くないだろうから、一つのことだけを集中的に聞く
ことにした。

彼にとつての「今も」、私たちは一緒にいるか、だ。

さすがに永遠の誓いはできないが、少なくとも私たちの今の状態
に近い関係が結べていられれば、それに越したことはないと思うか
ら。

その質問はすんなりと答えが返ってきた。

「はい、今も仲が良い二人ですよ……」

そうか、うん、そうか、うん。

「・・・璃璃ちゃんをまるで二人の子供のように育てていますから
なに？」

「紫苑先生の実子ですけど、桔梗先生も・・・」

思わず私の腕は、少年の首に延びていた。

「・・・少年、貴様、今なにを言った？」

ぎゅっと指に力がこもってしまう。

指先に少年の痙攣が伝わる。

「きさま、いま、なんと!？」

怒りに沸騰した私の頭を誰かの手がなでる。
いや、誰かではない。

窒息で既に真っ青になっている少年が、まるで愛しい者を見るよ
うな瞳で私を見つめ、そして撫でているのだ。

・・・今、私はなにをしているのだ？

「だめ、桔梗、だめー!」

紫苑に抱きしめられて我に返る。

私が手を離れた瞬間、咳込みと、そしてすごい勢いで呼吸を始め

た少年。

そりやそうだろう、まさに息の根を止められていたのだから。しかし、少年の語る未来は容認できなかった。

紫苑が、私の紫苑が妊娠？出産？育児？

なぜだ、なんで私の紫苑が！！

気づけば私は少年に抱きしめられていた。

寝起きの汗くさい、男臭い体臭なのに、ゆっくりと落ち着く自分に気づいた。

「・・・ごめんなさい」

耳ではなく、少年の体から響く声。

その響きに私は自然と瞼が重くなるのを感じていた。

く 忠 紫苑

衝撃的だった。

聞かなければよかったとすら思った。

私が、この私が、桔梗以外に抱かれるなんて想像もしなかったから。

だけど、彼の話す私は、子供が居る以外は理想的な未来像であり、信じられないけど幸せそうだった。

彼の持つ携帯電話には、その写真が写っており、私と桔梗とそしてかわいい少女が写っていた。

理屈じゃなく、その子が私の娘だと確信した。

これは時間や空間を越えて感じる事ができる女の勘だろう。ほかに体験をした人を聞いたことはないけど、多分、女ならば誰

もが理解できる感覚に違いない。

子を産み育てるといふ本能がもたらす奇跡の一種だろう。

そしてもう一つ、私はすぐに理解できたことがある。

この子の父親と、未来の私や桔梗の状況。

というか、ほんとうに大丈夫だったのかしら？

そんな心配を込めて、彼を見つめると、なんとなくばつが悪そうであつた。

まるでイタズラが見つかった子供みたい。

抱きしめていた桔梗をベッドに押し入れて、彼は延びをした。

すると胸を締め付けられるかのような臭いがする。

いままでこの部屋になかった臭い、男の臭いだった。

私と桔梗はこの臭いがイヤでイヤでたまらなかった。

だから付属大学までいつて、その上で教師としてフランチエス力に帰つてこようと考えていた。

そう言う意味では目指す未来がかなった話だった。

でも、今思う。

この臭いにトキメク理由が解っているから。

まるで未来に引き寄せられるように想いが加速する。

だから、自然と彼の手を取った。

「・・・おぞうすい、作つたの。食べる？」

にこやかに笑う彼の顔を見て、トキメいた。

・・・もつと踏み込むつもりだったけど、さすがに桔梗が寝ている横はまずいものね。

一刀が部屋に住み着一週間になろうとしていた。
時は年末、三人でこたつに入って年越しそばをすすっていた。
なんというか、こう、三人は自然になっていた。

女二人も自然だったけど、それ以上に一刀が居るのが当たり前になっ
ていた。

そんな一刀に操を捧げたのは間違いではなく、生涯の想いの一端
に思えた。

だけど、思う。

いま、今だけの一時期なのを知っている。

一刀は語らないけど、間違いなく一刀は未来に戻る。

そして再び出会うまで私と紫苑は彼を待ち続けなければならない。
時間にして……

いや、やめよう。

いま、こたつの中で握りあうことができる手があるという現実を
喜びに変えよう。

たとえ今私と紫苑が得た子種が、あの少女につながっていなくて
も。

く 忠 紫苑

それは、冬休み最後の日だった。

シンシンと雪が降る中、彼が雪かきをしている背中を見て抱きし
めなくちゃいけないと思った。

桔梗も同時に感じたようで、左右で彼を挟む。

すぐくつれしそくにほほえむ彼だけど、ひどくうつろな笑顔だっ
た。

「桔梗、紫苑、あなたたちの初めてがもらえてうれしかった」

未来で関係していた彼は、誰とも解らない私たちの初めての相手に嫉妬していたそうだ。

そう聞いた途端、ひどく愛しいものであることに気づく。

まるで、かなり年下のやんちゃ坊主のようだった。

それでいて女を喜ばせるプロホストのようで。

ああ、もう今から彼に出会うのが楽しみすぎる。

「またで会える日を待ってるぞ」

「すぐ食べちゃうんだからね」

照れくさそうにほえんで、そして彼は消えた。

腕の中から消えた彼を思い、滝のような涙を流す桔梗。

だから私は抱きしめた。

まだ、まだまだあきらめなくて良いことを教えるために。

「桔梗、よくこれを見てね？」

私が差し出した彼の携帯をみせながら。

く 北郷一刀

帰ってきた、そう感じる事ができたのは、真夏のような日差しのおかげでもなく、夏の空気のおかげでもなかった。仰向けで目を覚ました僕をのぞき込む紫苑先生と桔梗先生の存在が、今を強く感

じさせた。

「どうじゃったか？」

「ふふふ」

いたずらっ子のようなほほえみの二人を僕は抱きしめた。

二人は抵抗せずに抱きしめ返す。

深呼吸で周囲を見回せば、そこは統合生徒会の僕の部屋で、入り口には何故か雪蓮が微笑みつつ立っていた。

すごく怖い笑顔で。

「・・・巖先生、忠先生。」

「なにかしら？ 雪蓮ちゃん」

「「鏡」を貸せとおっしゃるから何かと見れば、なんで一刀を過去に飛ばしたんですか？」

「そりゃ、タイムパドックス回避の為じゃな」

「・・・ほほお、ではもう一つ。」

「なにかしら？」

「あと何度必要なんですか？」

ふふふふふ、と笑う紫苑先生と桔梗先生。

「ずるいぞ、わしにも！！」

なぜか二人にすぎる祭先生。

「少なくとも、五年前に一度行ってもらわなんと、な」

「ええ、一度じゃなくてもいいんですけどね」

ほほと笑う二人は置いておいて、なぜか僕は雪蓮に首根っこを捕まれて、会議場へ引き面れていった。

さらに何故かそこには、「みんな」がいた。

とても良い笑顔の「みんな」が。

統合生徒会ルート 第二話（後書き）

久しぶりの南洋校舎でした。

書く気が盛り上がると、それなりにいい感じになるなあ、と思いました。が、南洋校舎の拠点でもっとも書きたかった「紫苑&桔梗」が書けてしまい、ちょっと気が抜けています。

やはりカリンで気合いをあげるしか・・・？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5390/>

聖フランチェスカ学園南洋校舎～真・恋姫†無双異伝

2011年4月10日05時32分発行